

筑後川水系河川整備基本方針の変更について ＜参考資料＞

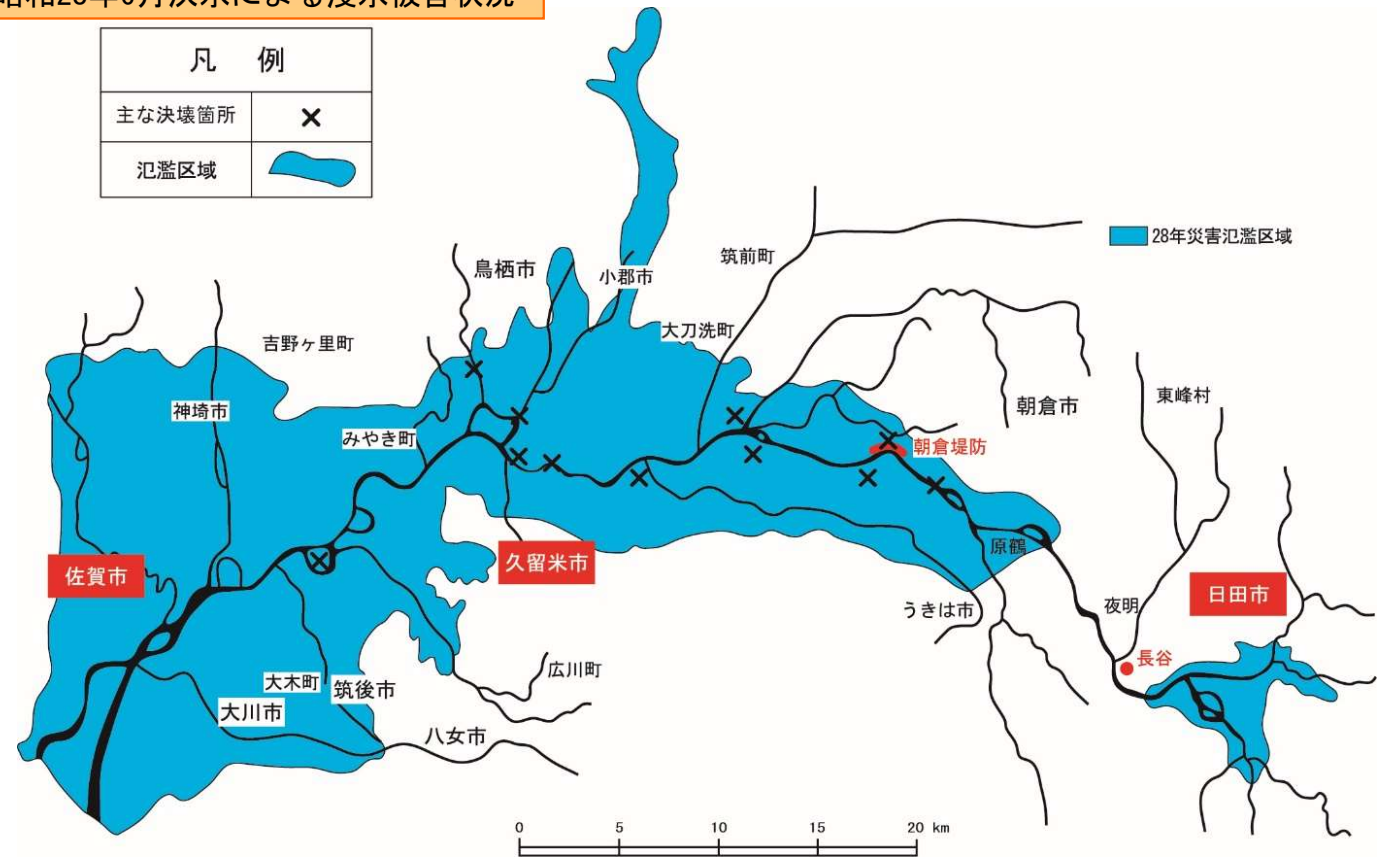
令和 6 年 1 1 月 1 5 日

国土交通省 水管理・国土保全局

①流域の概要

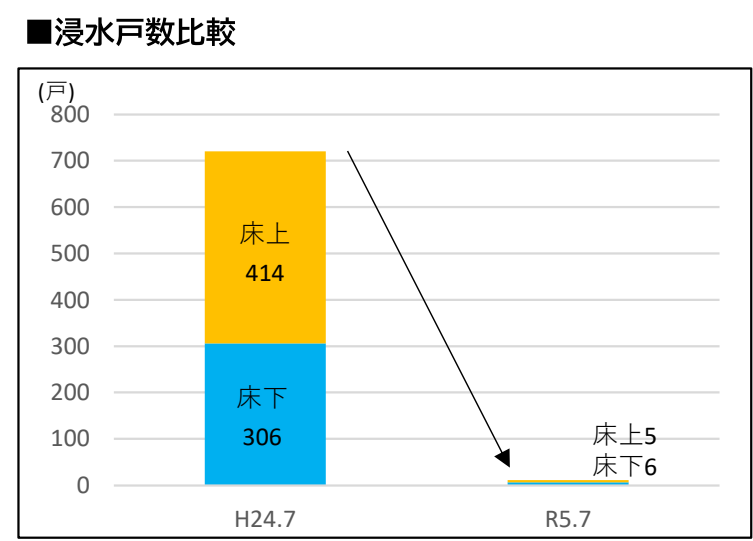
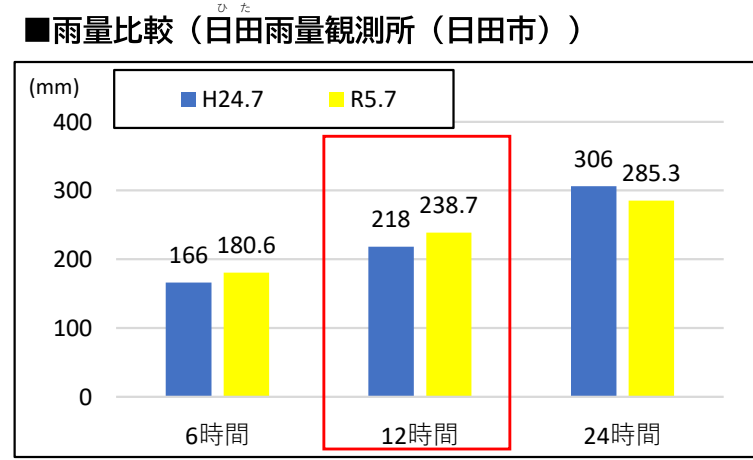
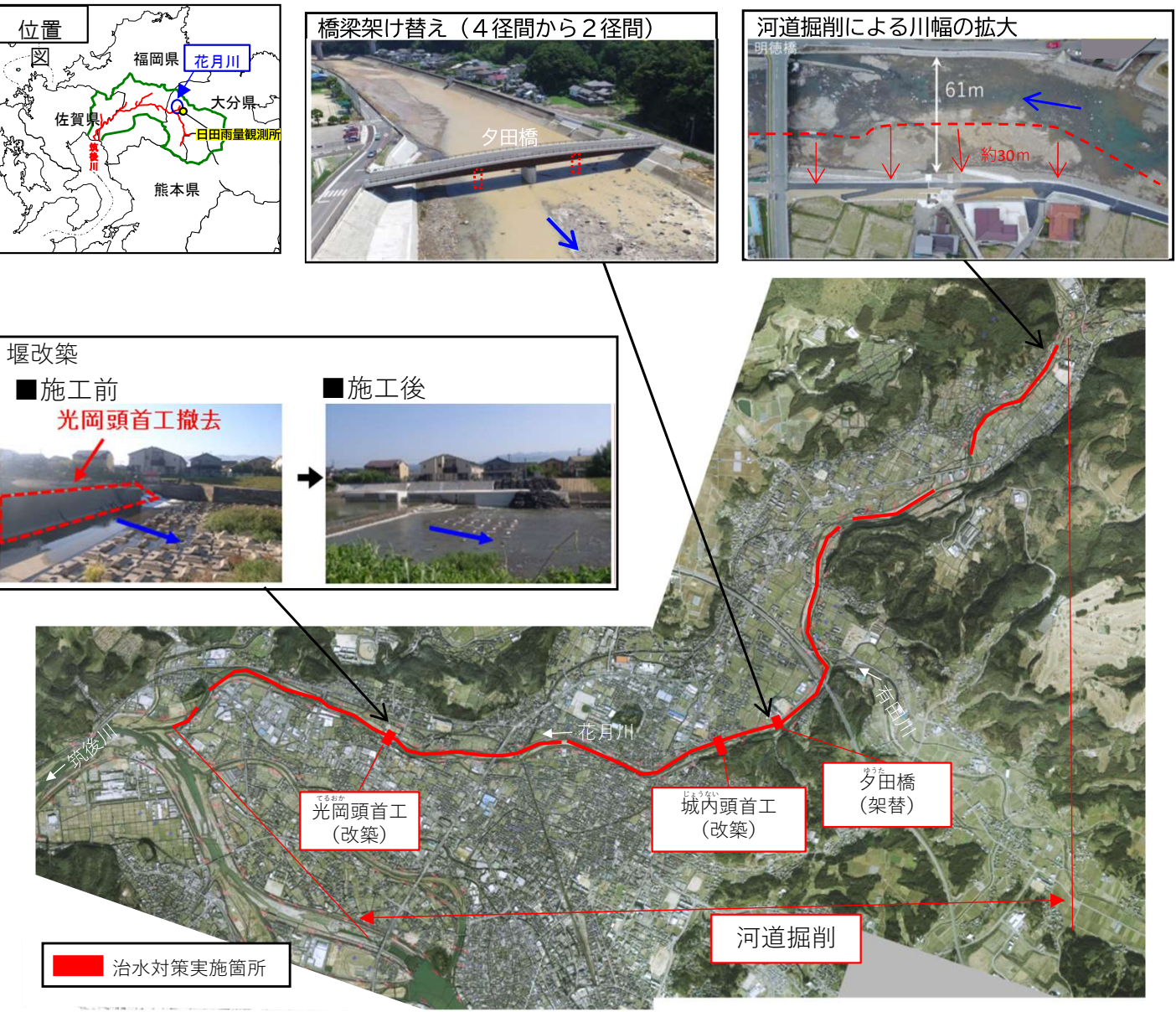
- 昭和28年6月の洪水では、当時の大臣管理区間（夜明地点下流）だけでも26箇所で堤防が決壊し、筑後川右岸50km付近の朝倉堤防の決壊は延長約600mに及んだ。
- この洪水による流域内の被害は、死者数147人、流出全半壊家屋約12,800戸、床上浸水家屋約49,200戸、床下浸水家屋約46,300戸、被災者数約54万人に及ぶ甚大なものであった。

昭和28年6月洪水による浸水被害状況



○ 花月川の氾濫により日田市に大きな被害をもたらした平成24年7月出水と同規模の雨量を令和5年7月に花月川流域で観測（日田雨量観測所では12時間で238.7mmの雨量を記録）したが、花月川の氾濫による家屋浸水被害は大幅に減少した。

○ 花月川においては、平成24年7月出水以降、これまでに河道掘削による川幅の拡大や堤防整備、橋梁掛け替え、堰改築を進めてきており、これらの治水対策の効果が発現されたものと考えられる。

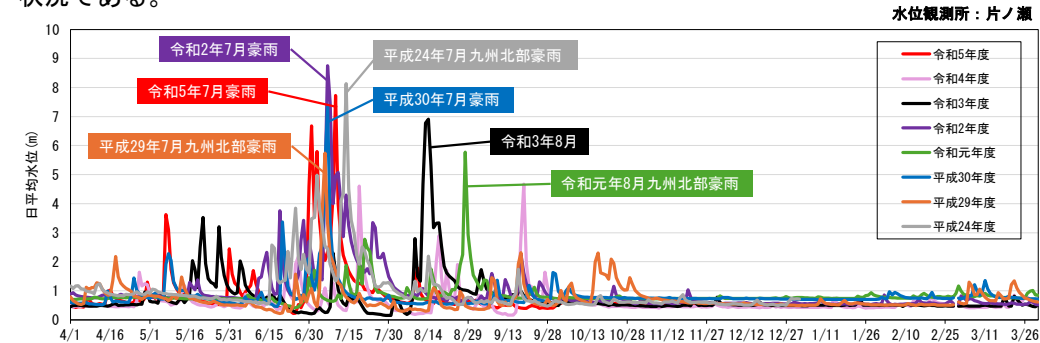


頻発する豪雨による河川環境への影響

- 近年の河川環境の場の変化として、ツルヨシ帯、ワンド・たまりの面積は区間によって変動がみられ、自然裸地は増加傾向がみられる。
- 魚類の確認種数の経年変化をみると、下流部・中流部・上流部別ともに、過年度と同程度の確認種数となっている。
- ワンド・たまり、水際植生帯に依存するとされる氾濫原性魚類については、確認個体数の減少が一部確認されている。
- タナゴ類の減少要因として、大規模出水によりインパクトを受け、氾濫原環境の減少、産卵母貝の生息分布の変化などが考えられる。

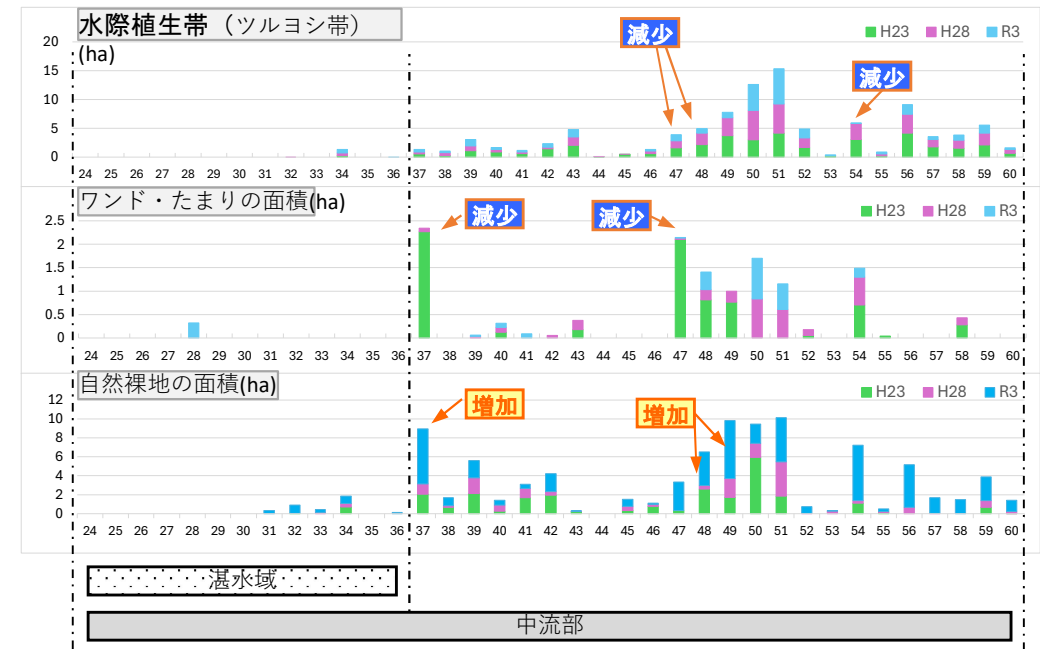
近年の出水の状況

近年、令和2年7月に既往最高水位を記録するなど、大規模出水が毎年のように発生している状況である。



湛水域・中流域の水際植生帯（ツルヨシ帯）、ワンド・たまり、自然裸地の分布状況

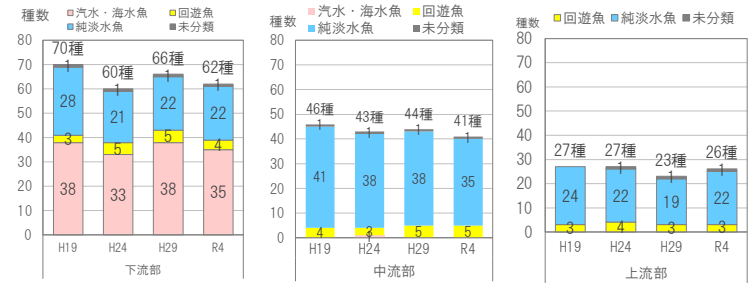
24kより上流の中流部において、水際植生帯（ツルヨシ帯）やワンド・たまりは区間によって増減がみられ、自然裸地においては、増加傾向がみとめられる。



魚類の生息状況

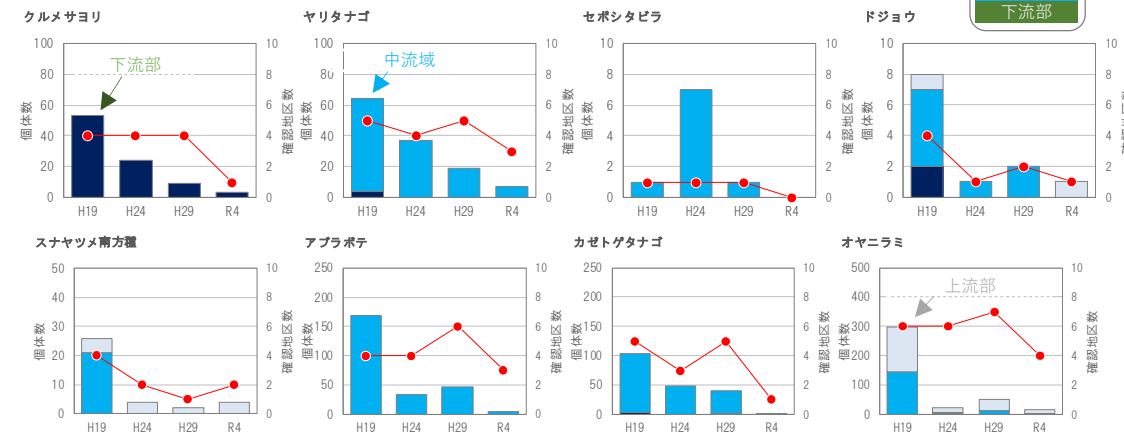
【全体の確認種数】

下流部は汽水・海水魚が多く確認されているが、最新の調査結果（R4）と過年度と比較すると、各地区ともに確認種数の顕著な変化は確認されない。



【注目すべき種の確認個体数と確認地区数】

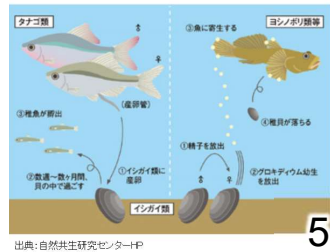
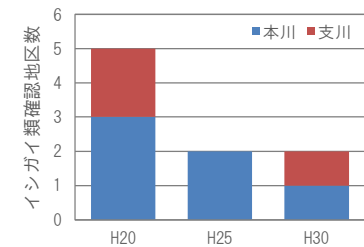
- ・ 水際の抽水植物を産卵基盤とする汽水魚クルマサヨリの確認個体数の減少傾向がみられる
- ・ 氾濫原性の魚類セボシタビラやドジョウは、中流域（R4調査）では未確認となっている。
- ・ ヤリタナゴ、アブラボテ、オヤニラミなども個体数の減少傾向がみられる。



※H19、H24は調査地点4地点、H29とR4で支川が2地点追加され、合計6地点

【タナゴ類の産卵母貝の減少】

タナゴ類はイシガイやヌマガイ等の二枚貝類の殻内に産卵するため、産卵母貝の生息場を保全していく必要がある。



【新規利水補給計画】

○ 新規利水は、江川ダム、寺内ダム、筑後大堰、合所ダム、大山ダム、小石原川ダムの先行開発により確保されている。

【不特定補給計画】

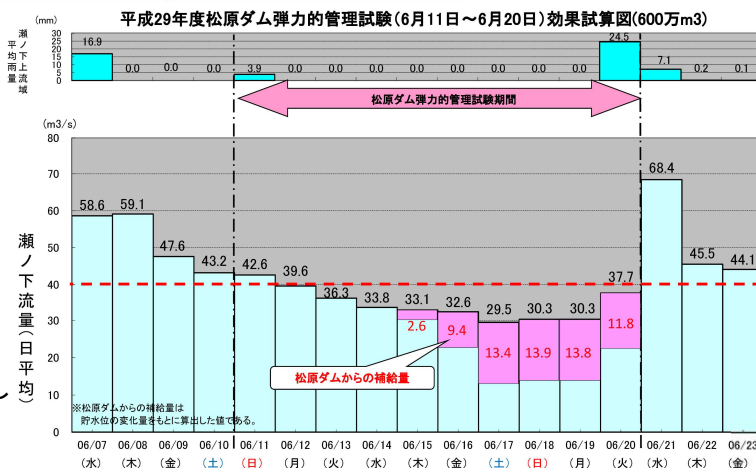
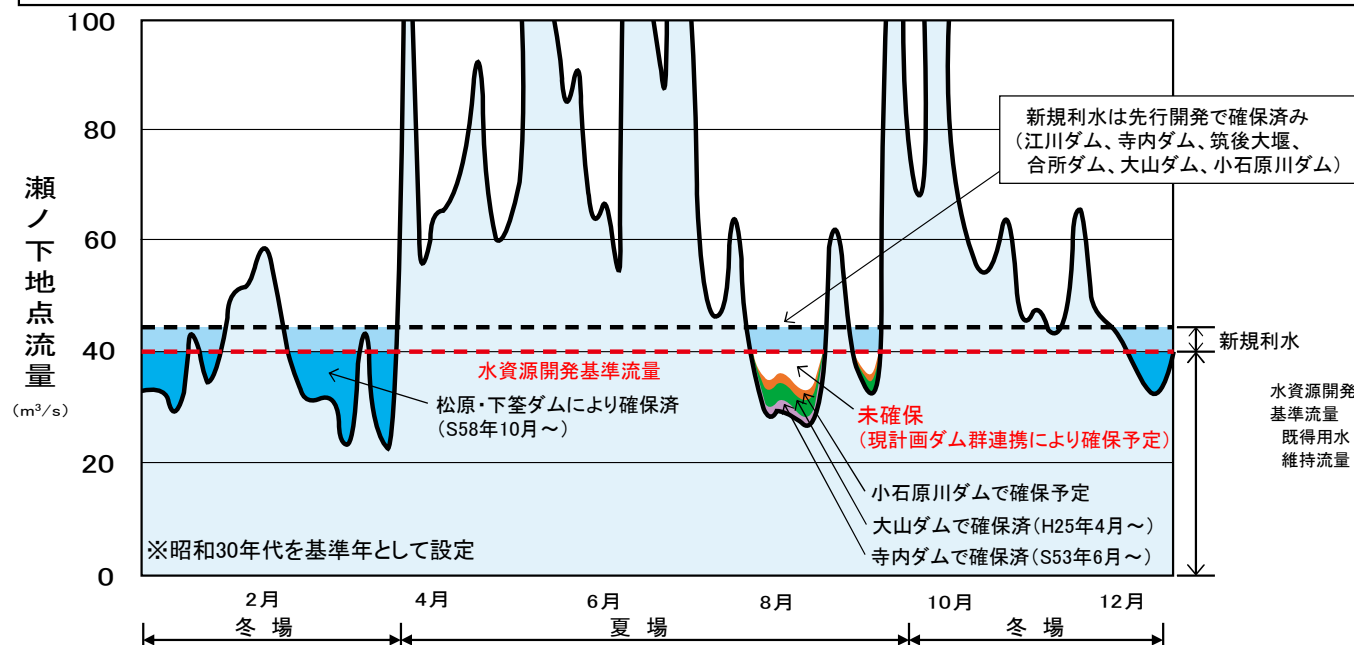
○ ダム地点下流の利水基準点については、各ダムにより補給することとしているが、筑後川本川の各地点（瀬ノ下、夜明、日田など）については、不足量全てを単独ダムで補給することは困難であることから、当該地点上流の各ダム毎の流域面積比等により補給割合を定め、上流ダム群として確保する計画としている。

○ 瀬の下地点流量については、ノリ期は、昭和58年に運用開始した松原・下釜ダム再開発事業により確保されており、夏場については、大山ダム、小石原川ダム及び現在事業が建設段階に移行したダム群連携事業により確保することとしている。

○ 夜明地点、日田地点流量については、大山ダムにより不足流量の一部を確保することとしている。

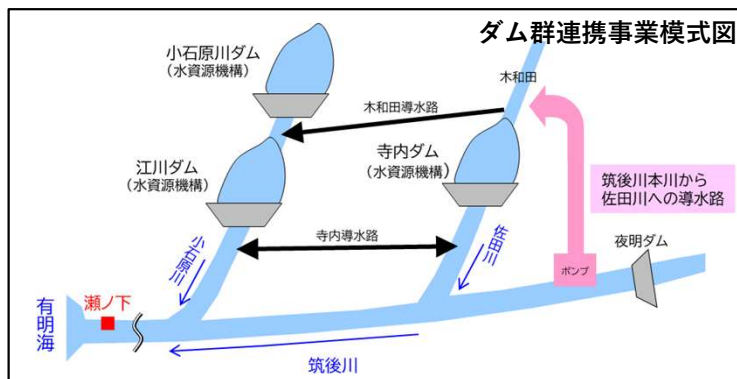
【その他】

○ 筑後川中流域においては、農業用水の取水が集中する6月中旬以降にたびたび河川流量の不足が生じていることから、平成13年度から松原ダムの洪水調節容量の一部を活用した弾力的管理試験を実施し、河川環境の保全に資することを目的として河川流量の確保に努めている。



【ダム群連携事業内容】

筑後川本川の流量が豊富なときに支川佐田川へ最大2.0m³/sを導水し、江川ダム、寺内ダム、小石原川ダムの利水容量の空き容量を活用して不特定用水を確保し、流水の正常な機能の維持を図ります。



【弾力的管理試験】

○過去事例

- ・ダム下流域の河川環境改善に役立ちました。
- ・流量の増加により生物に適した環境が増えました。

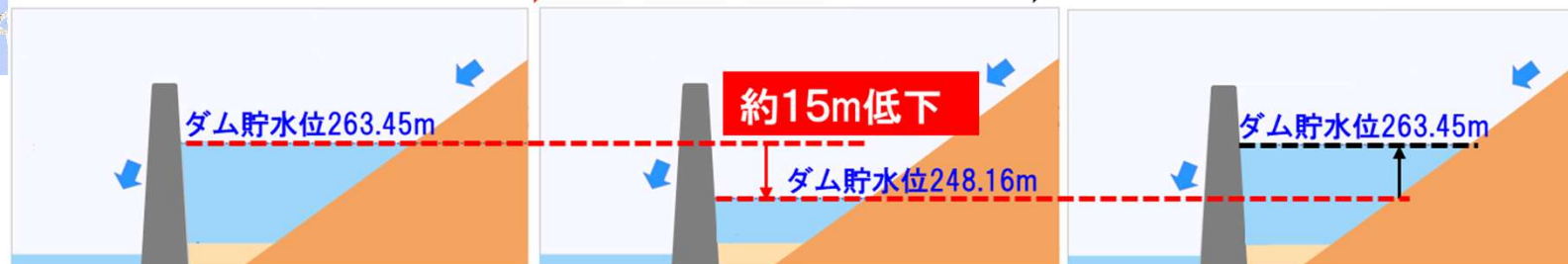
- [illegible]

No	ダム名	管理者	洪水調節 容量 (万m ³)	洪水調節 可能容量 (万m ³)	目的	型式
1	下笠	国土交通省	5,130	100	F.N.P	A
2	松原	国土交通省	4,580	130	F.N.W.P	G
3	寺内	水資源機構	700	541	F.N.A.W.	R
4	小石原川	水資源機構	410	378	F.N.W	R
5	大山	水資源機構	700	337	F.N.W	G
6	山神	福岡県	167	113	F.N.W	G+R
7	藤波	福岡県	200	45	F.N	R
8	江川	水資源機構	0	243	A.W.I	G
9	山口調整池	水資源機構	0	72	W	R
10	合所	福岡県農水	0	24	A.W	R
11	河内	鳥栖市	0	92	F.A	E
12	夜明	九州電力	0	54	P	G
13	地蔵原	九州電力	0	18	P	E
14	高瀬川	九州電力	0	18	P	G
15	水呑	筑紫野市	0	0	W	G
16	広川	広川町	0	73	F.A	R
17	松木	九重町	0	14	A	G

《事前放流開始 9/16 9時00分》

《事前放流終了 9/18 15時50分》

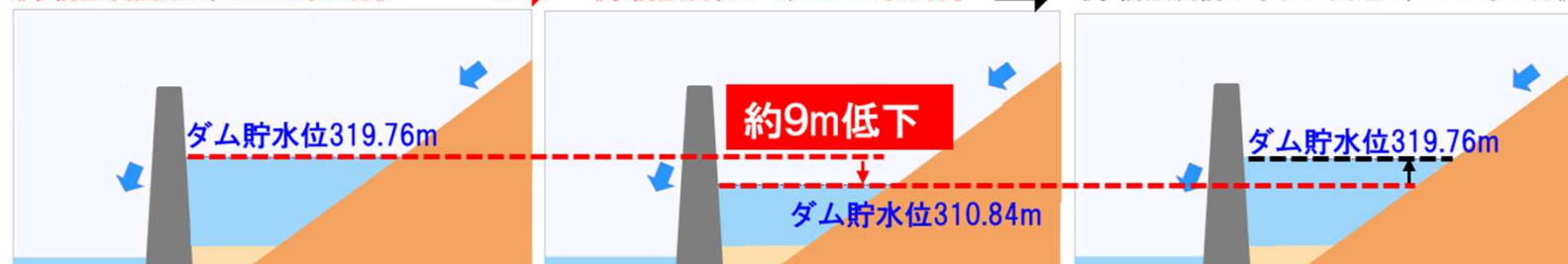
※台風14号は9/19 3:00頃に最接近
《事前放流前の水位に到達 9/21 2時30分》



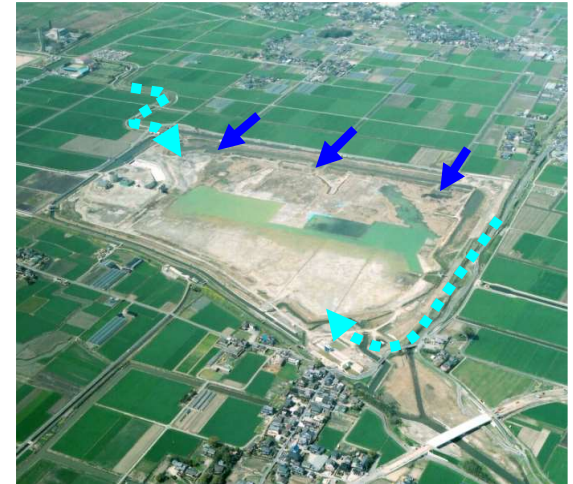
《事前放流開始 9/16 20時00分》

《事前放流終了 9/18 21時00分》

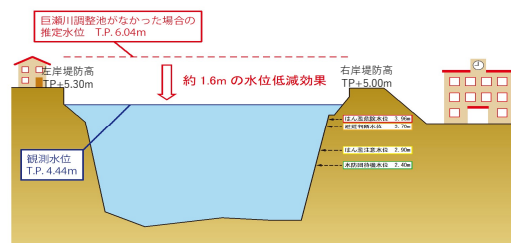
《事前放流前の水位に到達 9/21 7時20分》



-



位置図



平常時水位 T.P-1.5m
(平成29年8月1日)

洪水調節時の貯留状況

最高水位
T.P+6.14m(8月14日13時40分)

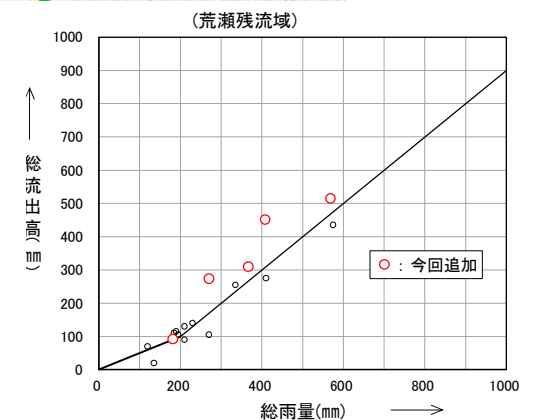
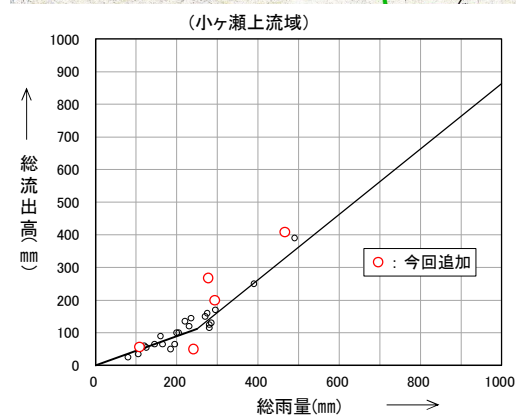
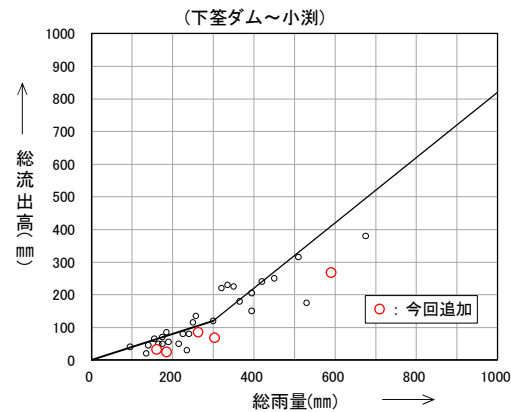
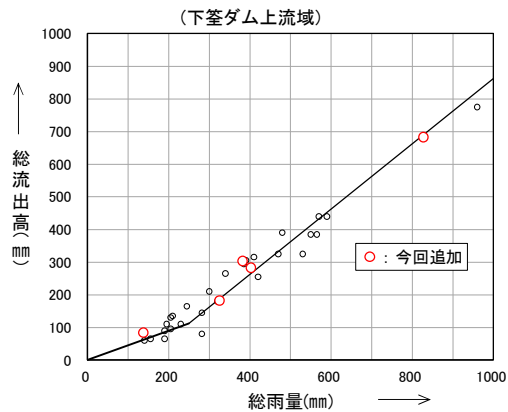
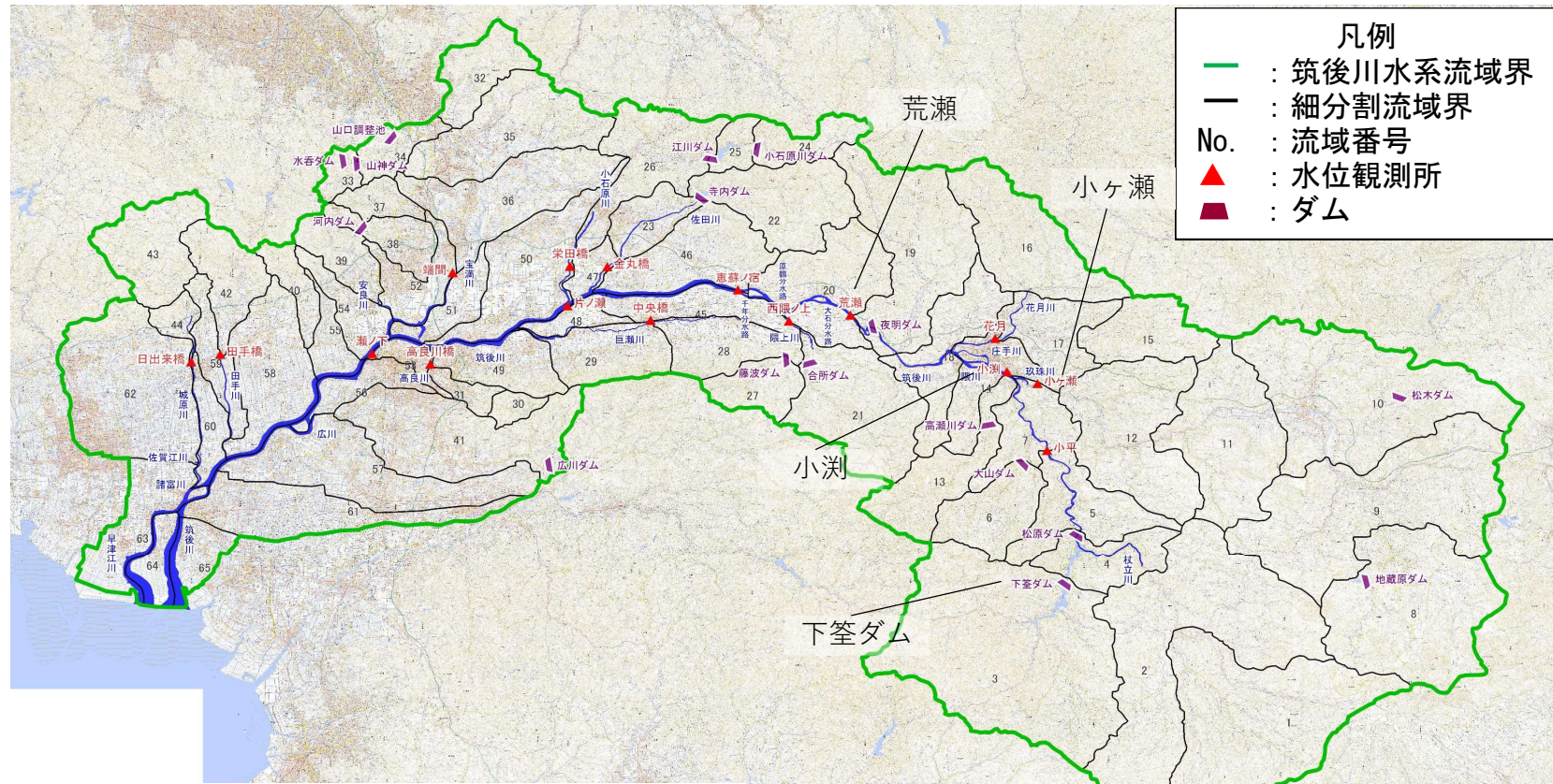


巨勢川東湊地点、学校橋地点位置図

②基本高水のピーク流量の検討

流出計算モデルの確認

○各洪水の総降雨量と総直接流出高の関係について、近年発生した洪水においても同様な傾向であることを確認。

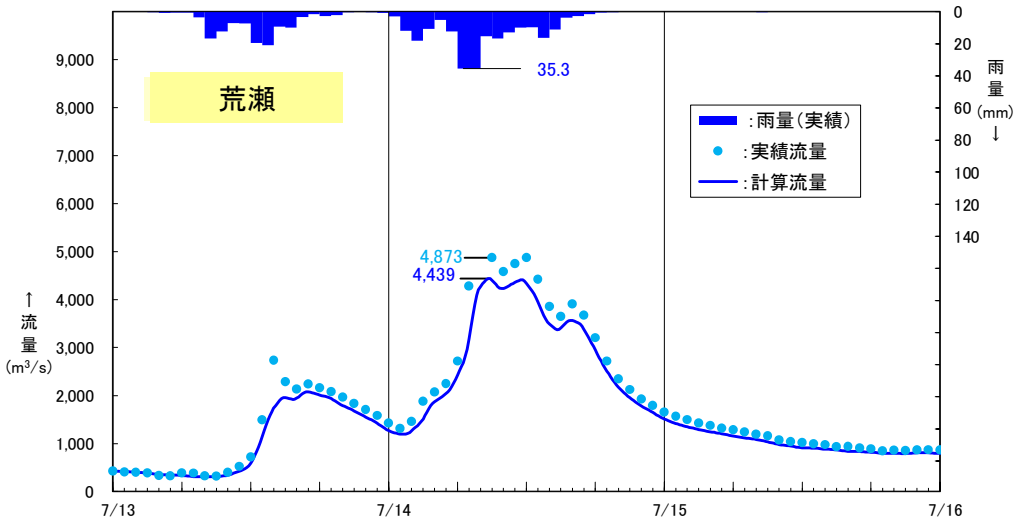


○ 主要な実績洪水を用いて、再現計算を行い、流出計算モデルの妥当性を確認した。

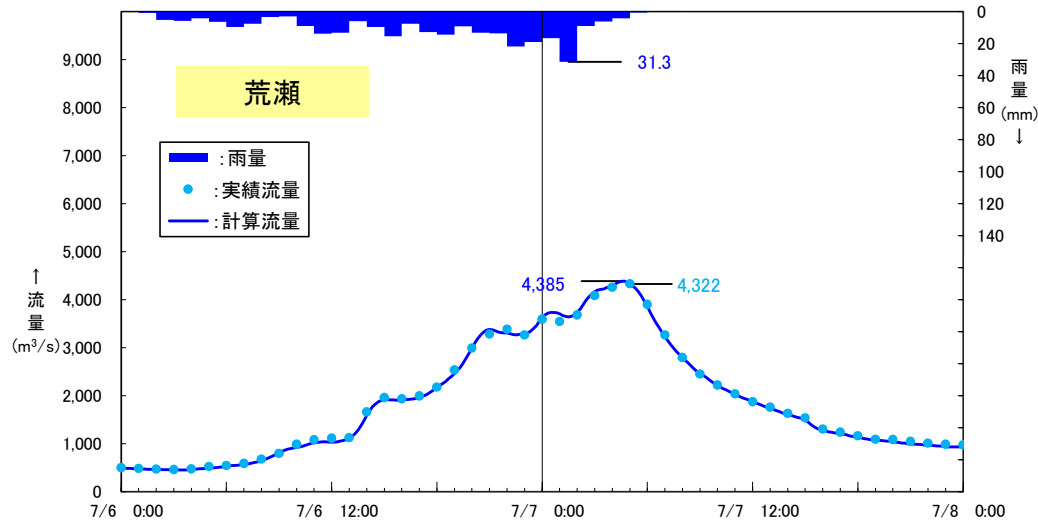
実績流量の再現性の確認

○ 主要降雨波形を対象に、計画流出率における基準地点荒瀬地点の再現性を確認。

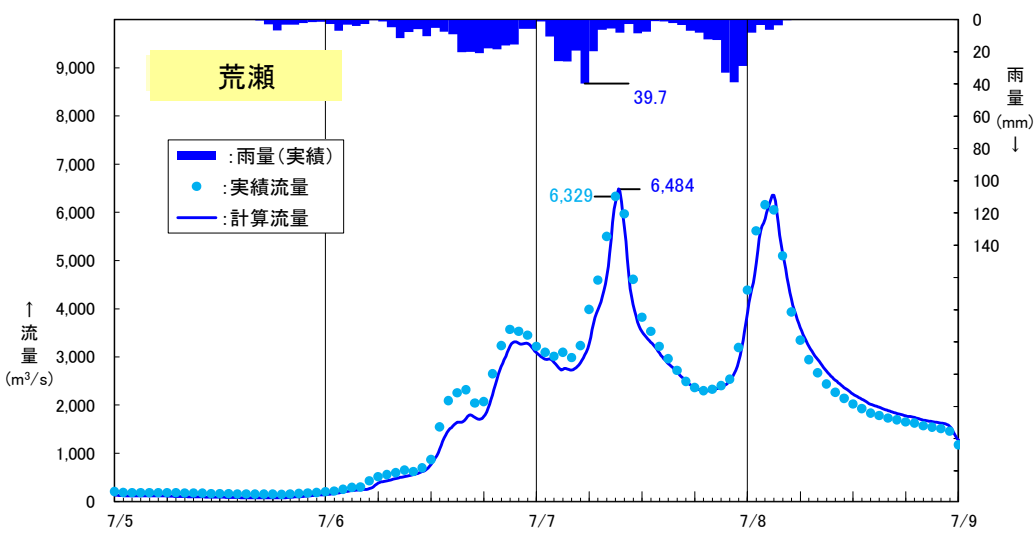
<H24.7洪水>



<H30.7洪水>

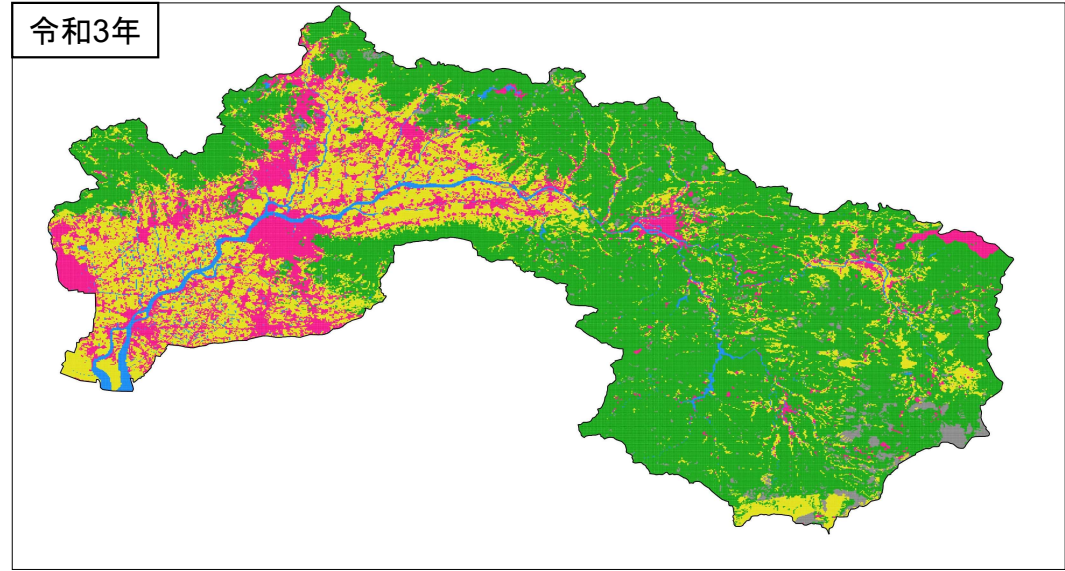
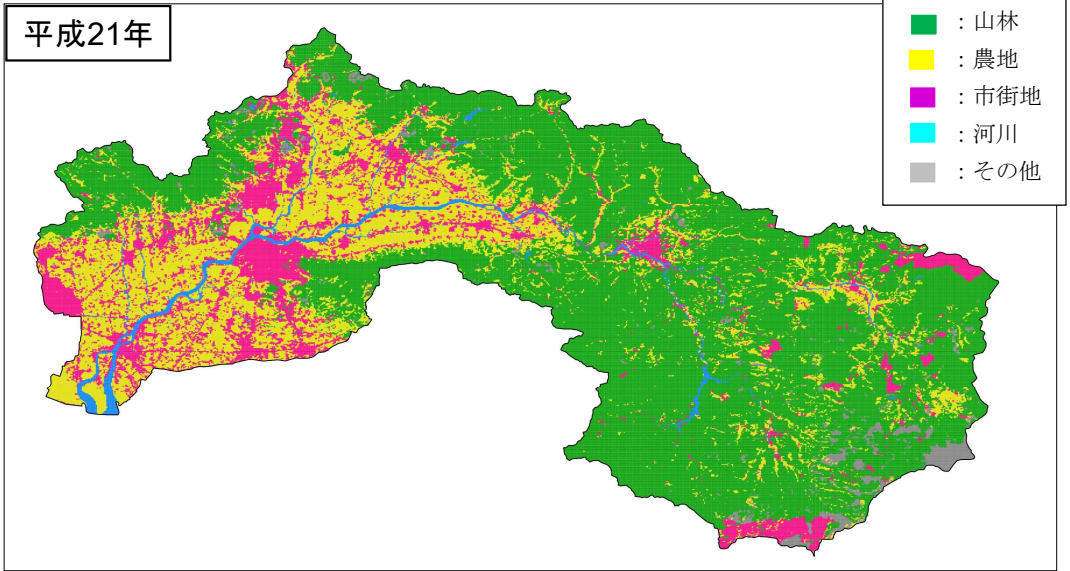
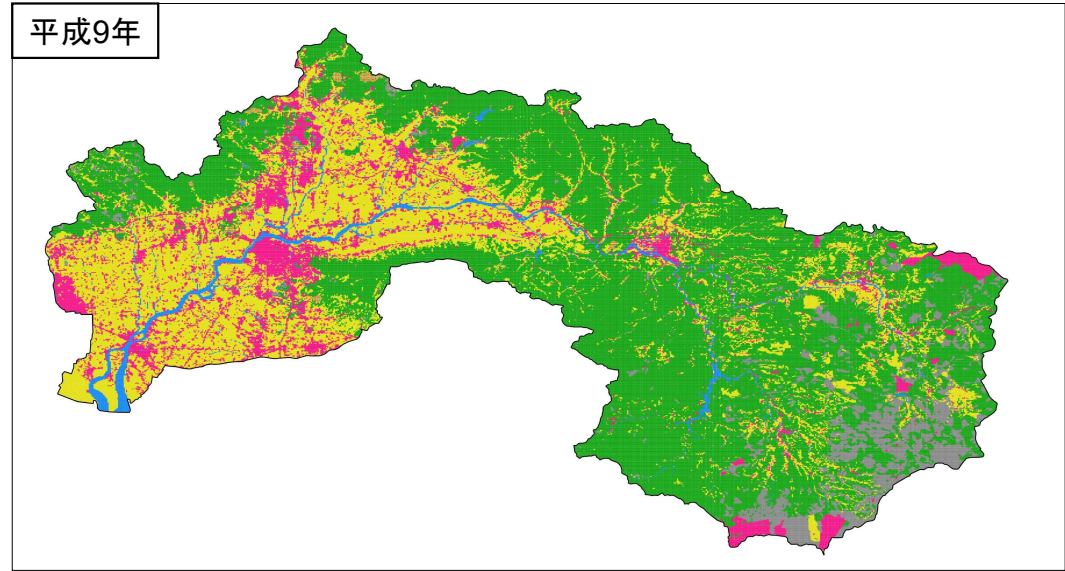


<R2.7洪水>



○ 筑後川流域の土地利用状況としては、山地等が約6割、農地等が約2割、市街地等が約1割となっている。現行河川整備基本方針策定当時（平成15年）と比較して、土地利用の大きな変化は見られない。

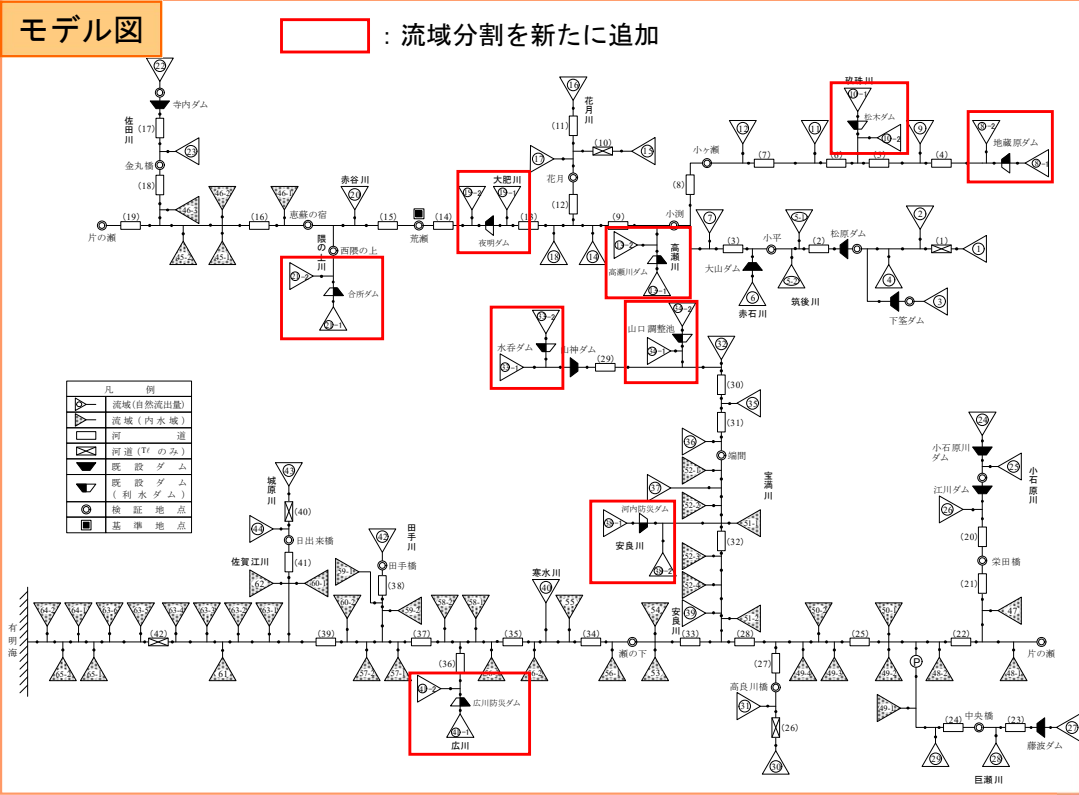
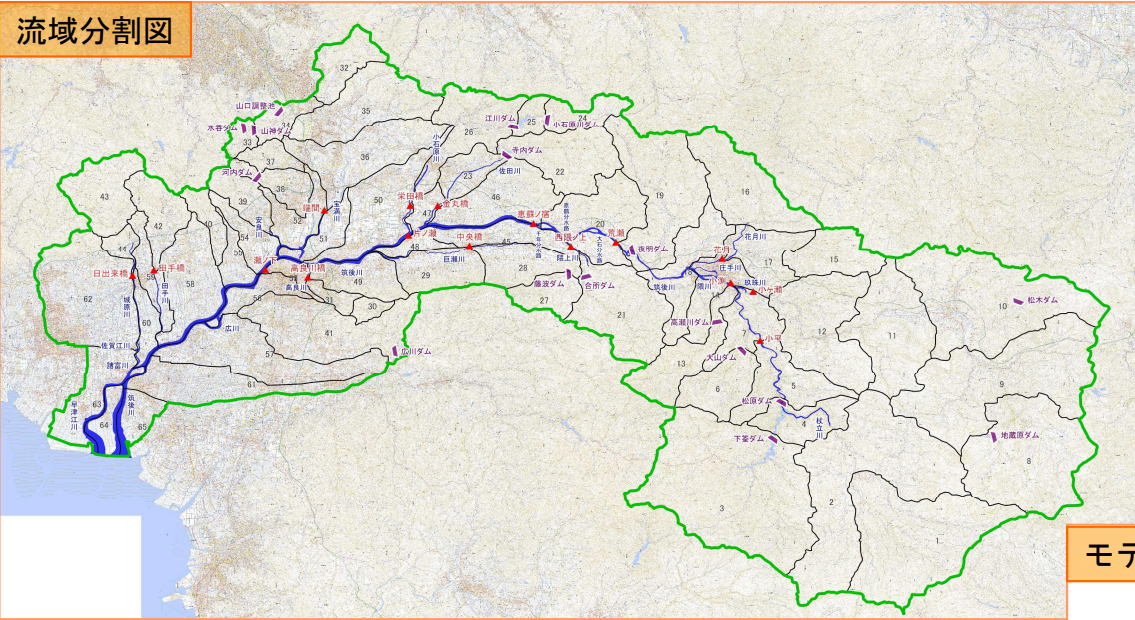
土地利用分布



土地利用の経年変化（出典：国土数値情報（土地利用細分メッシュ））

年	山林	農地	市街地	河川	その他
平成9年	52%	28%	11%	3%	7%
平成21年	57%	24%	14%	2%	2%
令和3年	57%	23%	14%	3%	3%

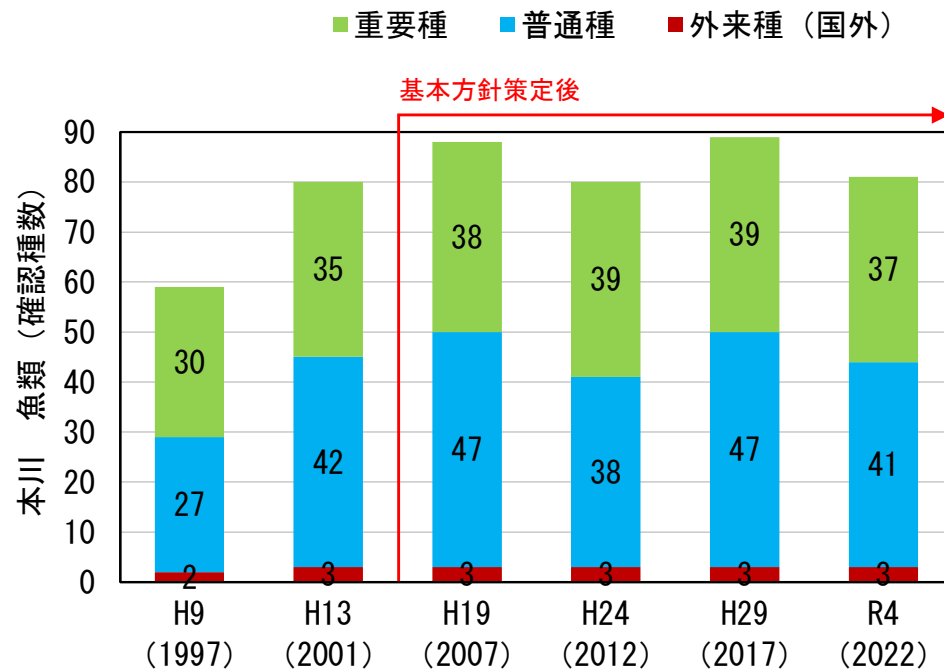
○ 近年発生した洪水を含め、再現性が高いこと、流域の土地利用の変化が小さいことに鑑み、現行の流出計算モデルを踏襲する。
○ なお、利水ダムによる流量低減効果を適切に反映するため、流出計算モデルの流域を利水ダム地点で新たに分割した。



⑤河川環境・河川利用についての検討

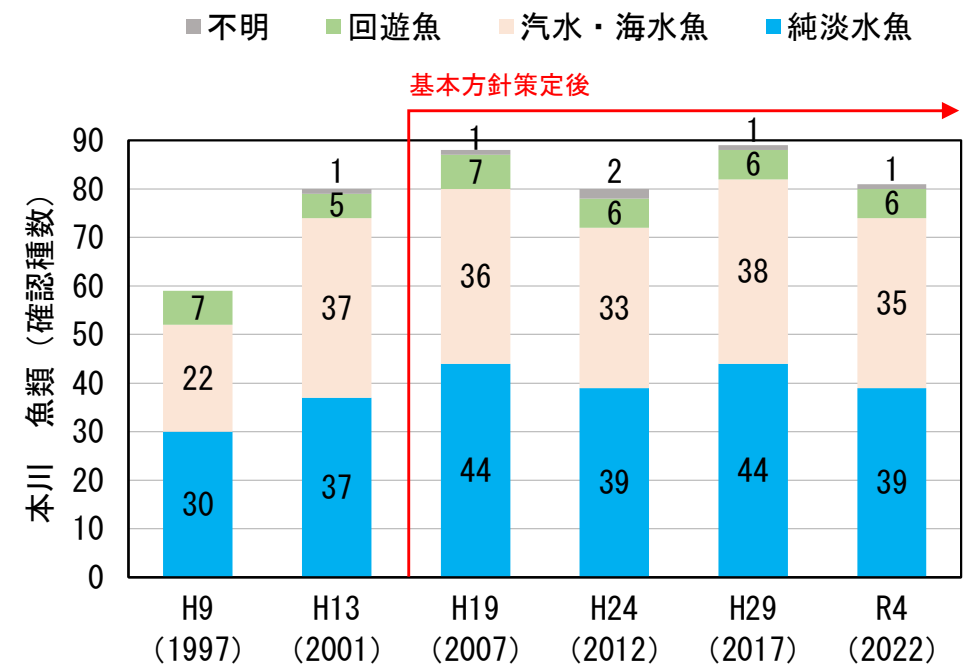
- 魚類について、重要種・外来種等で分類した場合と回遊型による分類を実施した。
- 基本方針策定後、魚類の確認種数は、各分類の種数に経年的に大きな変化は見られず、分類方法による傾向の差異も見られない。

魚類相の変遷



※河川水辺の国勢調査結果(筑後川)より整理

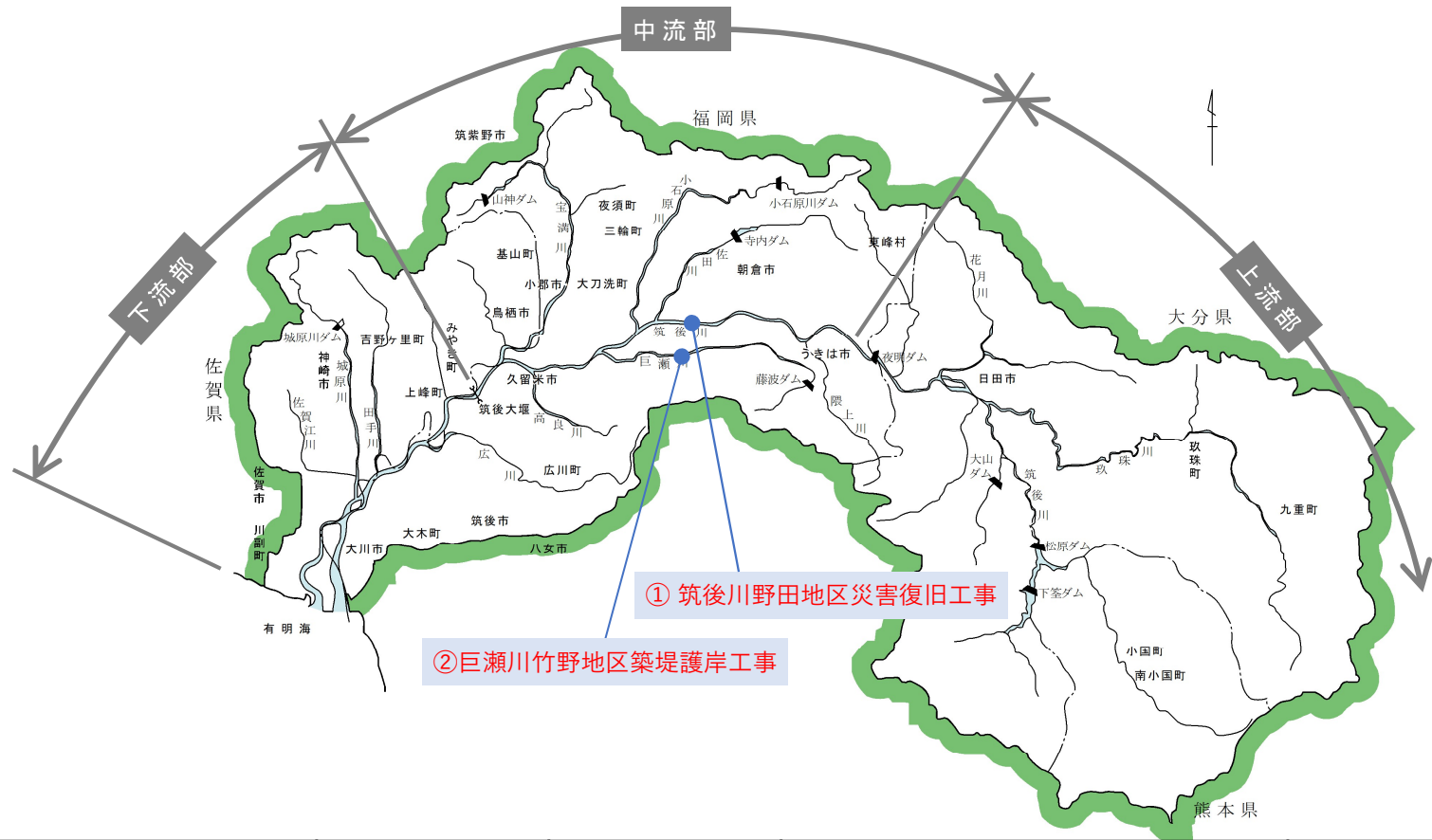
回遊型による変遷



※回遊魚には陸封魚の生活史をとる場合がある種を含む。
 ※純淡水魚には回遊魚の生活史をとる場合のある種を含む。

※河川水辺の国勢調査結果(筑後川)より整理

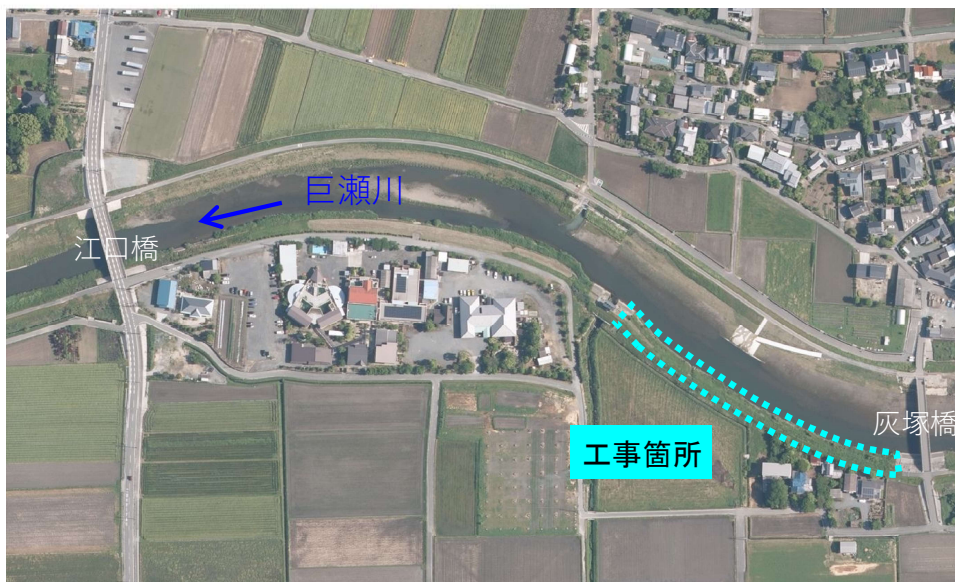
- 筑後川では、大正12年（1923年）、筑後川改修事務所（内務省）が久留米市に設置され、本格的な改修が始まった。この本格的な改修が始まってから、令和5年で（2023年）で100周年を迎えている。
- 筑後川水系および矢部川水系の直轄管理区間においては、平成27年度から毎年「河川工事環境検討会」を開催し、施工を予定している河川工事について、学識者の意見を聞きながら治水と環境の調和した河道整備を実施している。



	工事名	施工時期	工種	主な環境の保全・創出の内容	環境モニタリング
①	筑後川野田地区災害復旧工事	R3.10～R4.3	護岸・根固工	・ 現地発生石を用いた寄石の整備	【工事後】 ・ 魚類調査（R4.8）
②	巨瀬川竹野地区築堤護岸工事	R4.10～R5.5	築堤護岸工	・ 覆土による自然河岸の創出	【工事前】 ・ 魚類調査（H29.,R4） 【工事後】 ・ 魚類調査、二枚貝調査、植生（マコモ）定着状況調査（R5.8）

- 巨瀬川竹野地区では、治水安全度向上のため、築堤護岸工事を実施した。（令和5年5月完了、工事延長L＝約200m）
- 巨瀬川では、タナゴ類、オヤニラミ等の魚類の重要種が多く確認されており、タナゴ類はワンド・たまり、オヤニラミは水際の水生植物帯やツルヨシ帯が生息基盤となっているため、水際部の改変によるこれら動植物の生息・生育・繁殖環境への影響が想定された。
- そのため、隠し護岸の前面に覆土を行い多様な水際環境の創出を図るなど、動植物の生息・生育・繁殖環境を保全・創出する河川工事を行った。

■工事箇所（巨瀬川7.2k～7.5k付近）



■工事箇所の状況

【工事前（令和4年6月）】



【工事中（令和5年4月）】



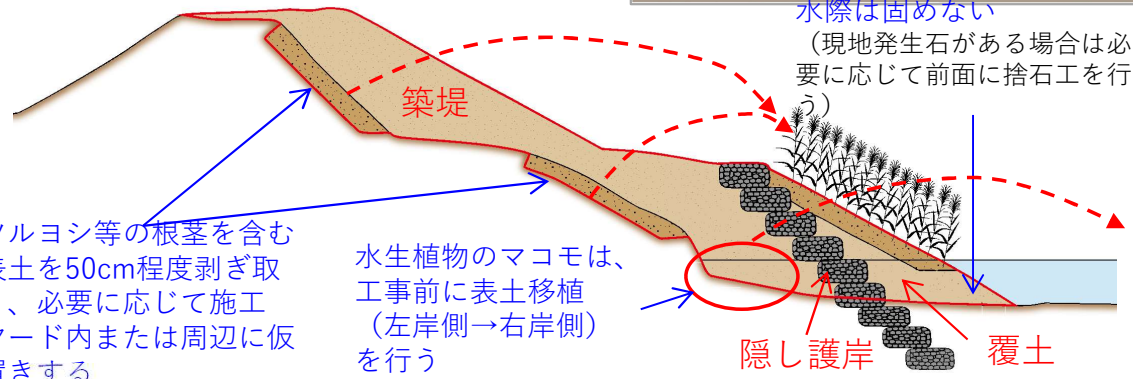
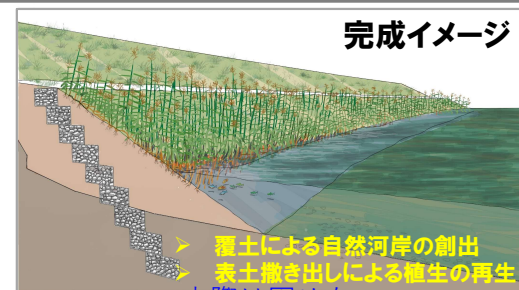
【工事後（令和6年7月）】



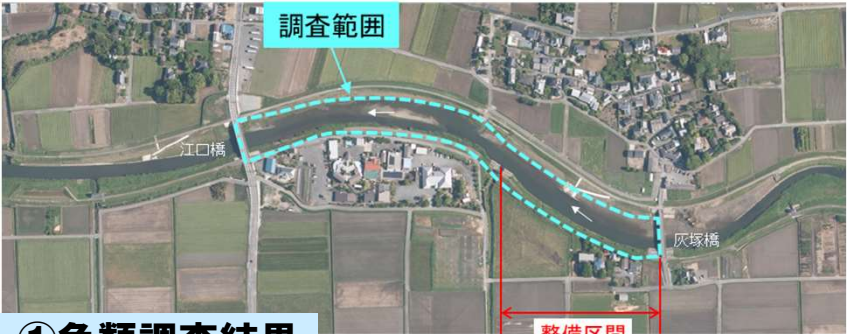
■築堤護岸工事における環境の保全・創出の内容

<環境の保全・創出の方針>

- ①河川の水の流れ（河川のダイナミズム）によって自然河岸が形成されるよう、隠し護岸の前面に覆土を行い多様な水際の創出を図る
- ②オヤニラミ（魚類）やヒクイナ（鳥類）の生息基盤となる水際付近の水生植物帯やツルヨシ帯を再生させる



○河川工事による環境の保全・創出の状況を確認するため、環境モニタリング（魚類、二枚貝、植生定着状況調査）を実施した。



①魚類調査結果

- R5.8.24に行った魚類調査の結果、合計33種が確認され、この内、重要種は13種、外来種は5種が確認された。
- 整備前（H29、R4）と比較すると、確認種数が若干増加しており、良好な環境が形成されていると考えられた。

No.	目名	科名	種名	整備前			重要種選定基準		外来種選定基準				
				H29 (夏)	R4 (夏)	R5 (夏)	環境省 RL2020	福岡県 RDB2014	外来 生物法	生態系 被害防止 リスト	その他 外来種		
1	コイ目	コイ科	コイ(型不明)	3	7	3							
2			ゲンゴロウブナ			3	(EN)					国内	
3			ギンブナ	23	12	41							
4			フナ属	1	4								
5			ヤリタナゴ	3	1	3	NT	VU					
6			アブラボテ	8		7	NT	NT					
7			カネヒラ	3		1		NT					
8			ニッポンバラタナゴ	21	8		CR	EN					
9			バラタナゴ類			21							
10			カゼトゲタナゴ			7	EN	EN					
11			ハス	3	2	2	(VU)				内-総-他		
12			オイカワ	256	210	84							
13			カワムツ	51	1	10							
14			ヌマツ	1		5		NT					
15			ウグイ	2		3		DD					
16			モツゴ		3	7							
17			カワヒガイ	1			NT	VU					
18			ムギツク	10	7	14							
19			タモロコ			11						国内	
20			ゼゼラ	1	7	19	VU	NT					
21			カマツカ	27	21	53							
22			ツチフキ	2	11	28	EN	NT					
23			ニゴイ	6	44	20							
24			イトモロコ			43							
25			スゴモロコ類	36	12	23							
26		ドジョウ科	ドジョウ	1			NT	VU					
27			アリアケスジマドジョウ		1	2	EN	EN					
28			ヤマトシマドジョウ	1		1	VU	NT					
29	ナマズ目	ギギ科	ギギ		1	2					内-総-他		
30			アリアケギハチ	10		1	VU	EN					
31		ナマズ科	ナマズ	1	1	1							
32	サケ目	アユ科	アユ	1		0		NT					
33	ダツ目	メダカ科	ミナミメダカ	12	14	7	VU	NT					
34	スズキ目	ケツギョ科	オヤニラミ	1			EN	NT					
35		サンフィッシュ科	オオクチバス	1					特定	外-総-緊	国外		
36		ドンコ科	ドンコ	7	7	12							
37		ハゼ科	ヌマチチブ			1							
38			カワヨシノボリ	21	5	6							
39		タイワンドジョウ科	カムルチー			1						国外	
合計	5目	11科	37種	28種	21種	33種	13種	17種	4種	4種		5種	

※表中の数字は捕獲または目視個体数の合計を示す。アユの「0」は「はみ跡」による確認を示す。
※赤字は重要種、青文字は外来種を示す。

【現地の状況（令和5年8月）】 ②二枚貝調査結果



【確認されたタナゴ類】



- タナゴ類の産卵母貝である二枚貝は確認されなかった。
- なお、H30に行われた巨瀬川全域の二枚貝調査では合計4種（マツカサガイ広域分布種、ヌマガイ、タイワンシジミ、シジミ属）、令和4年12月の仮締切工事の際にヌマガイ1個体が確認されている。



R4.12.2の仮締切工事の際に確認されたヌマガイ（工事範囲外に移植）

③植生(マコモ)定着状況調査結果

- 表土移植を行った灰塚橋右岸下流において80株以上が確認されたほか、それ以外にも広く分布していることが確認された。



【学識者コメント】※令和5年度河川工事環境検討会

- ツルヨシ、マコモ、ヤナギ等の水際植生の方が生物の重要なハビタットとなるため大切と思うが、今回の工事で保全措置も行われており、植生も定着しているため問題ないと思う。
- 植物は、土や水分等の条件が与えられれば、そこに勝手に定着するため、そのような場を創ることが重要である。

- 平成31年度の河川空間利用実態調査によれば、筑後川水系の河川空間は年間で約325万人の利用者がいると推計されている。
- 利用形態別では、「散策等」が52%と最も多く、次いで「スポーツ」が39%となっている。スポーツについては、河川敷が広く、野球場やゴルフ場等として利用されており、日常的に多くの人々が利用している姿がみられる。
- 利用場所別では、高水敷におけるスポーツのほか、バーベキューやキャンプなどの利用も見られ、水面・水際では、カヌーや水遊びをする親子の姿も多くみられる。

人と河川との豊かな触れ合いの場



上流部

- ・日常的に散策や釣り（アユ釣り）を楽しむ人々の姿がみられる。
- ・日田地区では、静かな水辺空間で「カヌー」を楽しむ親子の姿がみられる。
- ・松原ダム湖面では、釣りや遊覧船（秋）で自然の景色を楽しむ人々が見られる。



中流部

- ・耳納連山を眺めながらサイクリングを楽しんだり、平日でもゴルフ場が賑わいをみせている。
- ・水面では、緩やかな流れを利用したカヌー体験や水遊びを楽しむ姿がみられる。
- ・久留米市街地近くの高水敷では、休日バーベキューやキャンプが行われている。



河川空間利用実態調査結果

区分	項目	年間推計値(千人)			利用状況の割合		
		H21	H26	H31	平成21年度	平成26年度	平成31年度
利用形態別	スポーツ	791	694	1274			
	釣り	241	120	168			
	水遊び	86	85	120			
	散策等	809	937	1697			
	合計	1928	1836	3259			
利用場所別	水面	70	72	116			
	水際	258	133	171			
	高水敷	1423	1216	2364			
	堤防	177	415	607			
	合計	1928	1836	3259			

下流部

- ・日常的に、河口、有明海沿岸を望みながらの散策や通学風景がみられる。
- ・毎年5月から7月中旬にかけて、「えつ漁」が風物詩となっている。
- ・高水敷では、グラウンドゴルフや野球等で多くの人でにぎわいを見せている。



◆基本情報1：河川環境区分（セグメント形成要因）



		距離 (空間単位: 1km)												
		24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
典型性	陸域	1. 低・中草生地	○						△	△	○	△		
	域	2. 河辺性の樹林・河畔林			△			○	○	○	○	○	○	○
		3. 自然裸地												△
		4. 外来植物生育地	×	△	△	×	×	×	△	×	×	×	×	×
	水際域	5. 水生植物帯	○	○										
	6. 水際の自然度	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
	7. 水際の植栽さ	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
	水域	8. 連続する瀬と淵	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9. ワンド・たまり						○							
	10. 湛水域	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	汽水	11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	12. ヨシ原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
追加	追・河辺草本群落 (ヨシ類)					△	△	△	△	△	△	○	○	
	追・ツルヨシ帯												△	
特殊性	湧水域													
	露岩地													
	塩沼湿地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	生息場の多様性の評価値	0	0	-1	-2	1	1	0	2	2	1	1	1	1

◆基本情報2-2：河道環境の長期的な変化傾向

[illegible]

※注意※筑後川7~8kmは諸富川、74kmは隈川のデータを含む。

- 巨瀬川合流点付近から筑後大堰までの区間は、筑後大堰、小森野床固による湛水区間となっており、河岸は低水護岸が整備されている。
- 湛水区間では、部分的に早瀬や砂礫が堆積する浅場や自然度が高い複雑な水際環境が形成されており、絶滅危惧種のミナミメダカ等の魚類が生息・繁殖している。
- 水辺のヨシ群落ではツリスガラが採餌している。

- 絶滅危惧種のミナミメダカ等の魚類が生息・繁殖する多様な水際環境を保全・創出する。
- ツリスガラ等の鳥類が採餌するヨシ群落を保全・創出する。

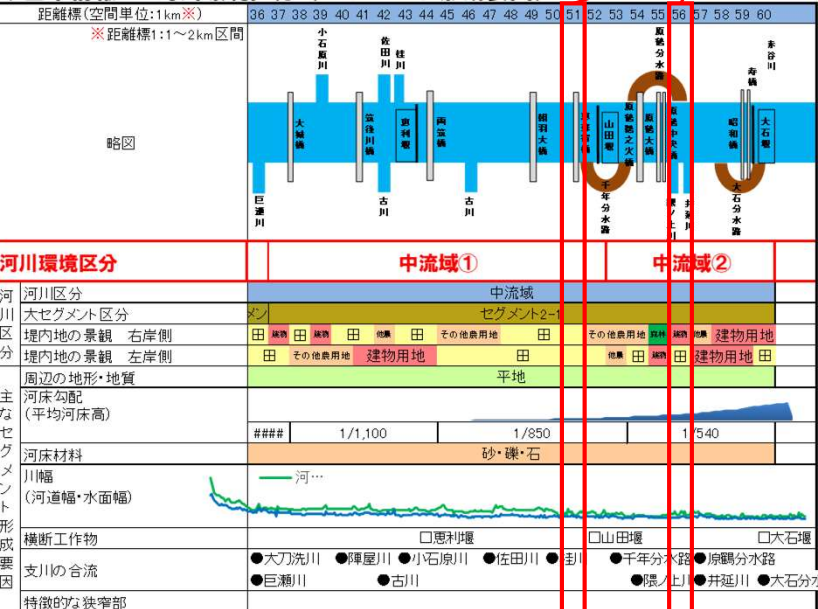
A wide river flows under a blue sky with scattered clouds. In the background, a long bridge with multiple spans crosses the river. The foreground features a stone wall on the left and a grassy bank on the right. The water is calm, reflecting the sky.

床固周辺の浅場（たまり）



筑後川河川環境管理シート（中流部②）

◆基本情報1：河川環境区分（セグメント形成要因）



◆基本情報2-1：生物の生息場の分布状況（全川の中央値に基づき評価）

距離標(空間単位:1km)		36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
典型性	1. 低・中草草地																									
	2. 河辺性の樹林・河群林																									
	3. 自然裸地																									
	4. 外来植物生育地																									
	5. 水生植物帯																									
	6. 水際の自然度																									
	7. 水際の複雑さ																									
	8. 連続する瀬・淵																									
	9. ワンド・たまり																									
	10. 湛水域																									
	11. 干潟																									
	12. ヨシ原																									
特殊性	追 追河辺草本群落(ヨシ類)																									
	加 追ツルヨシ帯																									
生息場の多様性の評価値		1	3	0	6	1	2	2	4	0	1	2	6	5	4	6	7	3	0	6	-1	5	-1	2	4	1

◆基本情報2-2：河道環境の長期的な変化傾向

距離標(空間単位:1km)		36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
陸域	3 自然裸地(干潟を含む)																									
	2 河辺性の樹林・河群林																									
水際域	6 水際自然率																									
	7 水際の複雑さ																									
水域	河道幅/水面幅比																									
	平均河床高																									
	最深河床高																									

注) 上昇傾向↑、変化小→、減少傾向↓

【河川環境の現状】

- 水際にはツルヨシ群集やセイタカヨシ群落が分布するほか、エビモ、ヤナギモ、ヤナギタデやミゾソバなどが分布し、河岸にはオオタチヤナギ、エノキなどが点在している。高水敷にはオギ群落などが分布している。
- 水域には、生育条件により分布が限られる絶滅危惧種のチスジノリも生育している。
- 流水部には、オイカワ、ウグイなどが生息し、早瀬はアユの産卵場となっている。ツルヨシ群集等が生育する水際には絶滅危惧種のオヤニラミ、ワンド・たまりにはタナゴ類等の魚類が生息・繁殖している。
- 自然裸地(砂礫河原)には絶滅危惧種のコアジサシ、イカルチドリ、オギ群落などにはカヤネズミが生息・繁殖している。

【保全・創出】

- アユの産卵場となる早瀬を保全・創出する。
- 絶滅危惧種のアオヤニラミ、タナゴ類等の魚類が生息・繁殖する水生植物帯、ワンド・たまりを保全・創出する。
- 絶滅危惧種のチスジノリ生育箇所は保全する。
- 絶滅危惧種のコアジサシやイカルチドリ等の鳥類が休息・繁殖する自然裸地(砂礫河原)、カヤネズミが生息・繁殖するオギ群落等を保全・創出する。

筑後川中流部(38k～51k周辺)の環境



- 源流から夜明峡谷に至る上流部は、日田美林として知られるスギ・ヒノキからなる豊かな森林に恵まれた山間溪谷を経て玖珠川を合流し日田盆地を貫流する。
- 河岸にはツルヨシ群集やネコヤナギ、アラカシなどが見られる。
- 流水部にはカワムツ、アユなどが生息・繁殖しているほか、ツルヨシ群集等が生育する水際には絶滅危惧種のオヤニラミ等の魚類が生息・繁殖する。
- 自然裸地(砂礫河原)には、イカルチドリが生息する。
- 日田市街部より上流の溪流にはカジカガエル、サワガニ、カワガラス、ヤマセミなどが生息している。

- カワムツやアユ等の魚類が生息する瀬・淵を保全・創出する。
- 絶滅危惧種のおヤナミ等の魚類が生息・繁殖するツルヨシ群集等の水生植物帯を保全・創出する。
- イカルチドリ等の鳥類が生息・繁殖する自然裸地(砂礫河原)を保全・創出する。
- カジカガエルが生息・繁殖する河畔林や平瀬の河床、サワガニが生息する細流や湧水、カワガラスが採餌する浅瀬、ヤマセミの餌場となる溪流の河畔林等を保全・創出する

距離標(空間単位:1km※)

※距離標1:1~2km区間

略図

河川環境区分	上流域①	上流域②
河川区分	上流域	
大セグメント区分	セグメントM	
境内地の景観 右岸側	森林	建物用地 森林 田 森林 田 森林 森林
境内地の景観 左岸側	森林 田 森林 田 森林 森林	森林
周辺の地形・地質	山地	平地 山地
河床勾配 (平均河床高)	1/380	1/250 1/150 1/80 1/140
河床材料	礫・石 礫・石 岩	
川幅 (河道幅・水面幅)		
横断工作物	□夜明ダム	□三隈橋島内堤 □大山川ダム □松原ダ
支川の合流	●赤谷川 ●大肥川 ●二串川 ●名月川 ●庄手川 ●隈川 ●玖珠川 ●赤石川 ●上野川	
特徴的な狭窄部	狭窄部	

距離標(空間単位:1km)		51	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	
生息環境	陸域	1. 低・中草草地	△	△									△	△																					
	水域	2. 河辺性の樹林・河畔林	○	△	△	△	○	○	○	△	△	△	△	○	△	△					△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	○	-	
		3. 自然裸地	△	○	○	△								△	△					○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	-	
	水陸域	4. 外来植物生育地	△	△	△	△				△	△	△	△	△	△	△					-	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
		5. 水生植物帯																			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	水域	6. 水際の自然床	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		7. 水際の堆積さ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		8. 連続する瀬と淵	△	△	△	△										△	△																		
		水域	9. ワンド・たまり			△	△								△	△	△	△					-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	10. 湛水域		△				△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△																		
水域	11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
	12. 干原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-																			
	追河辺草本群落(ヨシ類)													△																					
加	追ツルヨシ帯	△	○	△	△	△				△	△	△	○	○	△	△						○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
特殊性	湧水地																																		
	礫岩地		○	○																															
	塩沼湿地																																		
生息場の多様性の評価値		2	4	5	2	0	1	1	1	2	3	5	6	6	3	-	5	5	5	4	3	5	4	4	3	3	3	2	3	3	6	3	3		

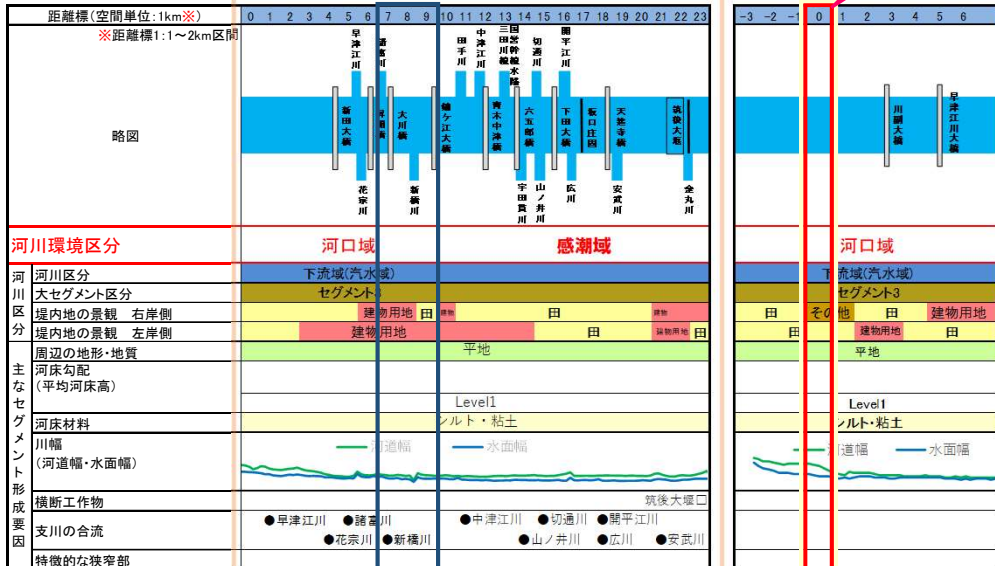
[illegible]

筑後川河川環境管理シート（下流部）

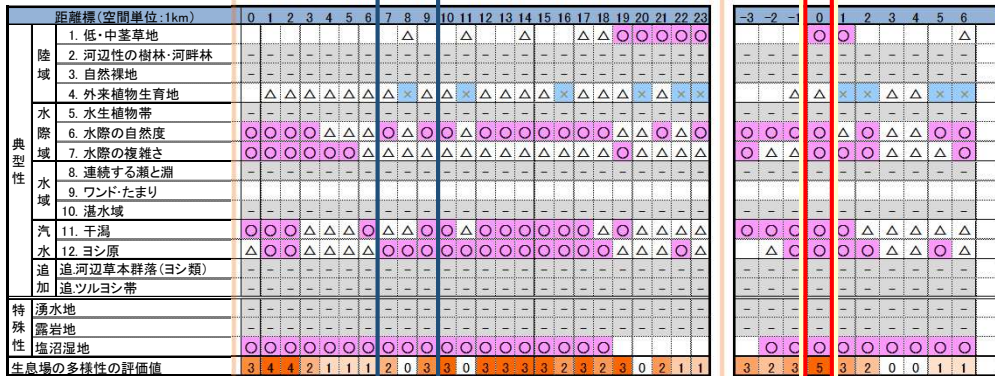
目標とする
良好な区間

筑後川河口部における良好な環境を有する区間（早津江川 0k200付近）

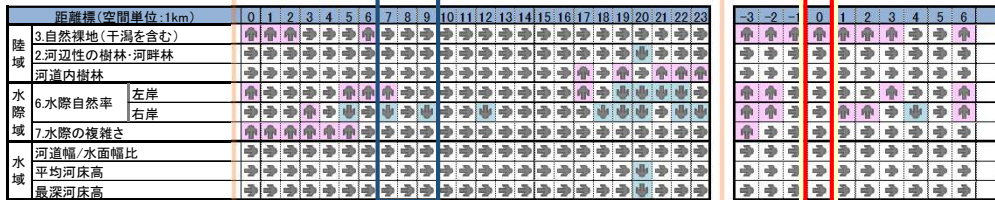
◆基本情報1：河川環境区分（セグメント形成要因）



◆基本情報2-1：生物の生息場の分布状況（全川の中央値に基づき評価）

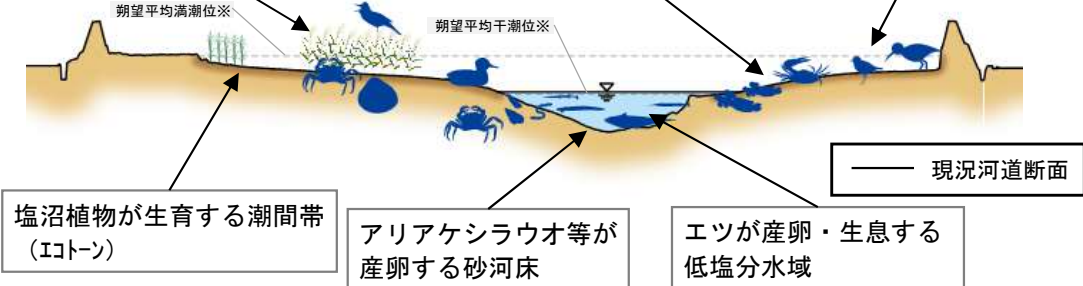


◆基本情報2-2：河道環境の長期的な変化傾向



注) 上昇傾向↑、変化小→、減少傾向↓

※注意点※筑後川7~8kmは諸富川のデータを含む。

オオヨシキリや貝類・カニ類が
生息・繁殖するヨシ原ムツゴロウやシオマネキ等が
生息・繁殖する干潟ハマシギやシロチドリ
が採餌・休息する干潟※筑後川河口観測所
H30~R4の5か年

掘削箇所における環境の保全・創出の概念図（筑後川 7k400付近）

河道掘削にあたっては平水位に限らず目標とする河道内氾濫原の生態系に応じて掘削深や形状を工夫するとともに、河川が有している自然の営力を活用する

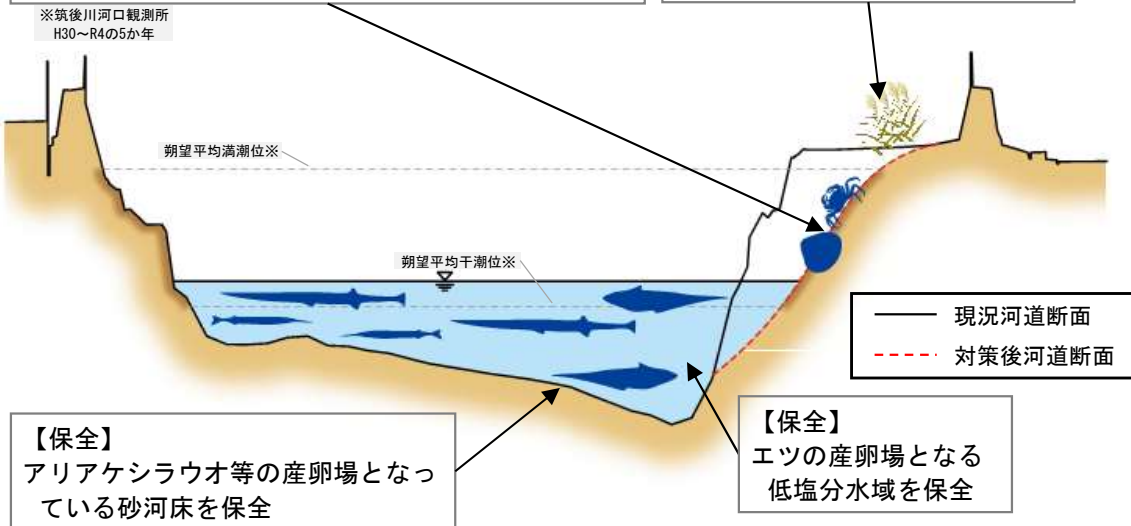
【創出】

ムツゴロウ、シオマネキ等が生息・繁殖する干潟環境を創出

※筑後川河口観測所
H30~R4の5か年

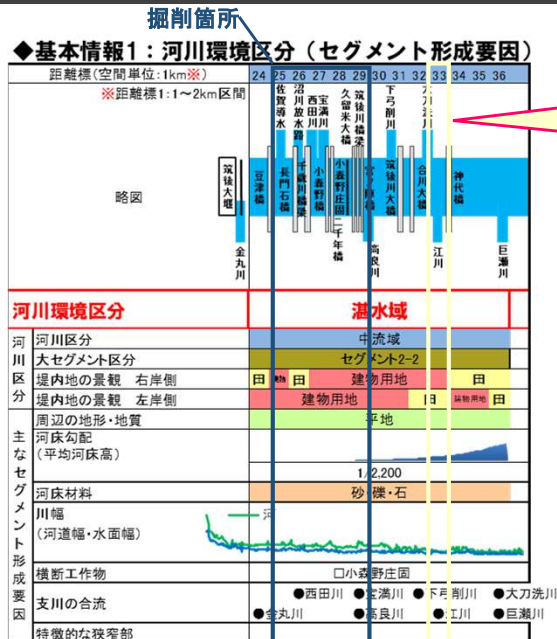
【保全・創出】

オオヨシキリ等が生息・繁殖するヨシ原を保全・創出



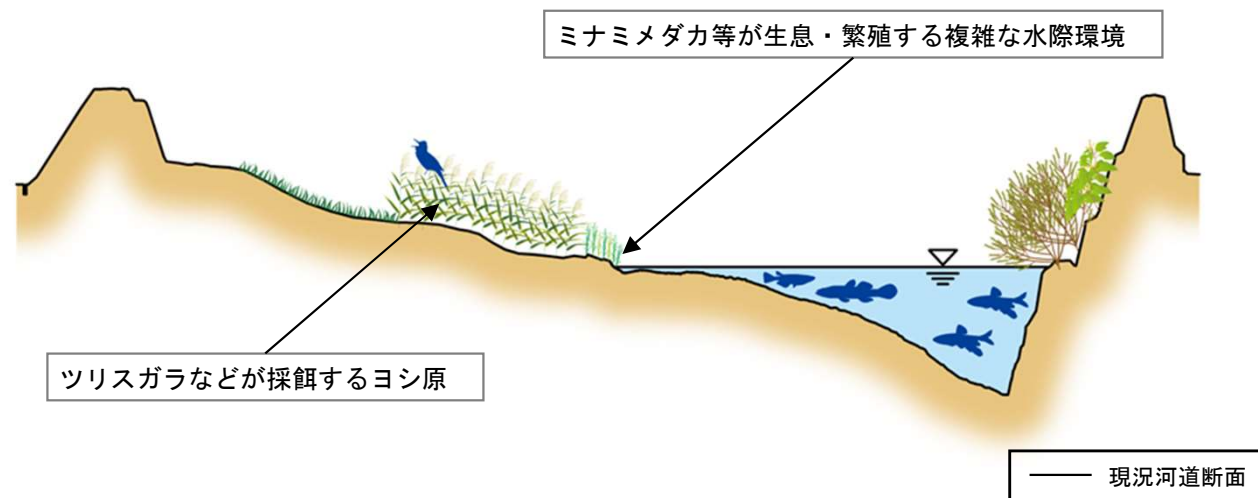
掘削後もモニタリングを実施し、順応的な対応を行う。

筑後川河川環境管理シート（中流部①：湛水区間）



目標とする
良好な区間

筑後川河口部における良好な環境を有する区間（筑後川 33 k 400付近）



◆基本情報2-1：生物の生息場の分布状況（全川の中央値に基づき評価）

距離標（空間単位：1km）	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
陸域													
1. 低・中草地	○												
2. 河辺性の樹林・河畔林	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
3. 自然裸地	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
4. 外来植物生育地	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
水際域													
5. 水生植物帯	○	○											
6. 水際の自然度	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
7. 水際の複雑さ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
8. 連続する瀬と淵	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9. ワンド・たまり	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
水域													
10. 湛水域	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
汽水													
11. 干潟	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
12. ヨシ原	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
追加 河辺草本群落（ヨシ類）													
追加 ツルヨシ帯													
特殊性													
湧水地													
露岩地													
塩沼湿地													
生息場の多様性の評価値	0	0	-1	-2	1	1	1	0	2	2	1	1	1

注) 生息場の多様性の評価値は、全川の中央値を基準として陸域・水際域・水域の物理環境を○・△・×で評価し、○の数から×の数を差し引いた数値。

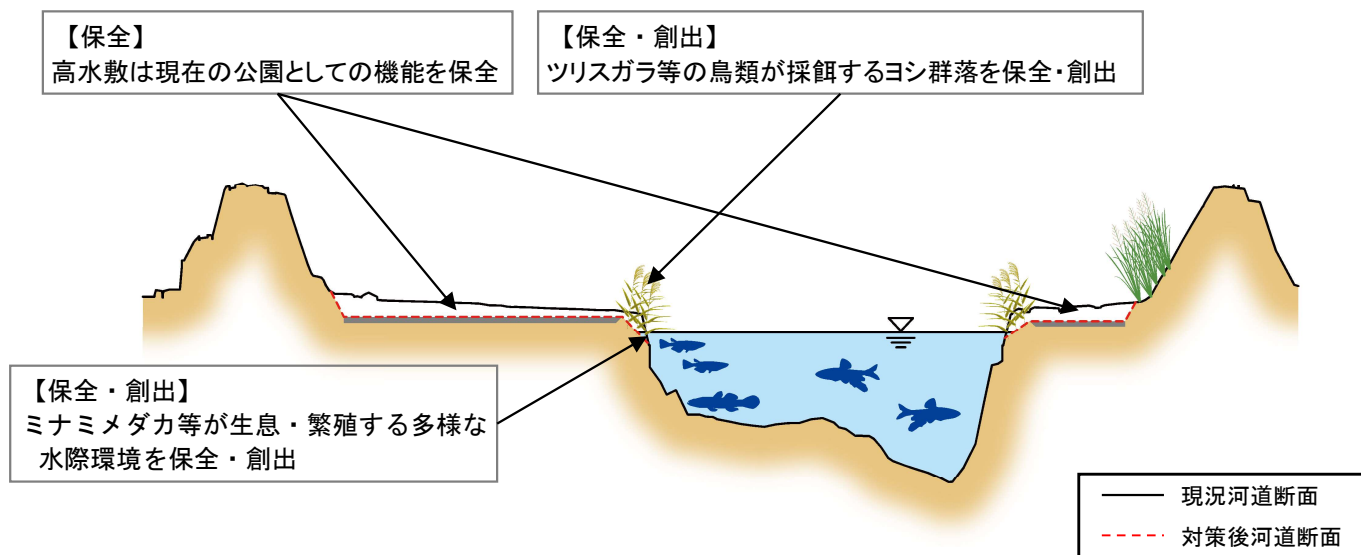
◆基本情報2-2：河道環境の長期的な変化傾向

距離標（空間単位：1km）	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
陸域													
3. 自然裸地（干潟を含む）	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
2. 河辺性の樹林・河畔林	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
河道内樹林	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
水際域													
6. 水際自然率	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
7. 水際の複雑さ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
河道幅/水面幅比	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
水域													
平均河床高	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
最深河床高	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

注) 上昇傾向↑、変化小→、減少傾向↓

※注記点※筑後川7~8kmは諸富川、74kmは隈川のデータを含む。

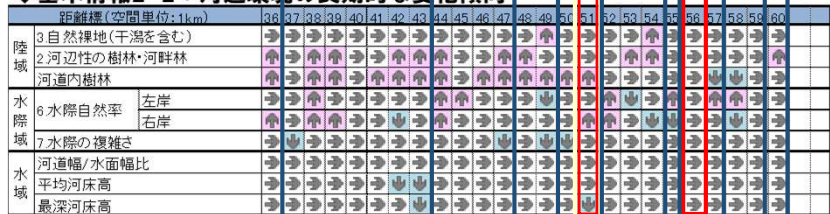
掘削箇所における環境の保全・創出の概念図（筑後川 28 k 400付近）



掘削後もモニタリングを実施し、順応的な対応を行う。

代表区間

代表区間



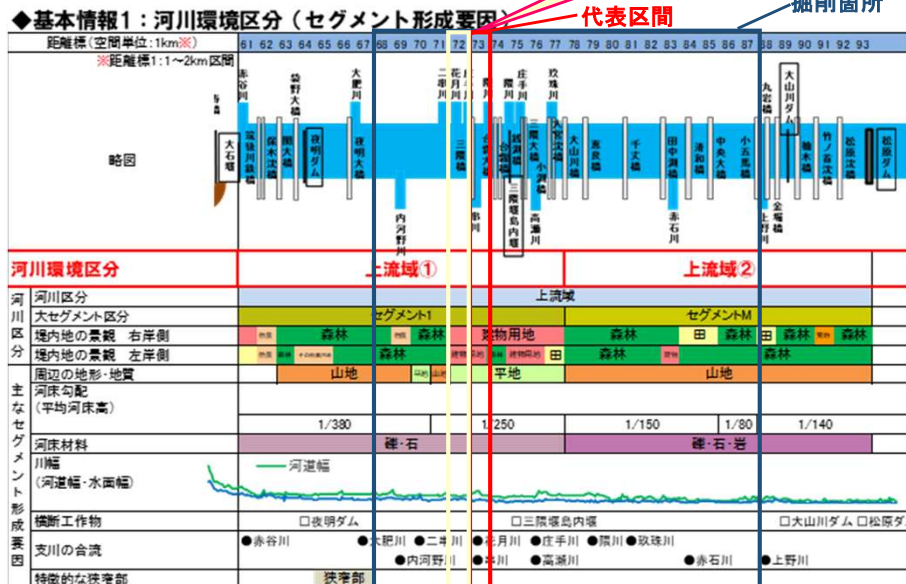
—— 現況河道断面
- - - 対策後河道断面

筑後川河川環境管理シート（上流部）

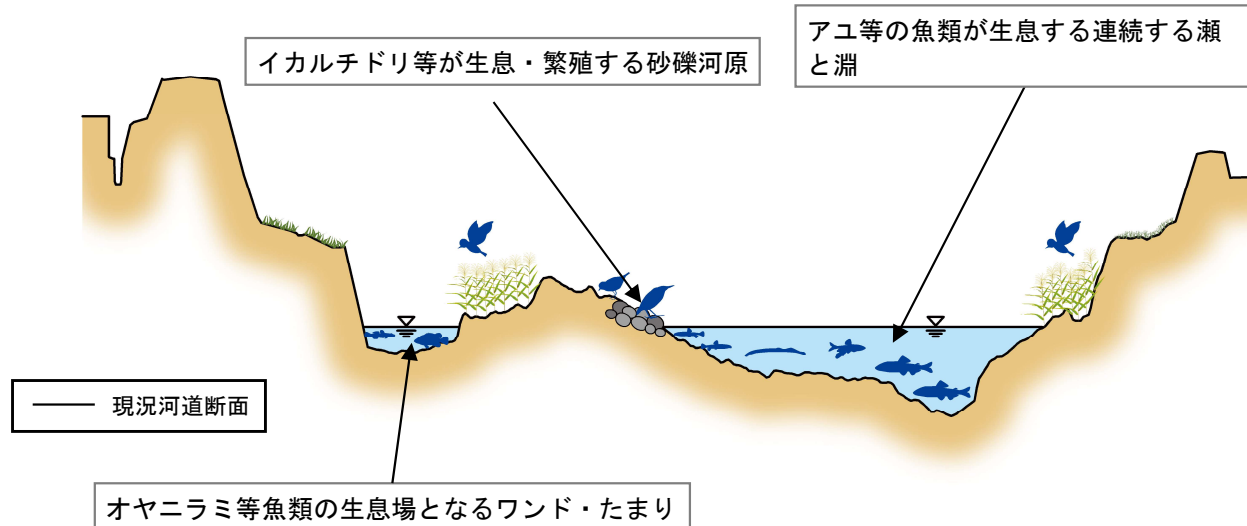
目標とする
良好な区間

代表区間

掘削箇所

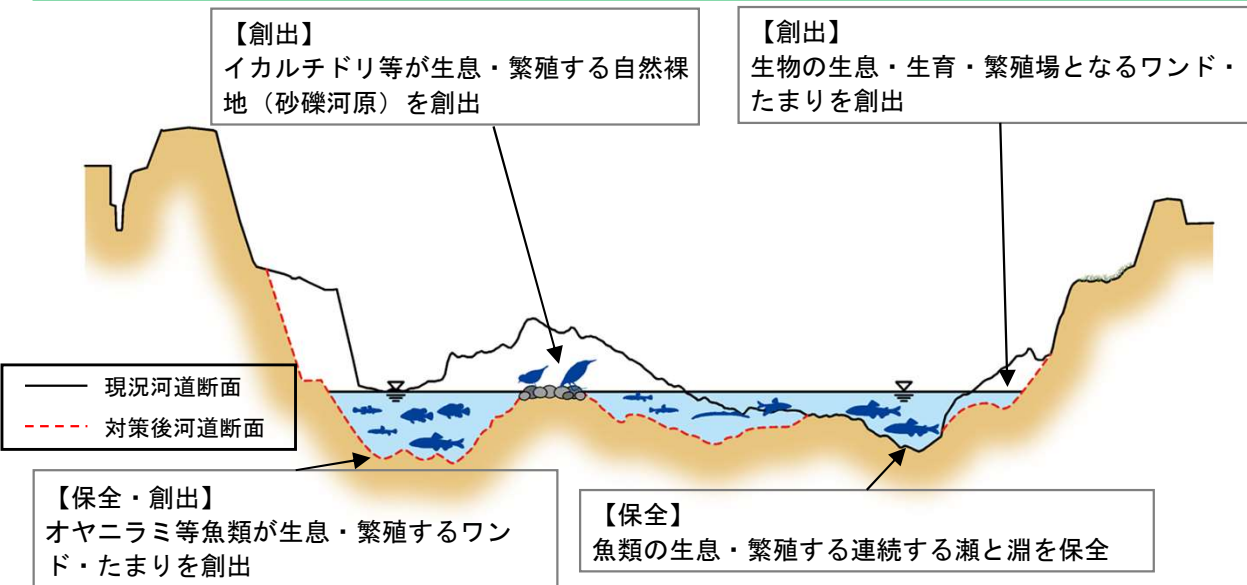


筑後川における良好な環境を有する区間（筑後川 72.8付近）



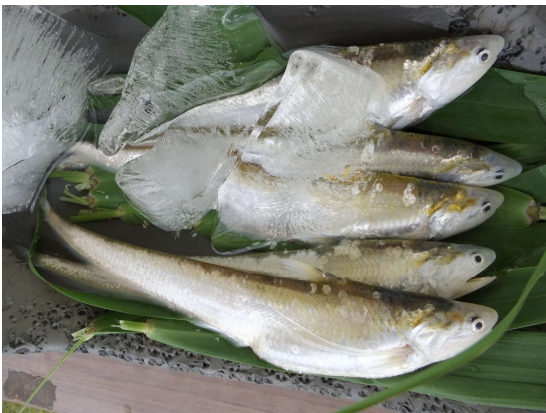
掘削箇所における環境の保全・創出の概念図（筑後川 72.8k付近）

河道掘削にあたっては平水位に限らず目標とする河道内氾濫原の生態系に応じて掘削深や形状を工夫するとともに、河川が有している自然の営力を活用する



掘削後もモニタリングを実施し、順応的な対応を行う。

■エツ祭り



文化庁では、我が国の多様な食文化の継承・振興への機運を醸成するため、地域で世代を超えて受け継がれてきた食文化を、100年続く食文化「100年フード」と名付け、文化庁とともに継承していくことを目指す取組を推進しています。

これまでに250件の食文化が認定され、認定後は、各種メディアで認定団体の活動が数多く取り上げられたり、ロゴマーク入りの商品が販売されるなど、100年フードの取組は全国に広がりを見せています。※100年フード事務局HP抜粋

100年フードロゴ



伝統の100年フード部門 ～江戸時代から続く郷土の料理～

令和5年度認定

えつ料理

「えつ」は、カタクチイワシ科に分類される全長が30センチほどの魚で、日本では有明海だけに生息しています。筑後川下流域で古くから食べられており、江戸時代の料理本にも掲載があります。産卵のため有明海から筑後川に遡上してくる5月から7月が、えつ漁のシーズンです。シーズン中の「えつ」は、脂がのっていてとてもおいしく、刺身、塩焼き、煮漬け、唐揚げ、南蛮漬け、えつ寿司など多彩な料理で味わうことができます。えつ観光の醍醐味は、屋形船の上で獲れたてを食べる「えつ狩り船」です。川船で、えつ漁を眺め、新鮮なえつ料理に舌鼓を打つ舟遊びは、大川の夏の風物詩として親しまれています。えつにまつわる伝説として、「弘法大師が貧しい身なりをしていたのにも関わらず向こう岸まで渡してくれた船頭にお礼をしようと川岸のヨシの葉をちぎって川に投げ込んだところ、それがエツとなった。」という話が伝わっています。



※100年フード事務局HP抜粋

背景：九州内の直轄管理河川において、工事の実施にあたり河川環境への配慮が不十分であった事例があり、平成27年度から河川工事の実施にあたり、専門家から助言をいただく場として検討会を設けている。

目的：河川工事環境検討会では、筑後川水系および矢部川水系の国直轄区間において、施工を予定している河川工事のうち、動植物の生息・生育環境に対し特に配慮が必要と考えられる工事について、アドバイザーのご意見をいただくとともに、工事内容について検討することを目的とする。

対象河川：筑後川水系、矢部川水系

対象区分：主に植物、底生動物、魚類 ※鳥類、両生類・爬虫類・哺乳類、陸上昆虫は程度に応じ適宜対応

開催時期：工事施工前に年1回程度

対象工事：全ての河川工事（改修、維持、環境整備）箇所とするが、検討会へは代表工事を選定



〔令和5年度開催状況〕

〔専門家〕	
猪上 信義(H27～)	河川水辺の国勢調査アドバイザー 植物
松井 誠一(H27～R4) 鬼倉 徳雄(R5～)	河川水辺の国勢調査アドバイザー 魚類
中島 淳 (H27～)	河川水辺の国勢調査アドバイザー 底生動物
〔筑後川河川事務所〕	
技術副所長	
工事品質管理官	
工事設計担当課長	工務第一課、管理課、河川環境課、流域治水課
出張所長	管内の各出張所

	開催日
平成27年度	平成27年8月3日(月)
平成28年度	平成28年8月4日(木)
平成29年度	平成29年8月8日(火)
平成30年度	平成30年11月26日(月)
令和元年度	未開催
令和2年度	令和2年12月17日(木)
令和3年度	令和3年12月17日(金)
令和4年度	令和4年11月17日(木)
令和5年度	令和5年9月29日(金)
令和6年度	令和6年8月19日(月)

昨年度(R3)の主な指摘と今年度(R4)の対応状況

分類	主な指摘(R3)	対応状況(R4)	頁
工事の環境配慮	1 水際部は、捨石等により多様な環境を創出することが望ましい。	水際部の変化に富んだ多様な環境を創出するために、覆土による整備を計画している。	P9 ～ P16
	2 水域から陸域の連続性(エコトーン)を確保することが重要である。	水域から陸域の連続性を確保するために、覆土による整備を計画している。	
	3 護岸は、植生が生育しやすい工夫(表土移植・材料等)が必要である。	護岸植生が早期に再生できるよう、表土の剥ぎ取り・仮置き・移植を計画している。	
飯江川・玉タ	4 干潟(ガタ土)の堆積状況はどうか？また、由来は河川か海域か？	大きな出水がないため、ガタ土は堆積傾向である。なお、飯江川のガタ土は河川由来が大半を占める。	P22 ～ P29
	5 飯江川から矢部川にかけて配置した捨石は残置されているか？	現在も良好な形で捨石が残置されている。	
	6 現在仮設中の右岸側導流堤の形状はどのようなものか？	治水効果を確認しながら形状を検討するため、本格的な整備は未定である。	
その他	7 今年度の水系全体の工事箇所・内容について提供して欲しい。	改修工事、維持管理工事、環境整備事業の位置・内容等を整理した。	P2 ～ P7
	8 水際変化がない工事も、陸域変化により連続性が分断される点に留意する必要がある。	陸域変化による連続性の分断にも留意する。	
	9 河川工事環境検討会は、工事前(設計段階)で相談して貰えればより良いアドバイスが出来る。	設計段階で環境配慮の検討が必要な場合は、個別案件ごとにアドバイザーから助言を頂く。なお、工事環境検討会では、工事施工時の環境配慮に関する助言を頂くことを考えている。	

- 河川工事環境検討会は、合同現地視察を同時に行うことで、現地状況に応じたより適切な環境保全・創出が実施できるよう工夫を図っている。

令和3年度 後援(財団)助成団体 環境工學連携財団社会 調査報告

① 調査概要

② 調査目的

③ 調査方法

④ 調査結果

⑤ 今後の課題

(注) 調査地、調査期

調査地	調査期
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度

調査地

調査地	調査期
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度

調査方法

① 調査方法

② 調査方法

③ 調査方法

④ 調査方法

⑤ 調査方法

調査結果

① 調査結果

② 調査結果

③ 調査結果

④ 調査結果

⑤ 調査結果

今後の課題

① 今後の課題

② 今後の課題

③ 今後の課題

④ 今後の課題

⑤ 今後の課題

① 調査概要

② 調査目的

③ 調査方法

④ 調査結果

⑤ 今後の課題

(注) 調査地、調査期

調査地	調査期
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度

調査地

調査地	調査期
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度
環境工學連携財団社会(仮称)	令和3年度

調査方法

① 調査方法

② 調査方法

③ 調査方法

④ 調査方法

⑤ 調査方法

調査結果

① 調査結果

② 調査結果

③ 調査結果

④ 調査結果

⑤ 調査結果

今後の課題

① 今後の課題

② 今後の課題

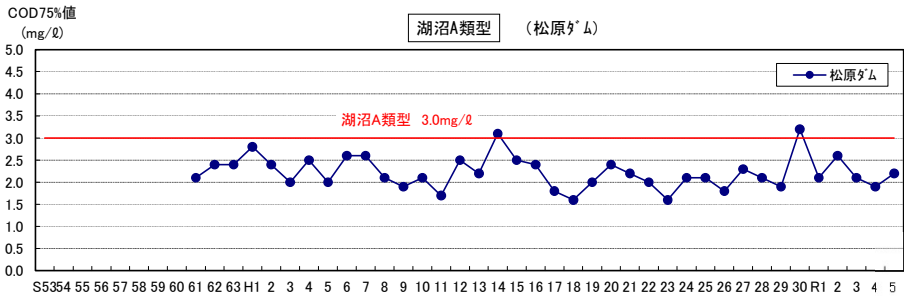
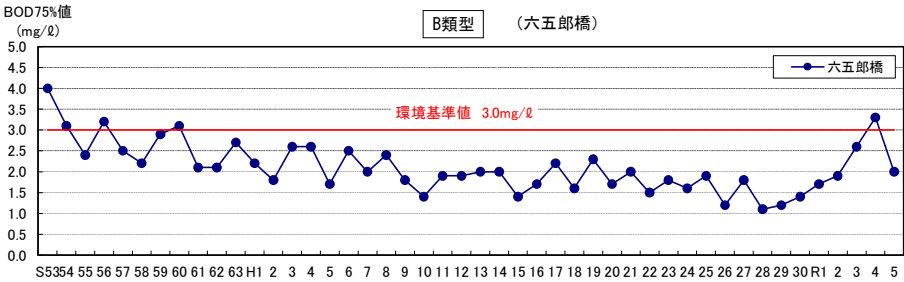
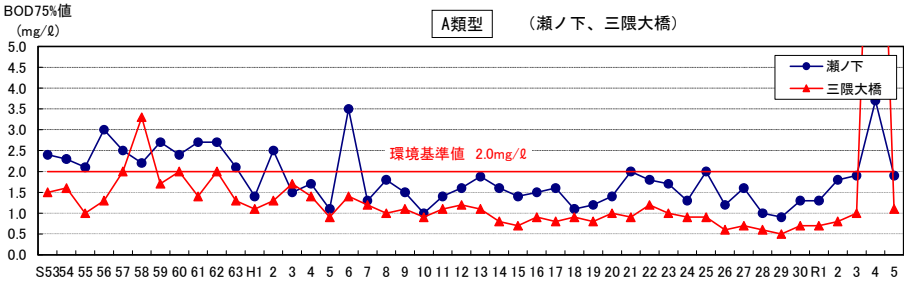
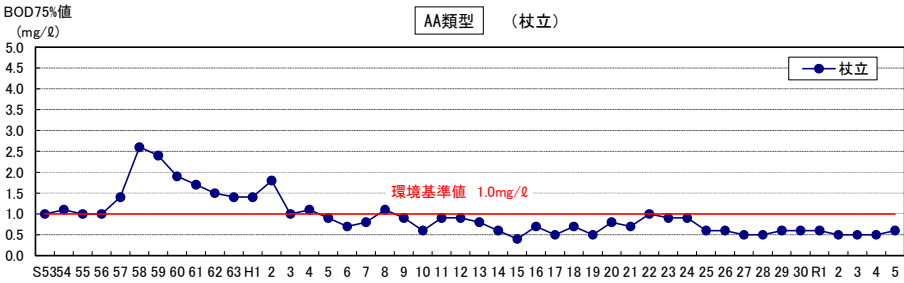
③ 今後の課題

④ 今後の課題

⑤ 今後の課題

- 筑後川水系では、農業用水として利用されている。また、水力発電用水としても利用されており、さらに都市用水としては、流域内の久留米市、鳥栖市等において取水されているほか、導水路を通じて福岡都市圏、佐賀都市圏等への広域的に利用されている。
- 水質については、近年本支川においておおむねBOD75%値の環境基準値を満たしている。

河川名	地点名	環境基準地点	類型	BOD環境基準値(mg/L)
筑後川	杖立	○	AA	1.0
	柚木		A	2.0
	大宮橋		A	2.0
	三隈大橋	○	A	2.0
	島内堰		A	2.0
	川下		A	2.0
	荒瀬		A	2.0
	片ノ瀬		A	2.0
	神代橋		A	2.0
	瀬ノ下	○	A	2.0
	六五郎橋	○	B	3.0
	若津		B	3.0
	大山水辺プラザ		A	2.0
	松原ダム（M-3）		A	2.0
	松原ダム（M-1）		A	2.0
宝満川	酒井東橋	○	B	3.0
	下野	○	B	3.0
城原川	協和橋		A	2.0



本文新旧 対照表No.	本文（一部抜粋）	分類	掲載種等※1	区分	根拠※2	調査年度	備考※1
7-8	源流から夜明(よあけ)峡谷に至る上流部は、河床勾配が約1/100～1/400と急勾配で、日田美林として知られるスギ・ヒノキからなる豊かな森林に恵まれた山間渓谷を経て玖珠川を合流し日、田盆地を貫流する。河岸にはツルヨシ群集やネコヤナギ、アラカシなどが見られる。流水部にはカワムツ、アユなどが生息しているほか、ツルヨシ群集等が生育する水際には絶滅危惧種のオヤニラミ等の魚類が生息・繁殖する。自然裸地（砂礫河原）には、イカルチドリが生息する。日田市街部より上流の溪流環境にはカジカガエル、サワガニ、カワガラス、ヤマセミなどが生息している。松原ダム、下笠ダムのダム湖にはオイカワなどの魚類やオシドリなどの鳥類が生息している。また、ダム湖周辺には絶滅危惧種のブチサンショウウオ、カワセミ、ヤマセミなどが生息している。	植物	スギ・ヒノキ	上流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R2	日田美林の説明のスギ・ヒノキ
		植物	ツルヨシ群集	上流部	河川水辺の国勢調査	H18,H23,H28,R3	水際植物帯の典型性の種
		植物	ネコヤナギ	上流部	河川水辺の国勢調査	H18,H23,H28,R3	河岸に生育する典型性の種
		植物	アラカシ	上流部	河川水辺の国勢調査	H18,H23,H28,R3	河岸に生育する常緑広葉樹林
		魚類	カワムツ	上流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	連続する瀬と淵に依存する典型性の種
		魚類	アユ (福NT)	上流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	上流部を特徴づける種（注目種） 連続する瀬と淵に依存する種
		両はほ	カジカガエル (福NT,佐不足,自然)	上流部	河川水辺の国勢調査	H5,H10,H16,H26	溪流環境に生息する典型性の種
		底生動物	サワガニ	上流部	河川水辺の国勢調査	H5,H10,H15,H20,H25, H30,R5	溪流環境に生息する典型性の種
		鳥類	カワガラス	上流部	河川水辺の国勢調査	H6-7,H11-12,H16- 17,H27	溪流環境に生息する典型性の種
		鳥類	ヤマセミ (福NT,佐危Ⅰ,大NT,自然)	ダム湖	河川水辺の国勢調査	H4,5,6,H12,H17,H27	樹林性を代表する種
		魚類	オイカワ	ダム湖	河川水辺の国勢調査	H4,H5,H10,H15,H19,H 24,H29,R4	生息する個体数が多い、連続する瀬と淵 に依存する典型性の種
		鳥類	オシドリ (環DD,福NT,佐準,大NT,自然)	ダム湖	河川水辺の国勢調査	H4,5,6,H12,H17,H27	ダム湖内に多数生息する典型性の種 ダム湖内の種がオイカワのみ記載のため、 追加
		両はほ	ブチサンショウウオ (種絶滅,環EN,県NT,自然)	ダム湖	河川水辺の国勢 調査	H9・10,H14,H26	過年度確認されている希少性の高い種
※赤字：現行方針記載種、青字：新規追加種		鳥類	カワセミ	ダム湖	河川水辺の国勢調査	H4,5,6,H12,H17,H27	水辺に生息する典型性の種

※1: 種名の後の括弧書きは、重要種または外来種としての指定状況を示す。
種: 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保全に関する法律(種絶滅)
環: 環境省レッドリスト(2020)
(EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR+EN: 絶滅危惧Ⅰ類、CR: 絶滅危惧ⅠA類、EN: 絶滅危惧ⅠB類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 地域個体群)
福: 福岡県(2011)「福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2011—植物群落・植物・哺乳類・鳥類—」、福岡県(2014)「福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2014—爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等—」(EX: 絶滅、EW: 野生絶滅、CR: 絶滅危惧ⅠA類、EN: 絶滅危惧ⅠB類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足、LP: 地域個体群)
佐: 佐賀県レッドリスト「鳥類、両はほ、貝・甲殻類・その他(2003)」/「汽水・淡水魚類(2016)」/「植物(2020)」/「昆虫・クモ類(2023)」(絶滅: 絶滅、危Ⅰ: 絶滅危惧Ⅰ類種、危Ⅱ: 絶滅危惧Ⅱ類種、準: 準絶滅危惧、不足: 情報不足、地域: 地域個体群)
大: レッドデータブックおおいた2022 (CR: 絶滅危惧ⅠA類、EN: 絶滅危惧ⅠB類、VU: 絶滅危惧Ⅱ類、NT: 準絶滅危惧、DD: 情報不足)
文: 「文化財保護法(1950、法律214)」(特天: 特別天然記念物) 特外: 特定外来生物

本文新旧 対照表No.	本文（一部抜粋）	分類	掲載種等※1	区分	根拠※2	調査年度	備考※1	
8	夜明峡谷から筑後大堰までの中流部は、九州を代表する穀倉地帯である筑紫平野を緩やかに蛇行しながら、流域最大の都市である久留米市街部を貫流する。夜明峡谷から巨瀬川合流点付近までの区間は、連続する瀬と淵、ワンド・たまり、自然裸地（砂礫河原）等の多様な動植物の生息・生育・繁殖環境が形成されている。水際にはツルヨシ群集やセイタカヨシ群落が分布するほか、エビモ、ヤナギモ、ヤナギタデやミゾソバなどが分布し、河岸にはオオタチヤナギ、エノキなどが点在している。高水敷にはオギ群落などが分布している。水域には、生育条件により分布が限られる絶滅危惧種のチスジノリも生育している。流水部には、オイカワ、ウグイなどが生息し、早瀬はアユの産卵場となっている。ツルヨシ群集等が生育する水際には絶滅危惧種のオヤニラミ、ワンド・たまりにはタナゴ類等の魚類が生息・繁殖している。自然裸地（砂礫河原）には絶滅危惧種のコアジサシ、イカルチドリ、オギ群落などにはカヤネズミが生息・繁殖している。巨瀬川合流点付近から筑後大堰までの区間は、筑後大堰、小森野(こもりの)床固による湛水区間となっており、河岸は低水護岸が整備されている。湛水区間では、部分的に早瀬や砂礫が堆積する浅場や自然度が高い複雑な水際環境が形成されており、絶滅危惧種のミナミメダカ等の魚類が生息・繁殖している。水辺のヨシ群落ではツリスガラが採餌している。	植物	ツルヨシ群集	中流部	河川水辺の国勢調査	H18,H23,H28,R3	水際植物帯の典型性の種	
		植物	セイタカヨシ（佐準）	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	群落面積が増加傾向にある種	
		植物	エビモ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	巨瀬川のみ確認の沈水植物	エビモ、ヤナギモは巨瀬川のみ生育、ミゾソバも本川はないため、本川に関する情報として（自然裸地）、セイタカヨシ、ツルヨシ群集を追加
		植物	ヤナギモ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	巨瀬川のみ確認の沈水植物	
		植物	ヤナギタデ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	本川中流部も生育 水辺・湿地に生育する種	
		植物	ミゾソバ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	R3本川なし、城原川、巨瀬川、下流 H23城原川、巨瀬川、高良川、佐田川 水辺・湿地に生育する種	
		植物	オオタチヤナギ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	河岸に生育するヤナギ高木林	
		植物	エノキ	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	河岸に生育する常緑広葉樹林	
		植物	オギ群落	中流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R4	典型性の種（低・中茎草地）	
		植物	チスジノリ（環VU、福CR+EN）	中流部	環境調査	R2	正常流量の条件であることから新規追加	
		魚類	オイカワ	中流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	連続する瀬と淵に依存する典型性の種	
		魚類	ウグイ（福DD）	中流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	連続する瀬と淵に依存する典型性の種	
		魚類	アユ（福NT）	中流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	中流部を特徴づける種（注目種） 連続する瀬と淵に依存する種	
		魚類	オヤニラミ（環EN,福NT,佐危Ⅱ,大NT,自然）	中流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	水生植物帯に依存する種	
		魚類	タナゴ類	中流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	中流部を特徴づける種（注目種） 氾濫原環境の指標種	
		魚類	ミナミメダカ（環VU,福NT,佐準）	中流部	河川水辺の国勢調査	H4-5,H8-9,H13,H19,H24,H29,R4	水生植物帯に依存する種	
		植物	ヨシ群落	中流部（水際）	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	河口部の環境を代表する種	
		鳥類	ツリスガラ（福NT）	中流部	河川水辺の国勢調査	H6-7,H11-12, H16-17,H27	水生植物帯に依存する種	
		鳥類	コアジサシ（環VU,福VU,佐危Ⅱ,大CR）	中流部	河川水辺の国勢調査	H6-7,H11-12, H16-17,H27	中流部を特徴づける種（注目種） 自然裸地（砂礫河原）に依存する種	
		鳥類	イカルチドリ（福VU）	中流部	河川水辺の国勢調査	H27のみ	自然裸地（砂礫河原）に依存する種として、 ※ツバメチドリに代わって掲載	
		両はほ	カヤネズミ（福VU,佐準,大NT）	中流部	河川水辺の国勢調査	H5,H10,H16,H26	イネ科の植物に営巣、生息する典型性の種	

※赤字・現行方針記載種 青字・新規追加種

32

※赤字：現行方針記載種、青字：新規追加種

本文新旧 対照表No.	本文（一部抜粋）	分類	掲載種等※1	区分	根拠※2	調査年度	備考※1
5	筑後大堰より河口までの下流部は、河床勾配が1/2,500以下と、緩やかである。クリークが発達した筑紫平野の中を大きく蛇行しながら有明海へと注ぎ、国内最大の干満差を有する有明海の影響を受け、23kmに及ぶ長い区間が汽水域となり、河口を中心に広大な干潟が形成されている。水際にはヨシ原が広がり、アイアシ等が生育する塩沼湿地が分布する。水域には、絶滅危惧種のエツ・アリアケシラウオ・アリアケヒメシラウオ等が生息・繁殖している。干潟には絶滅危惧種のムツゴロウ・シオマネキ、ハラグクレチゴガニ等の底生動物が生息・繁殖し、ハマシギ、絶滅危惧種のシロチドリ等の鳥類の採餌場、休息場としても利用されている。冬には南に渡って越冬する絶滅危惧種のクロツラヘラサギの飛来も確認されている。ヨシ原にはオオヨシキリ等が生息・繁殖している。 多様な生物が生息・生育する「有明海および筑後川河口」は、環境省の「生物多様性の観点から重要度の高い湿地『重要湿地』（有明海および筑後川河口）」に認定されている。	植物	ヨシ原	下流部（水際）	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	河口部の環境を代表する種
		植物	アイアシ	下流部	河川水辺の国勢調査	H23,H28,R3	塩生植物の典型性の種
		魚類	エツ (環EN,福VU,佐危Ⅱ)	下流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	筑後川の代表種 河口域の静穏環水域に生息する回遊魚 汽水域の縦断連続・健全性の指標種
		魚類	アリアケシラウオ (環CR,,福CR,佐危Ⅰ)	下流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	筑後川の代表種 河口域の砂底に生息する回遊魚 汽水域の縦断連続・健全性の指標種
		魚類	アリアケヒメシラウオ (絶滅,,環CR,福CR,,佐危Ⅰ)	下流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	筑後川の代表種 河口域の砂底に生息する回遊魚 汽水域の縦断連続・健全性の指標種
		魚類	ムツゴロウ (環EN,福NT)	下流部	河川水辺の国勢調査	H19,H24,H29,R4	有明海・八代海沿岸に生息する種 河口部を特徴づける種（注目種）
		底生動物	シオマネキ (環VU,福EN,佐危Ⅱ,大EN)	下流部	河川水辺の国勢調査	H5,H10,H15,H20,H25,H30,R5	河口部を特徴づける種（注目種）
		底生動物	ハラグクレチゴガニ (環NT,福NT,佐準)	下流部	河川水辺の国勢調査	H5,H10,H15,H20,H25,H30,R5	河口部を特徴づける種（注目種） 干潟に依存する種
		鳥類	ハマシギ (環NT,福NT,大NT)	下流部	河川水辺の国勢調査	6-7,H11-12,H16-17,H27	干潟に依存する種
		鳥類	シロチドリ (環VU,福NT,大VU)	下流部	河川水辺の国勢調査	6-7,H11-12,H16-17,H27	干潟に依存する種
		鳥類	クロツラヘラサギ (種絶滅,環EN,福EN,佐危Ⅰ,大CR,)	下流部	河川水辺の国勢調査	6-7,H11-12,H16-17,H27	河口部を特徴づける種（注目種） 干潟に依存する種 ●重要湿地の選定理由として、 (筑後川河口) 「湿地性鳥類*：クロツラヘラサギの重要な渡来地」が新たに追加されているため、追加。
		鳥類	オオヨシキリ (福NT)	下流部	河川水辺の国勢調査	6-7,H11-12,H16-17,H27	河口部を特徴づける種（注目種） ヨシ原に依存する種

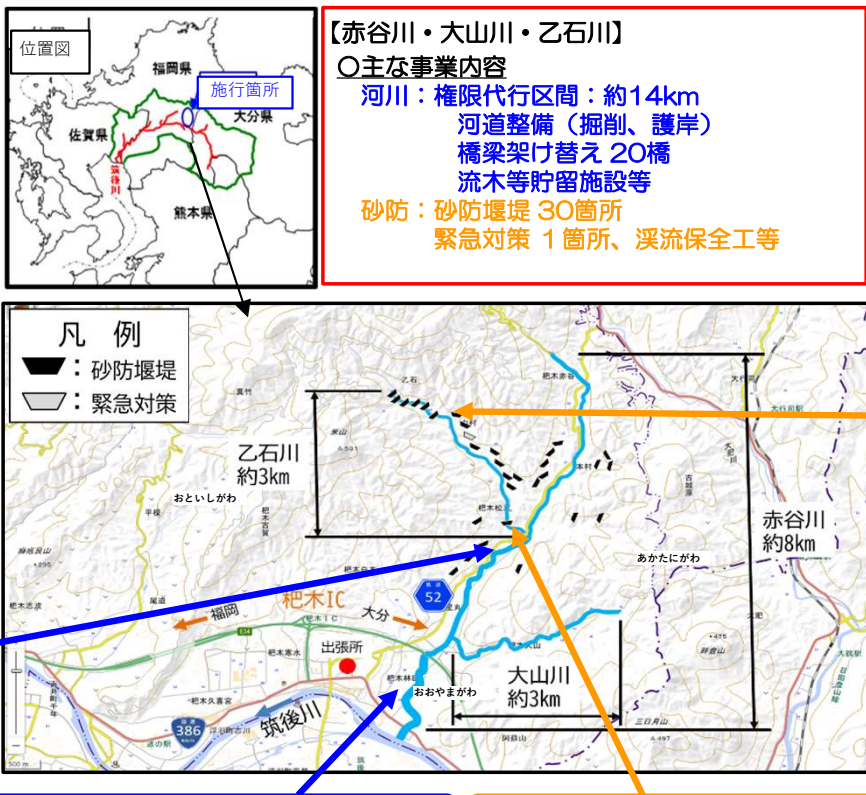
※赤字：現行方針記載種、青字：新規追加種

⑥総合的な土砂管理についての検討

- 筑後川支川赤谷川流域では平成29年7月九州北部豪雨により、多数の山腹崩壊が発生し、大量の土砂等が市街地へ流れ込んだ影響で死者33名、住宅全壊260件もの被害が生じた。
- 災害以降、福岡県からの要請により河川の復旧を国で権限代行を実施。砂防事業については直轄事業（砂防災害関連緊急事業、特定緊急砂防事業）を実施。平成29年12月に「九州北部緊急治水対策プロジェクト」を策定し事業着手。令和5年3月に河川事業終了、令和5年7月に砂防事業を福岡県へ施設を移管。
- 河川事業では主に河道整備（掘削、護岸）、流木等貯留施設等を実施し、砂防事業では主に砂防堰堤整備、溪流保全工等を実施した。

河川事業

【乙石川合流点】



【赤谷川・大山川・乙石川】
○主な事業内容
河川：権限代行区間：約14km
河道整備（掘削、護岸）
橋梁架け替え 20橋
流木等貯留施設等
砂防：砂防堰堤 30箇所
緊急対策 1 箇所、溪流保全工等

砂防事業

【乙石川上流堰堤群、斜面崩壊地】



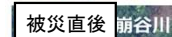
【赤谷川下流(東林田地区)】



【乙石川遊砂地工】



- ## 筑後川流域の砂防対策の実施状況



【巨瀬川流域】



●近年、記録的な降雨に伴う大規模浸水や、斜面崩壊に伴う土砂・流木の流出による人的被害や家屋倒壊等、甚大な被害を伴う豪雨災害が頻発している。

【近年の大規模災害発生状況】

- ・ **平成24年7月の九州北部豪雨**では、花月川において複数の堤防決壊や越水等が発生し、大規模な家屋浸水被害が発生した。また、筑後川の**中流域では山地部の崩壊も多数発生**したと思われる、がけ崩れによる人的被害も発生している。
- ・ **平成29年7月の九州北部豪雨**では、中流右岸域を中心に大規模浸水と合わせ、**大量の土砂や流木の発生・流下**により、甚大な人的被害や家屋被害が発生した。

平成24年7月豪雨時のがけ崩れによる被害状況



平成29年7月豪雨時の赤谷川、白木谷川の被害状況



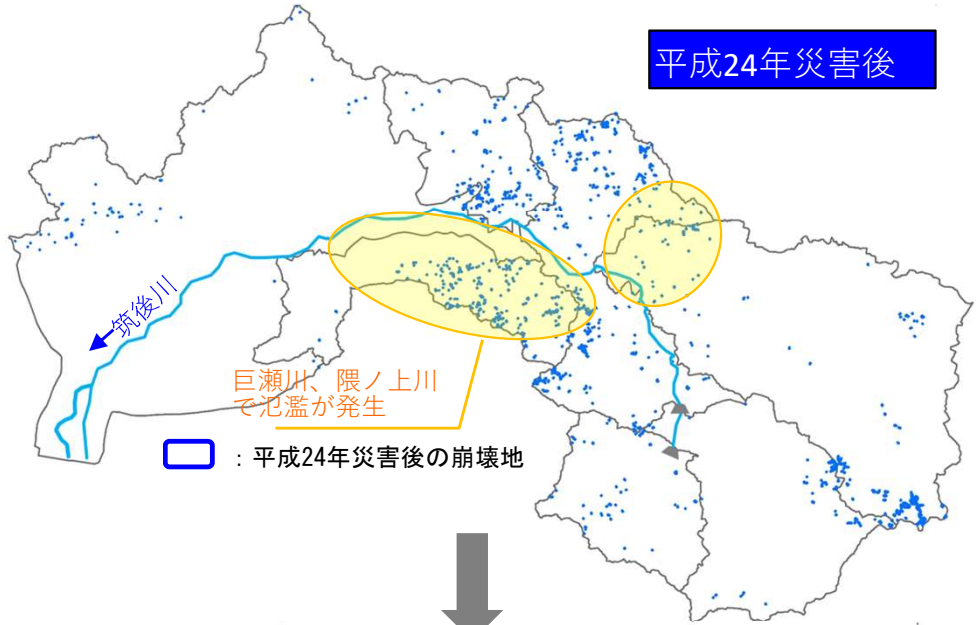
【近年の大規模災害による斜面崩壊の状況】

・平成24年7月豪雨前後、平成29年7月豪雨後の3時点で崩壊地の状況を比較してみると、平成24年7月豪雨では中流域で崩壊が複数発生しており、さらに平成29年7月豪雨では中流右岸流域で多数の崩壊が集中したと推定される。

筑後川流域内崩壊地の存在状況の変化



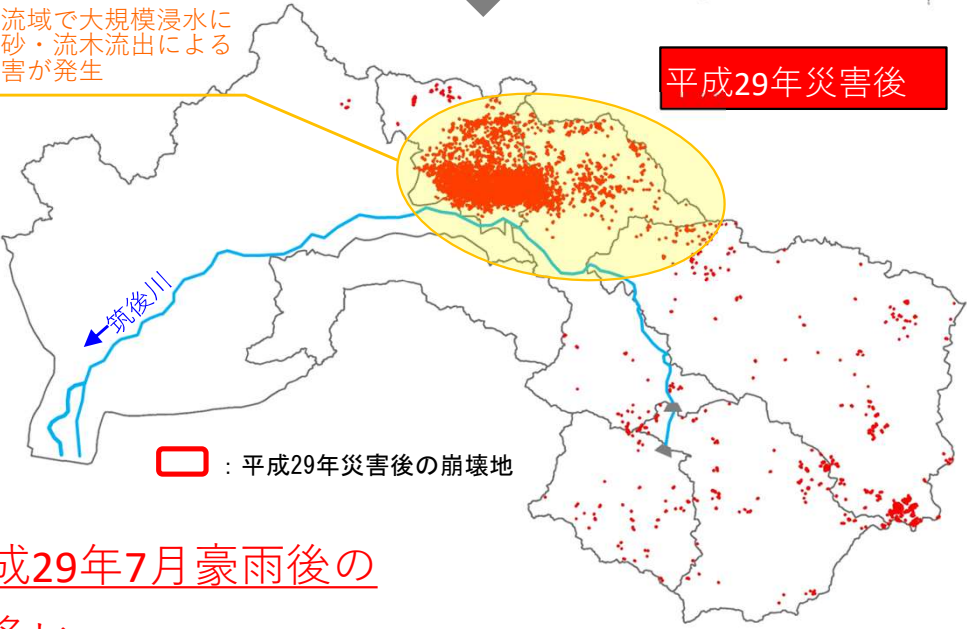
平成24年災害前



平成24年災害後



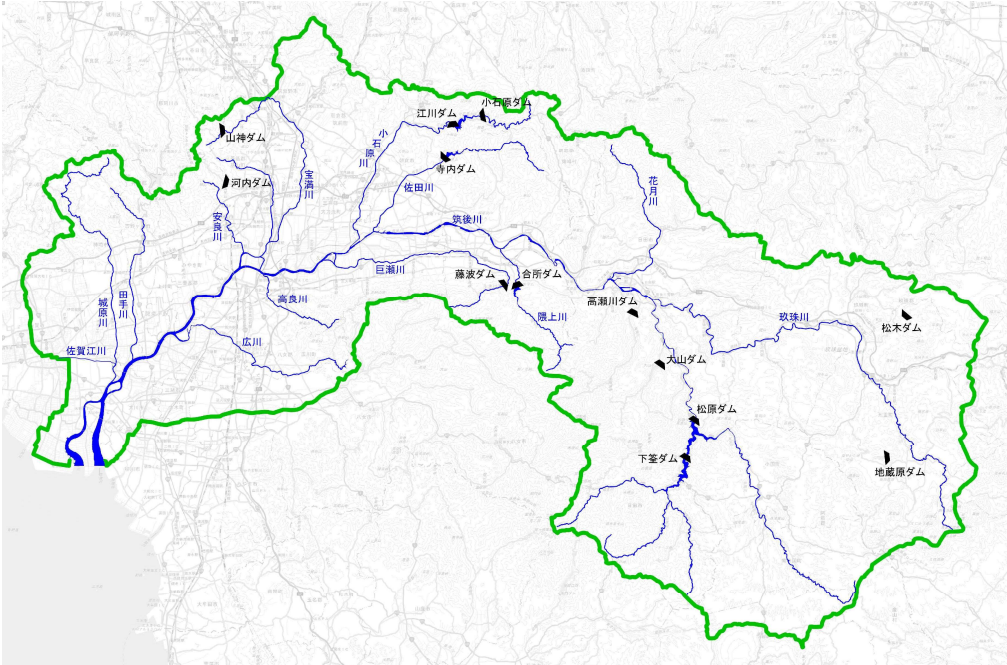
中流右岸流域で大規模浸水に加え、土砂・流木流出による甚大な被害が発生



平成29年災害後

中流右岸流域の平成29年7月豪雨後の崩壊地が圧倒的に多い

●流域内には13基の貯水ダムが存在



筑後川流域内貯水ダム位置図

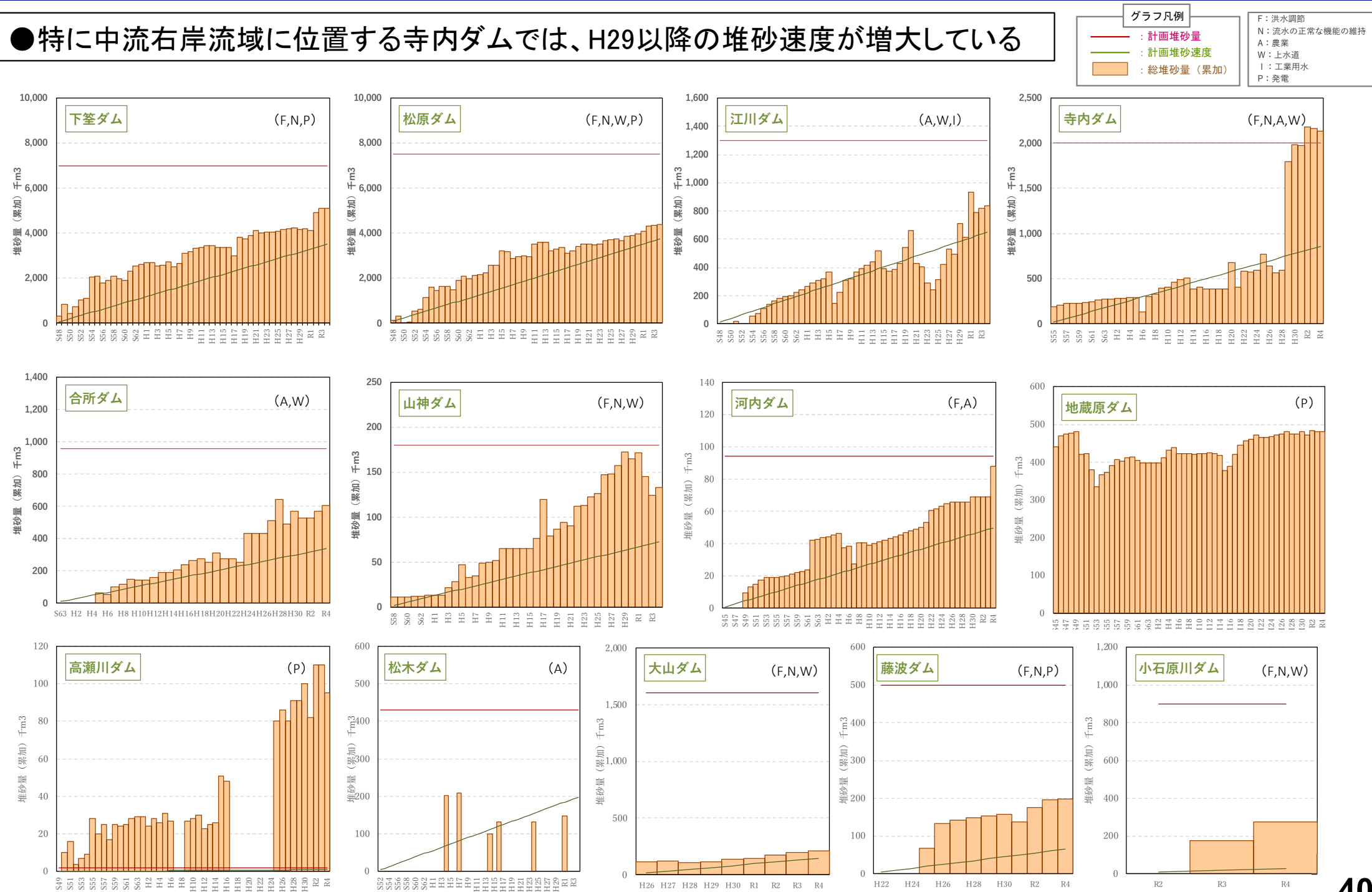
表 筑後川流域内貯水ダムの諸元

ダム名	下笠ダム	松原ダム	江川ダム	寺内ダム	合所ダム
管理者	九州地方整備局	九州地方整備局	水資源機構	水資源機構	福岡県
竣工年	昭和48年	昭和48年	昭和47年	昭和53年	昭和63年
河川名	津江川	筑後川	小石原川	佐田川	隈ノ上川
集水面積 (km2)	185	491	30	51	42
ダム形状	アーチ式コンクリート	重力式コンクリート	重力式コンクリート	ロックフィル	ロックフィル
目的	FNP	FNWP	AWI	FNAW	AW
堤高 (m)	98	83	79	83	61
堤長 (m)	248	192	298	420	270
総貯水容量 (千m3)	59,300	54,600	25,300	18,000	7,660
有効貯水容量 (千m3)	52,300	47,100	24,000	16,000	6,700
洪水調節容量 (千m3)	51,300	45,800	-	7,000	-
計画堆砂量 (m3)	7,000	7,500	1,300	2,000	960
累積堆砂容量 (千m3)	5,106	4,391	838	2,130	605
	(R4)	(R4)	(R4)	(R4)	(R4)

ダム名	山神ダム	河内ダム	地藏原ダム	高瀬川ダム	松木ダム
管理者	福岡県	鳥栖市	九州電力	九州電力	九重町
竣工年	昭和58年	昭和45年	大正11年	昭和48年	
河川名	山口川	大木川	地藏原川	高瀬川	松木川
集水面積 (km2)	9.1	4.5	6.1	34	25.2
ダム形状	重力式コンクリート	アース	アース	重力式コンクリート	重力式コンクリート
目的	FNW	FA	P	P	A
堤高 (m)	59	35	22	26	49
堤長 (m)	308	153	95	97	128
総貯水容量 (千m3)	2,980	1,196	1,858	273	1,300
有効貯水容量 (千m3)	2,800	1,102	1,846	240	725
洪水調節容量 (千m3)	1,670	-	-	-	-
計画堆砂量 (m3)	180	94	-	2	430
累積堆砂容量 (千m3)	133	88	482	95	148
	(R4)	(R4)	(R4)	(R4)	(R1)

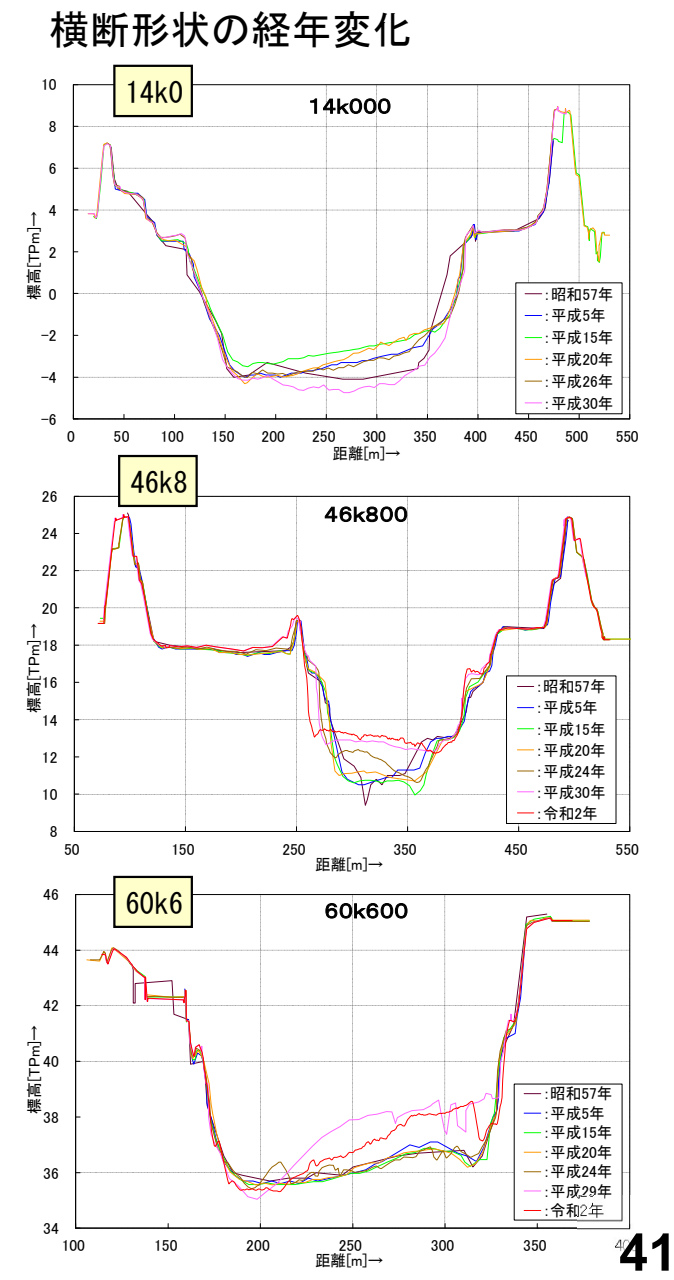
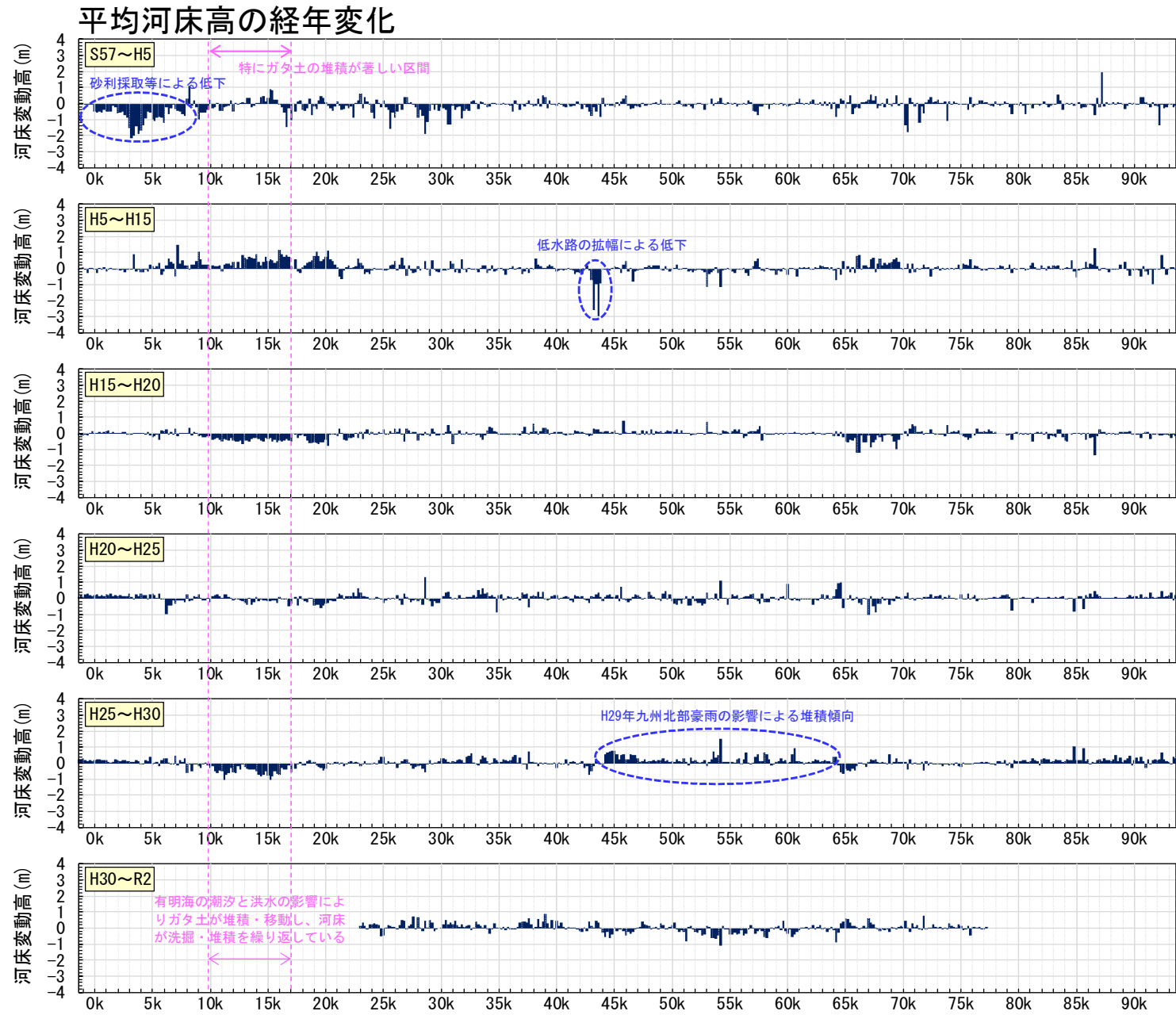
ダム名	大山ダム	藤波ダム	小石原川ダム
管理者	水資源機構	福岡県	水機構
竣工年	平成25年	平成22年	令和2年
河川名	赤石川	巨瀬川	小石原川ダム
集水面積 (km2)	33.6	21.7	20.5
ダム形状	重力式コンクリート	中央コア型ロックフィル	中央コア型ロックフィル
目的	FNW	FNP	FNW
堤高 (m)	94	52	139
堤長 (m)	370	295	558
総貯水容量 (千m3)	19,600	2,950	40,000
有効貯水容量 (千m3)	18,000	2,450	39,100
洪水調節容量 (千m3)	7,000	2,000	4,100
計画堆砂量 (m3)	1,600	500	900
累積堆砂容量 (千m3)	210	199	274
	(R4)	(R4)	(R4)

●特に中流右岸流域に位置する寺内ダムでは、H29以降の堆砂速度が増大している

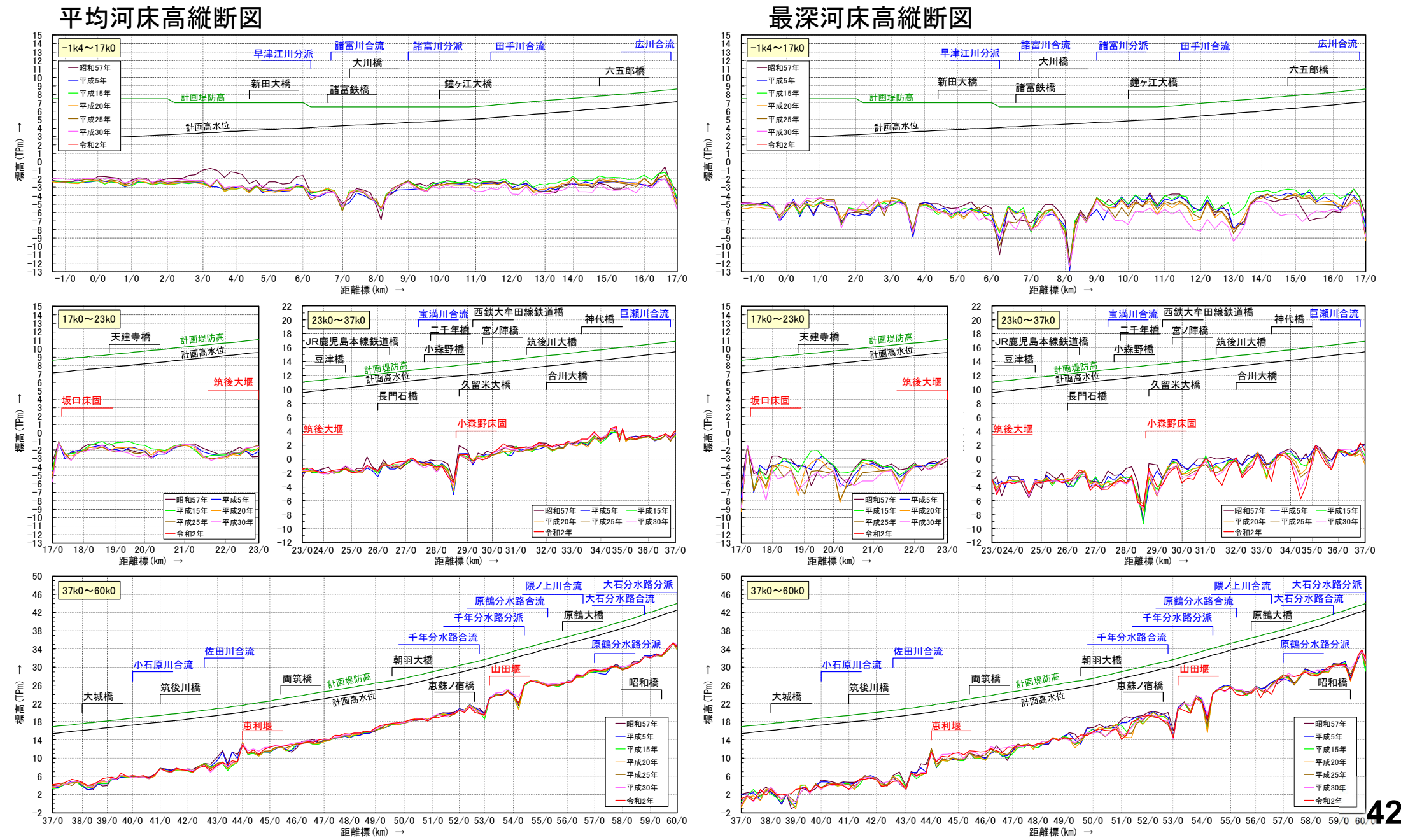


筑後川流域内貯水ダムの堆砂量経年変化図

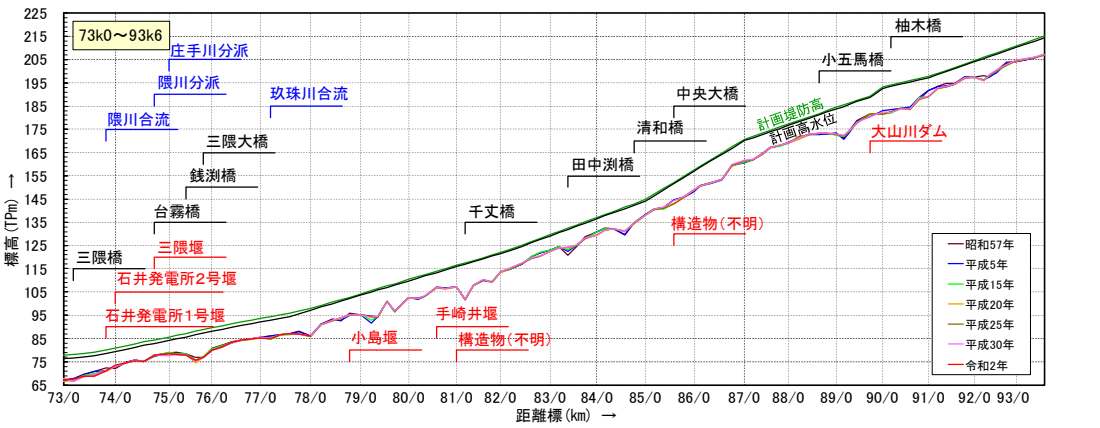
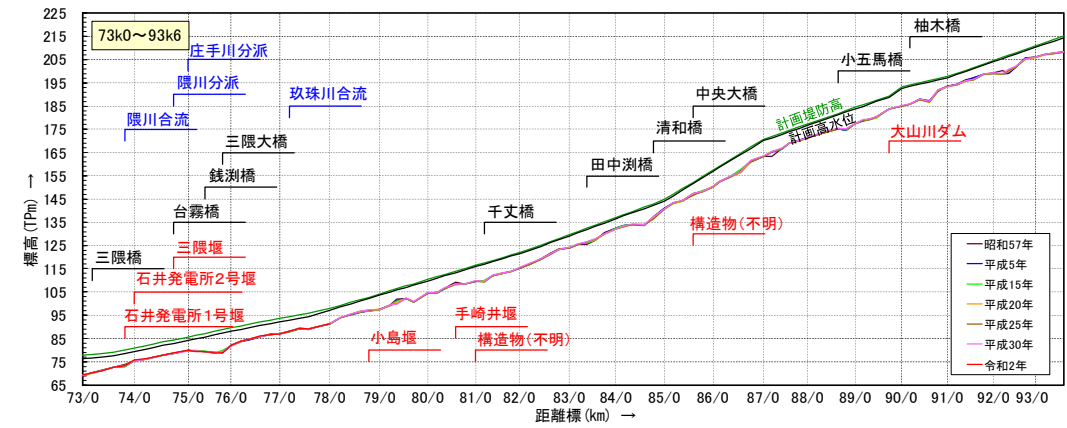
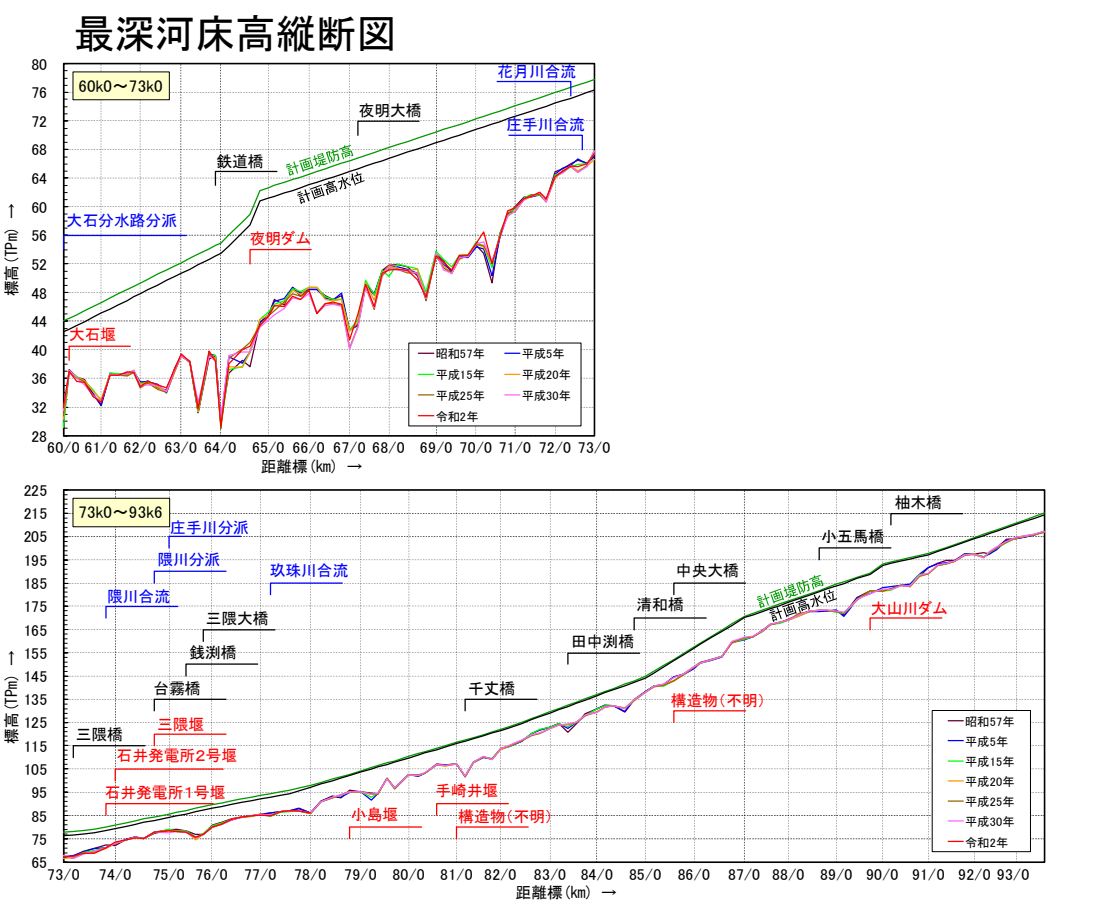
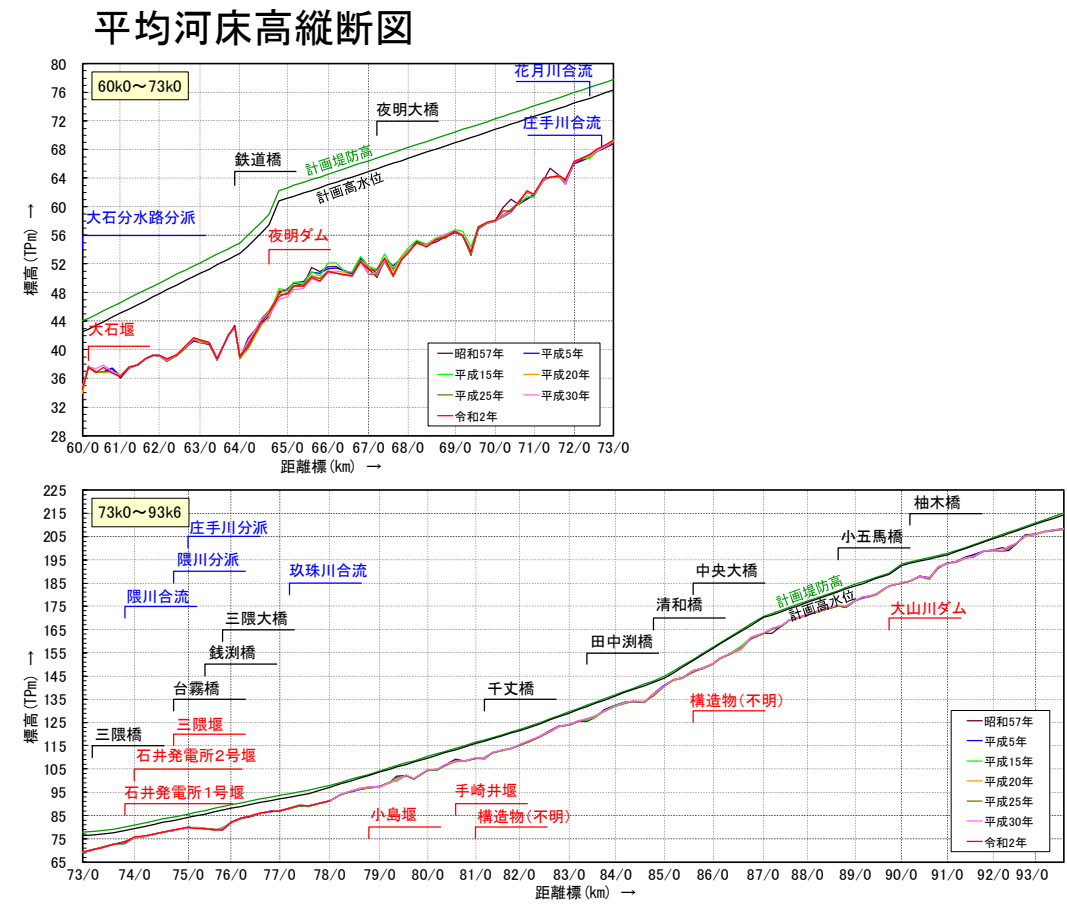
- 平成年代は人為的な改修箇所を除けば、概ね安定傾向であった。
- 近年の斜面崩壊に伴う土砂流出の影響により、特に中流区間では近年堆積傾向である。



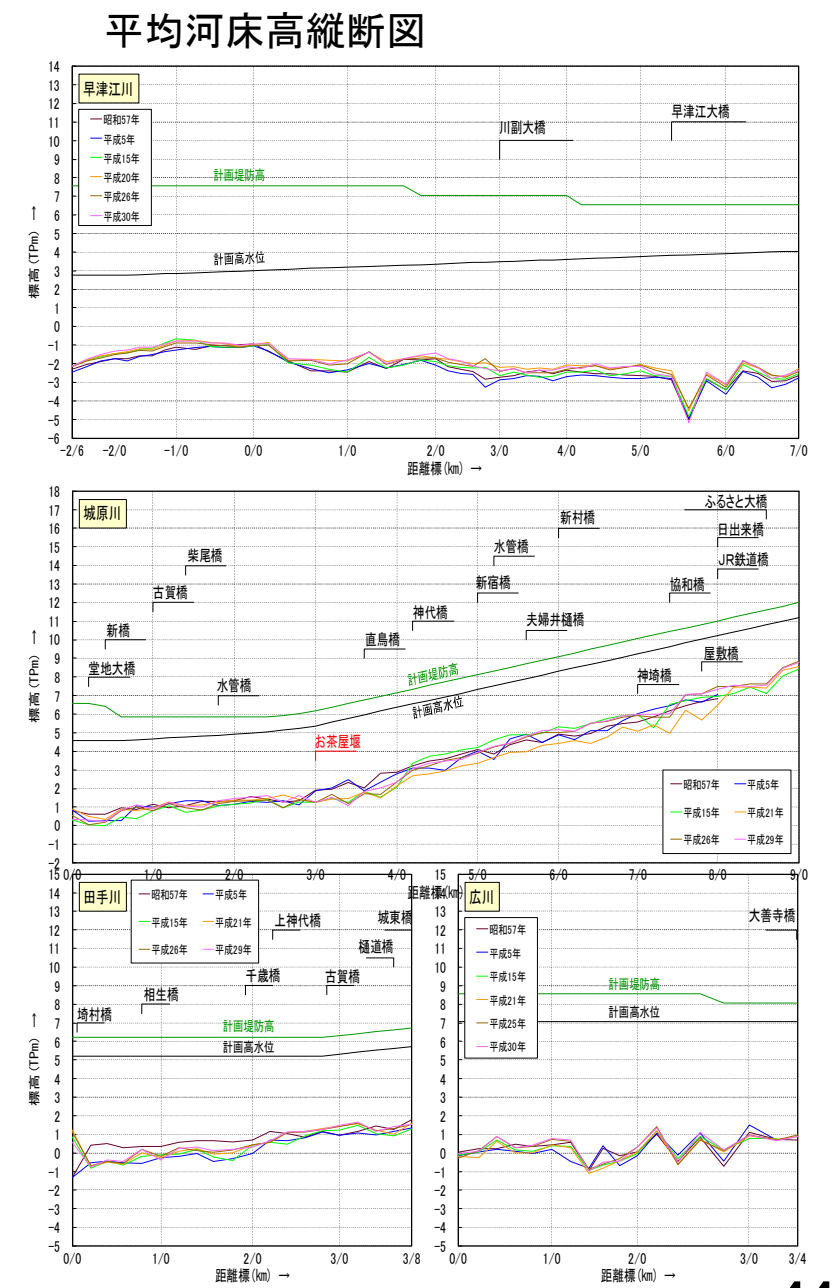
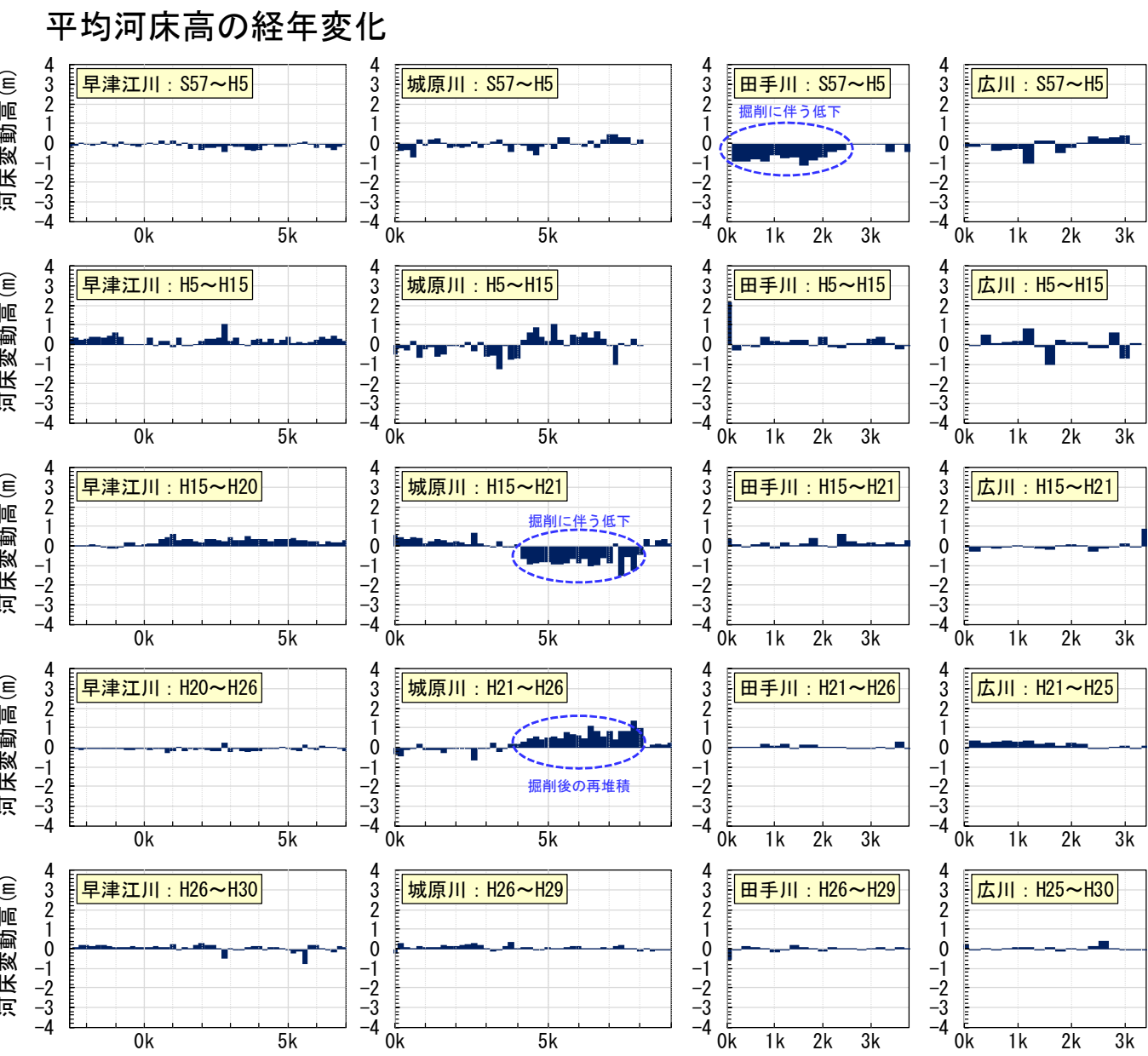
- 平成年代は人為的な改修箇所を除けば、概ね安定傾向であった。
- 近年の斜面崩壊に伴う土砂流出の影響により、特に中流区間では近年堆積傾向である。



- 平成年代は人為的な改修箇所を除けば、概ね安定傾向であった。
- 近年の斜面崩壊に伴う土砂流出の影響により、特に中流区間では近年堆積傾向である。

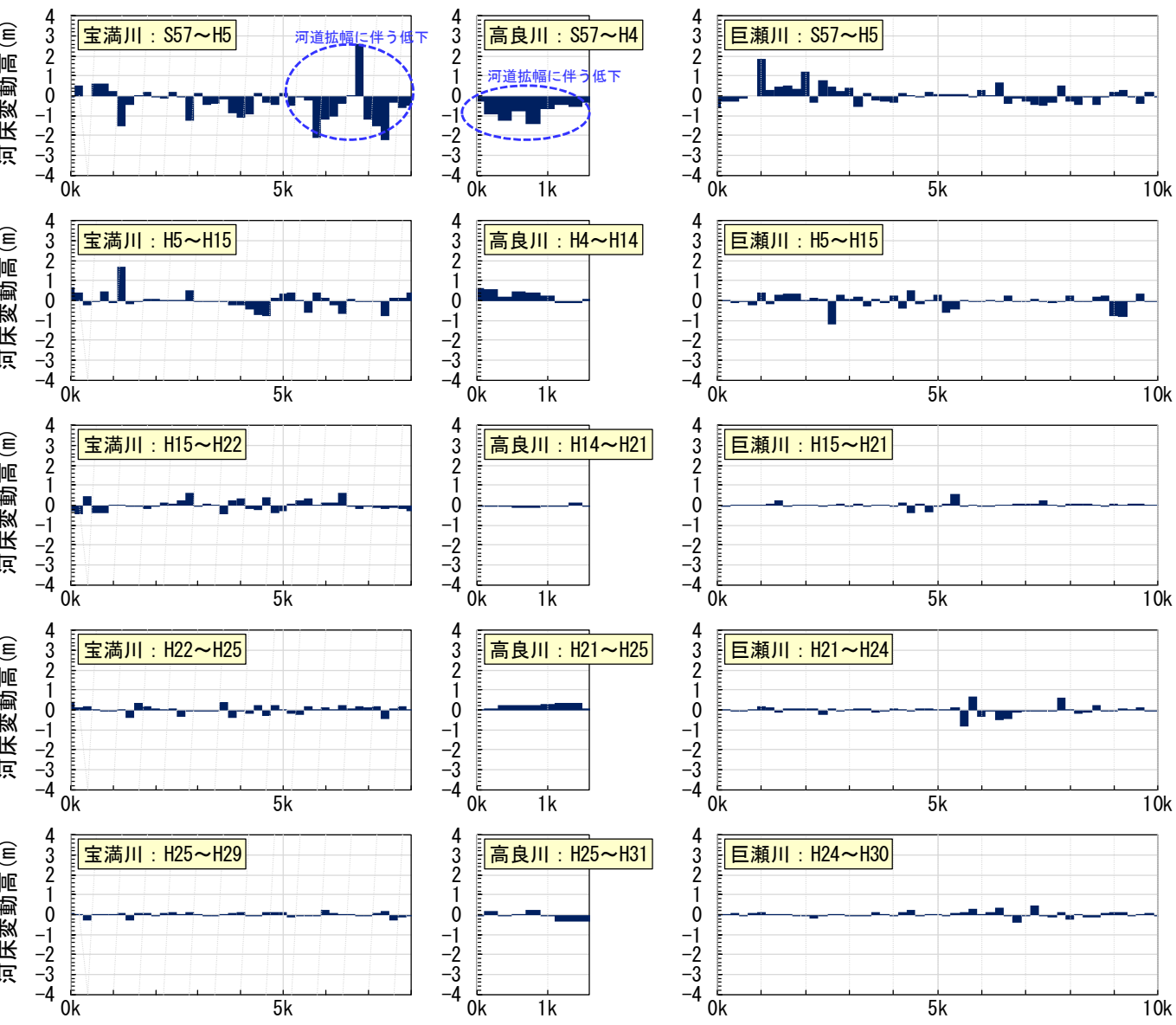


●人為的な改修箇所を除けば、全体的に安定傾向である。

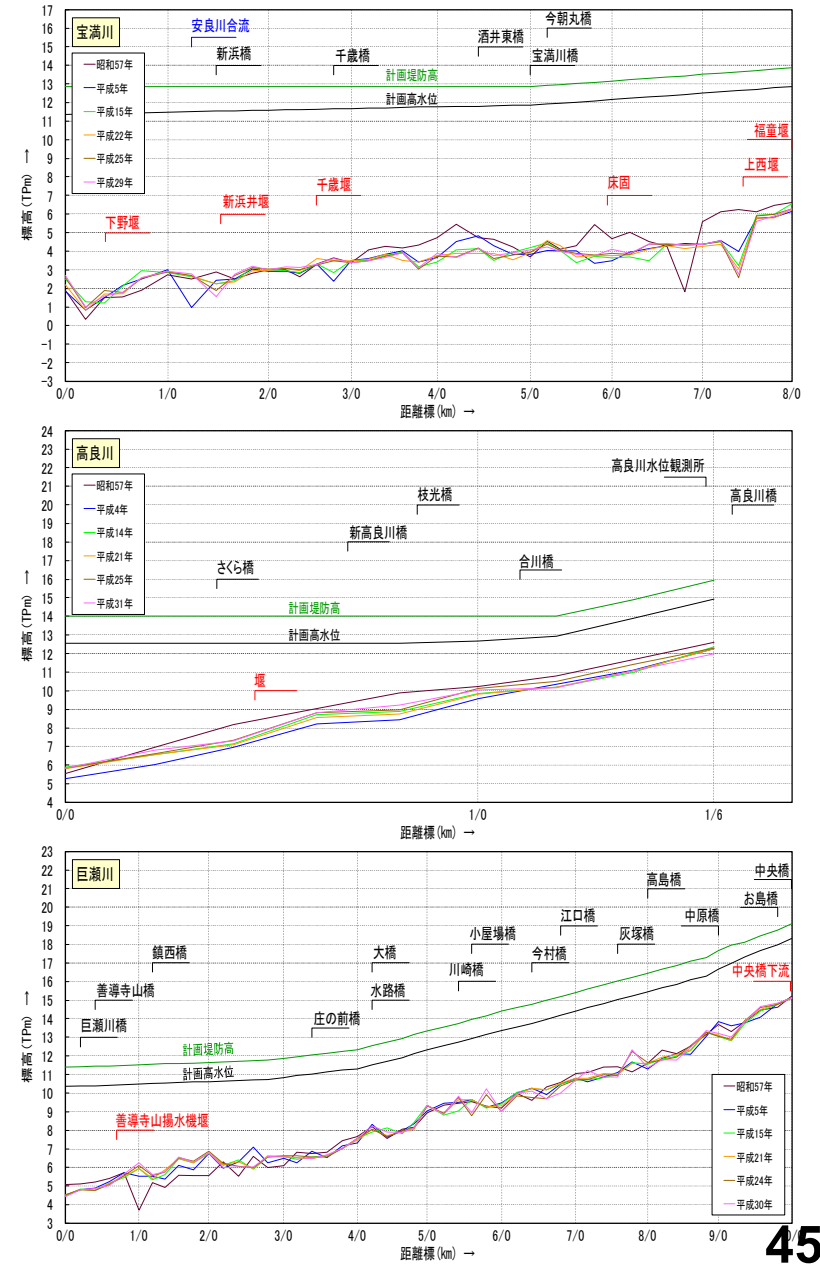


●人為的な改修箇所を除けば、全体的に安定傾向である。

平均河床高の経年変化

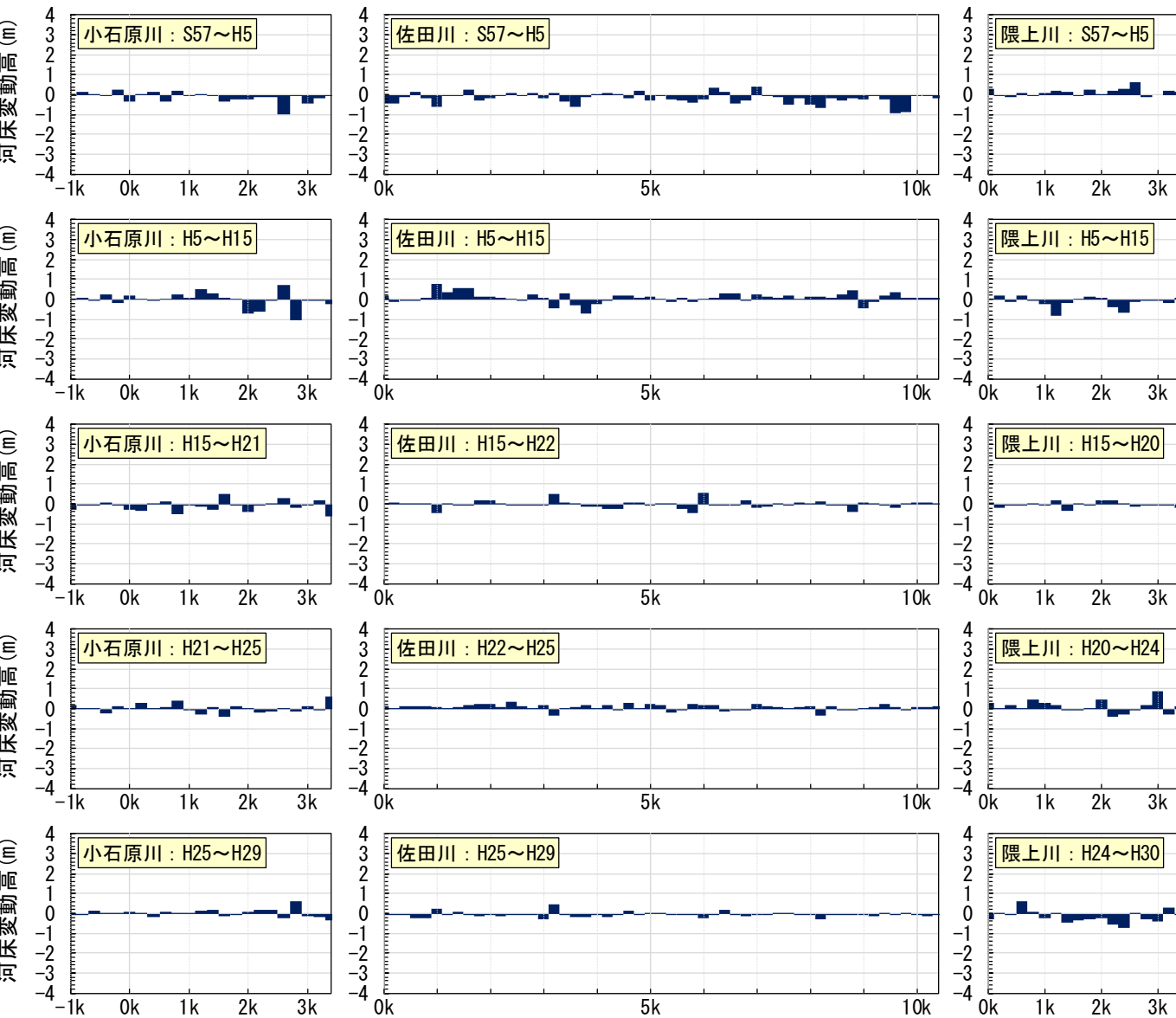


平均河床高縦断面図

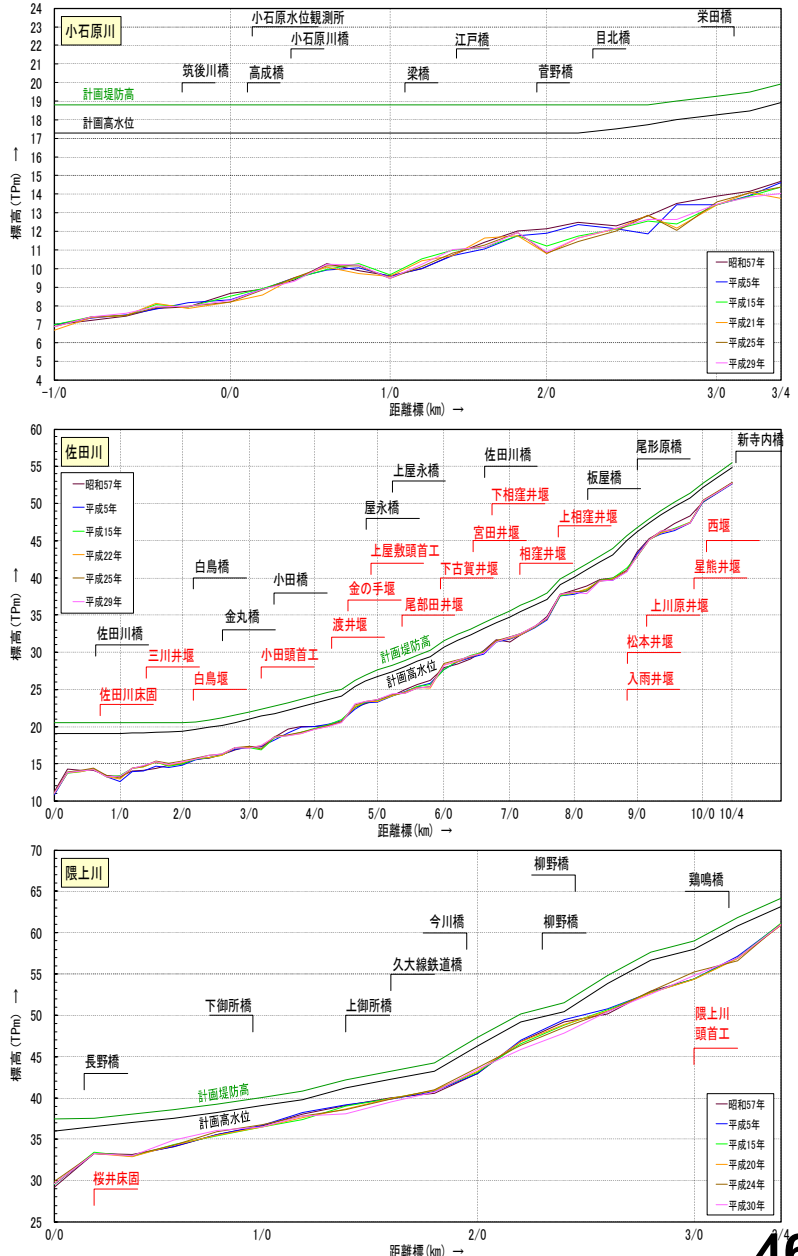


●大きな変動はなく、全体的に安定傾向である。

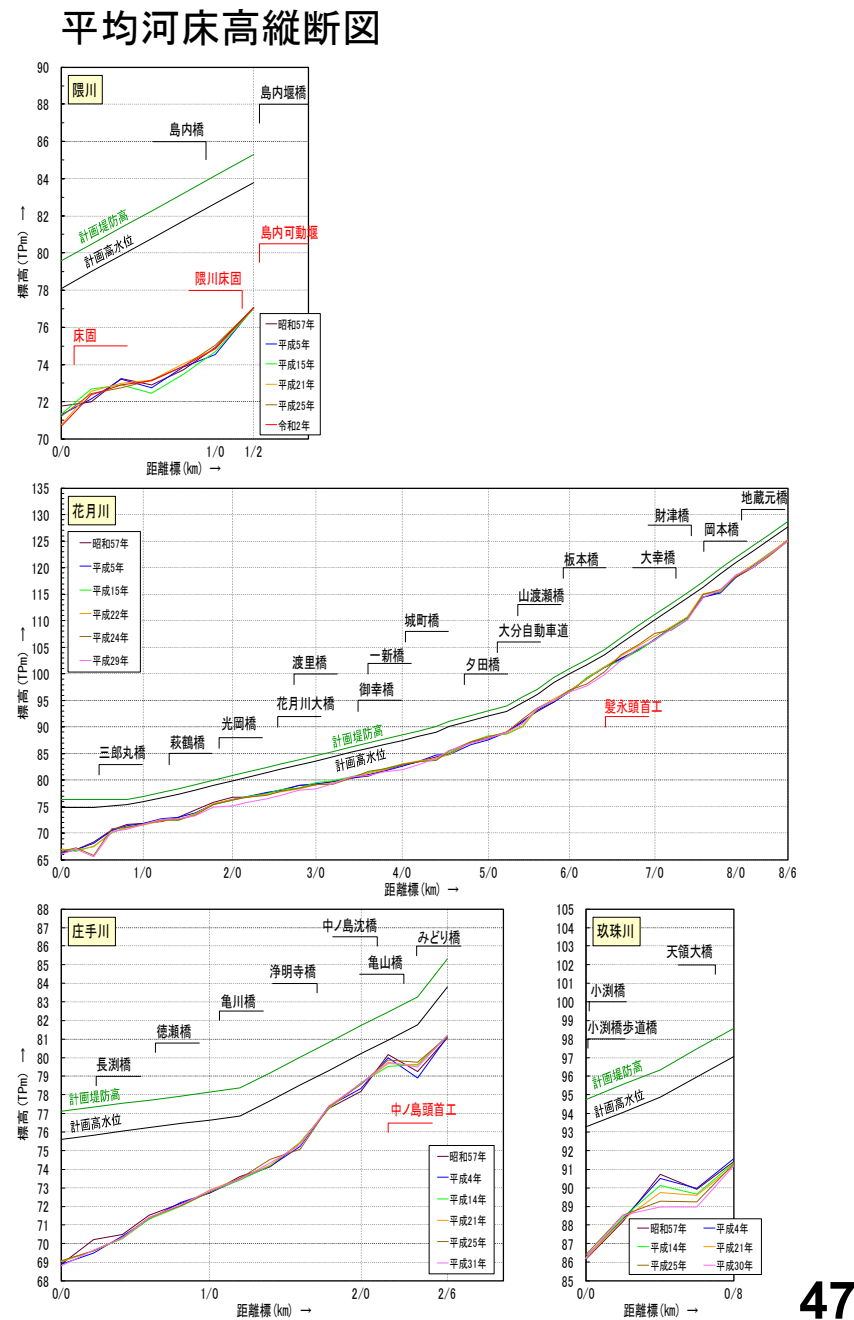
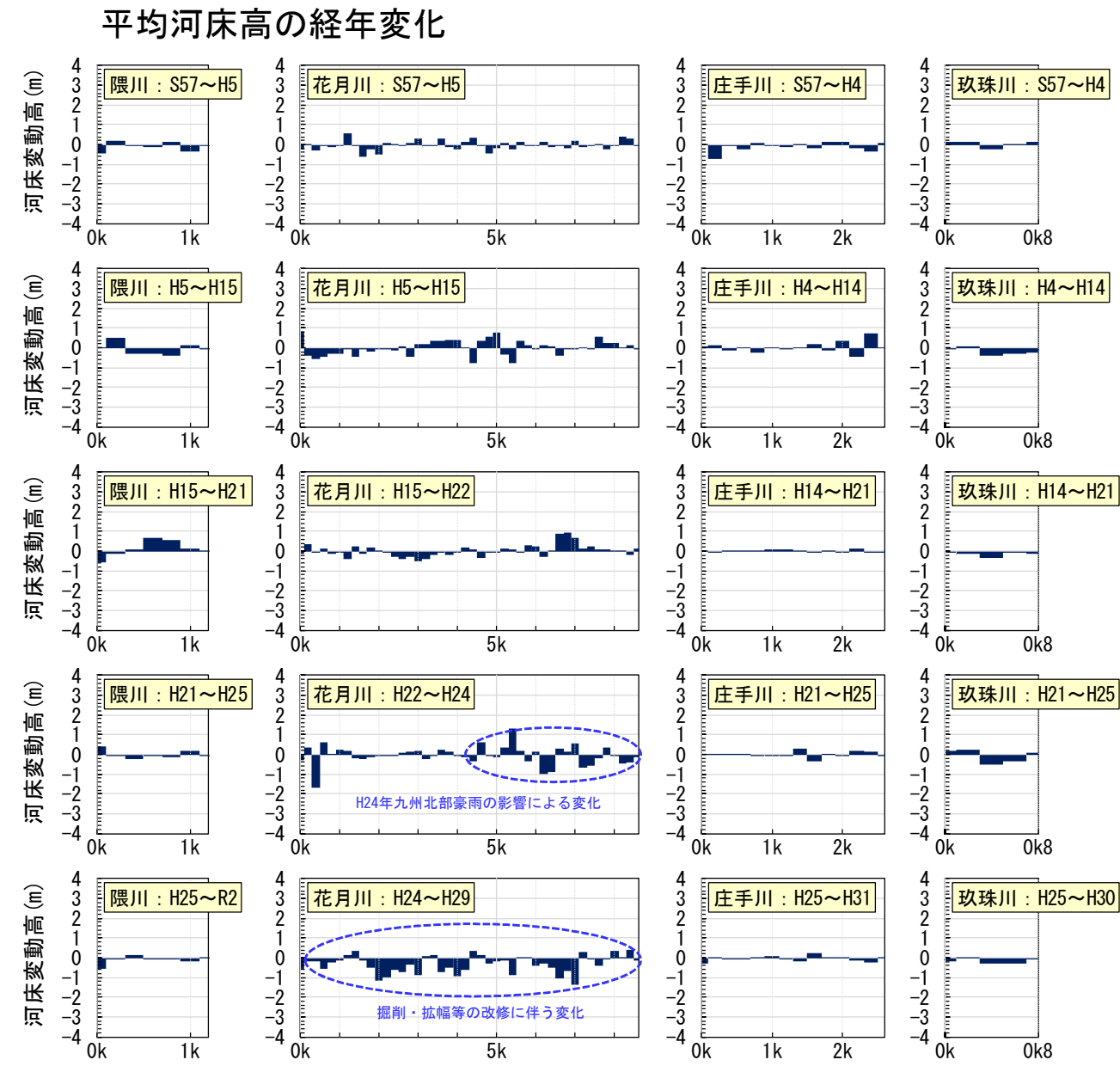
平均河床高の経年変化



平均河床高縦断面図

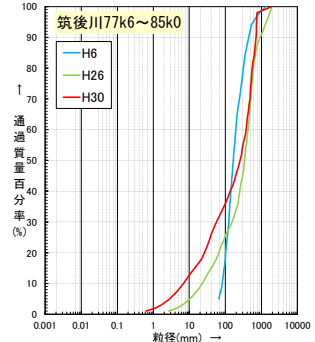
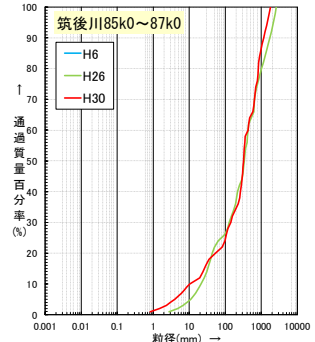
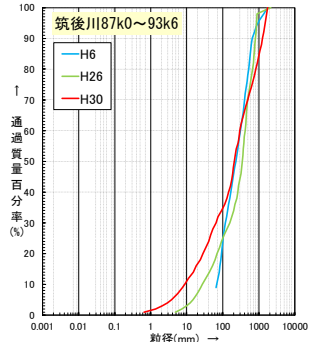
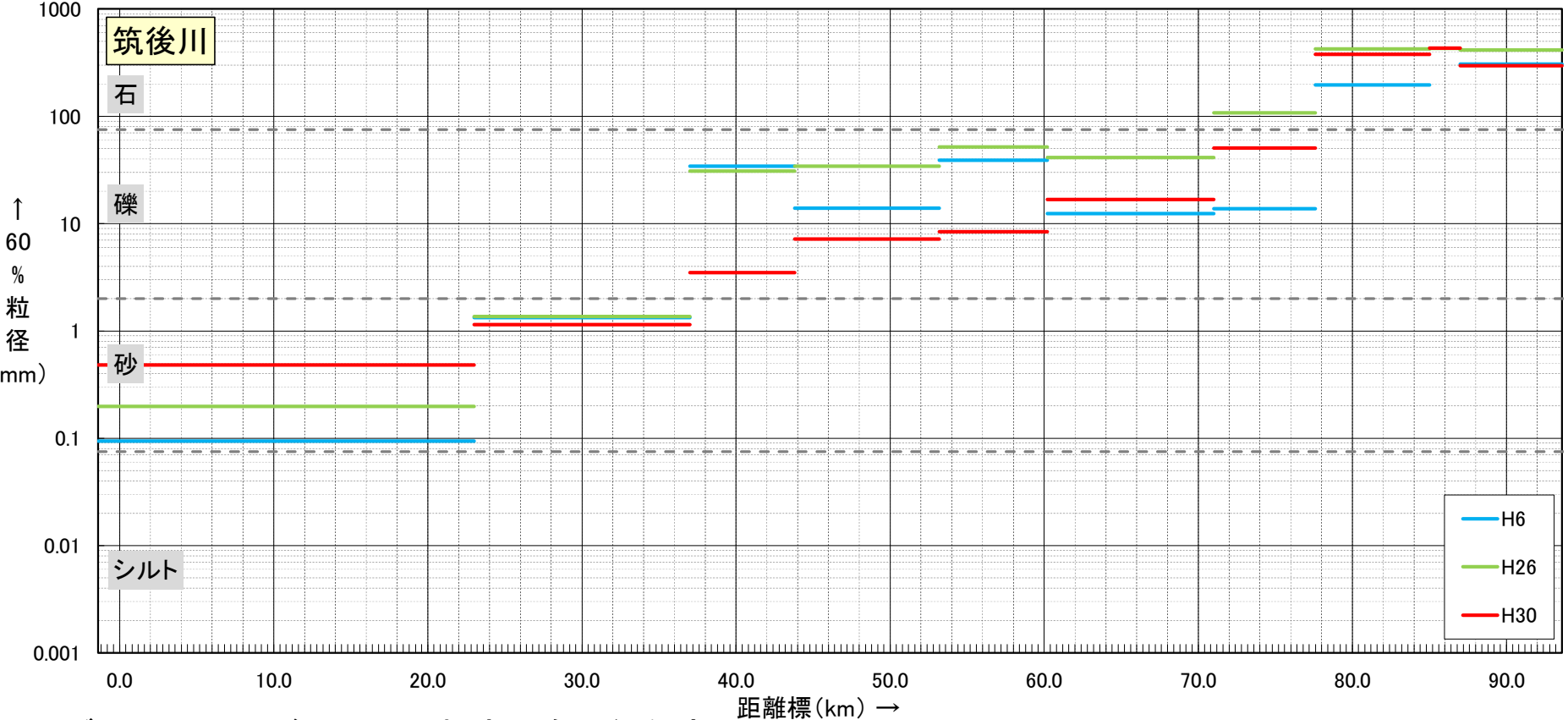


● 近年洪水により部分的に変化が見られるが、人為的な改修箇所を除けば、全体的に安定傾向である。

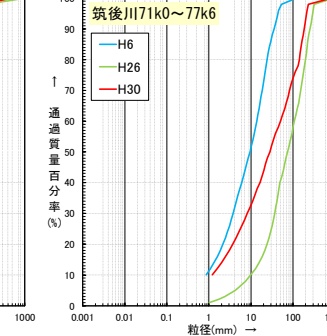
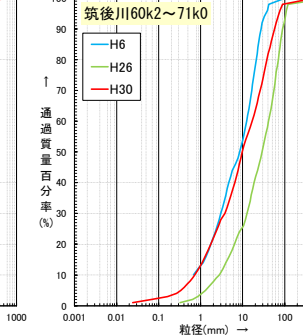
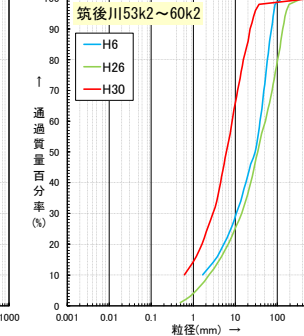
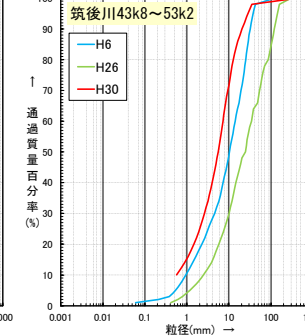
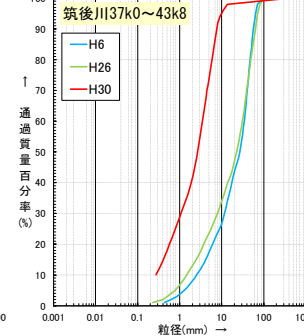
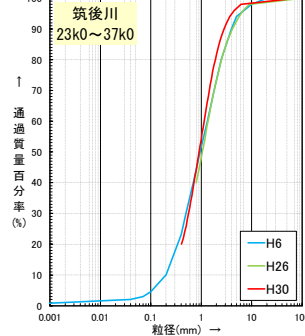
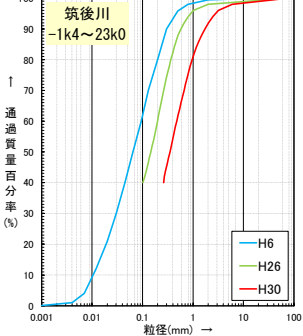


●H29九州北部豪雨後に、中流区間で粒径が小さくなる傾向がみられているものの、構成材料が変化するほどの大きな変化は生じていない。

D60の縦断図（セグメント区間平均値、経年変化）

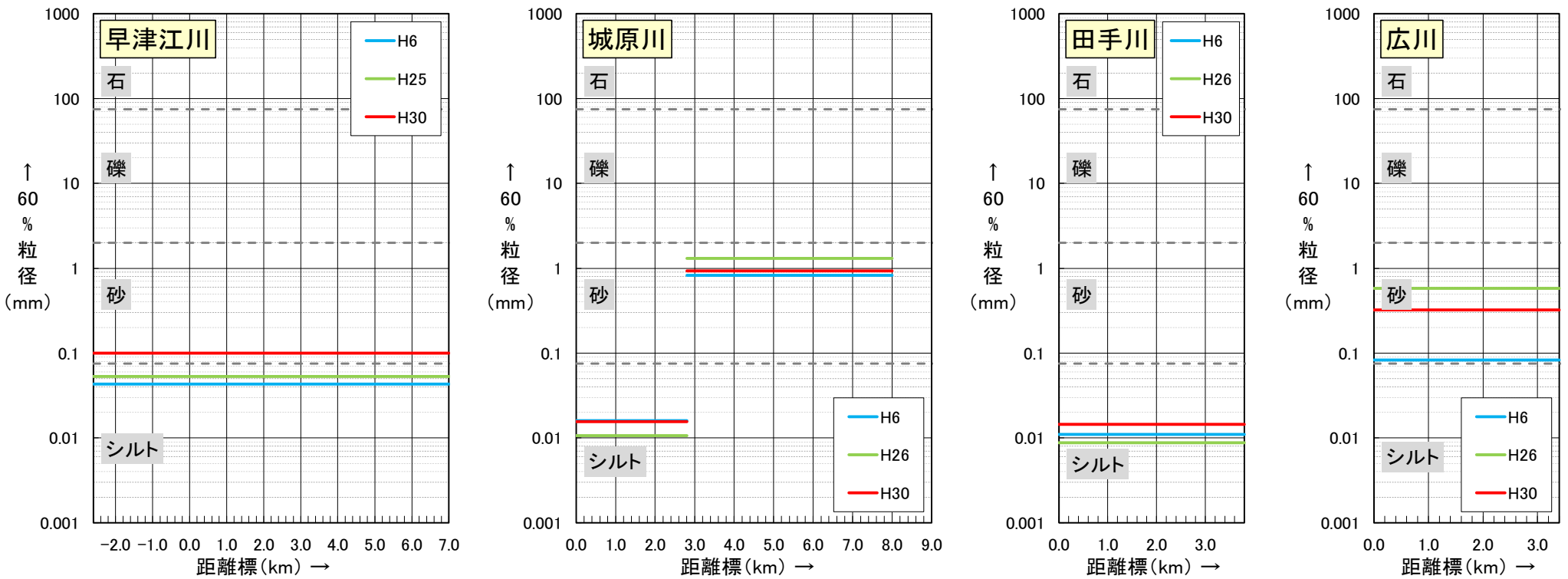


セグメント区間ごとの平均粒度分布、経年変化

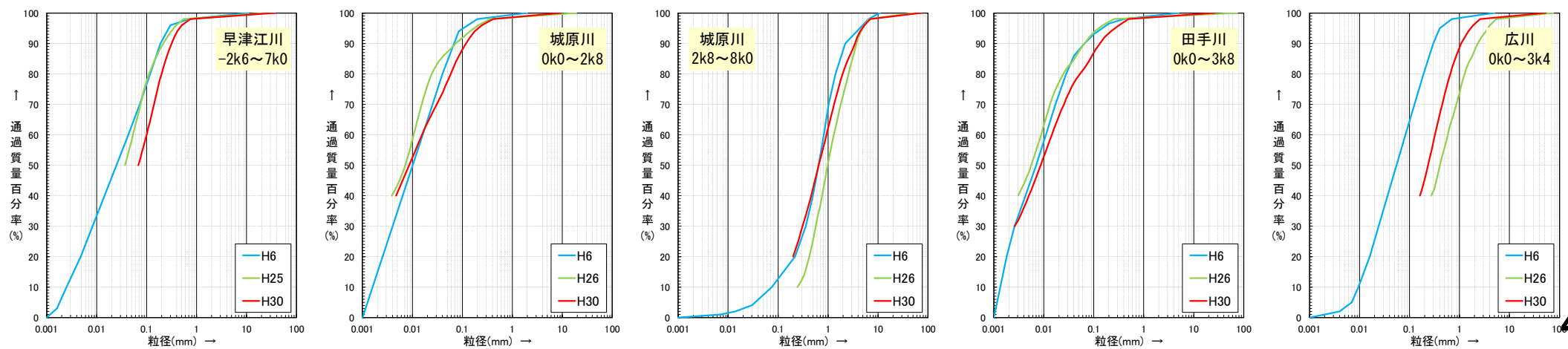


●河床材料の大きな変化はみられない。

D60の縦断図（セグメント区間平均値、経年変化）

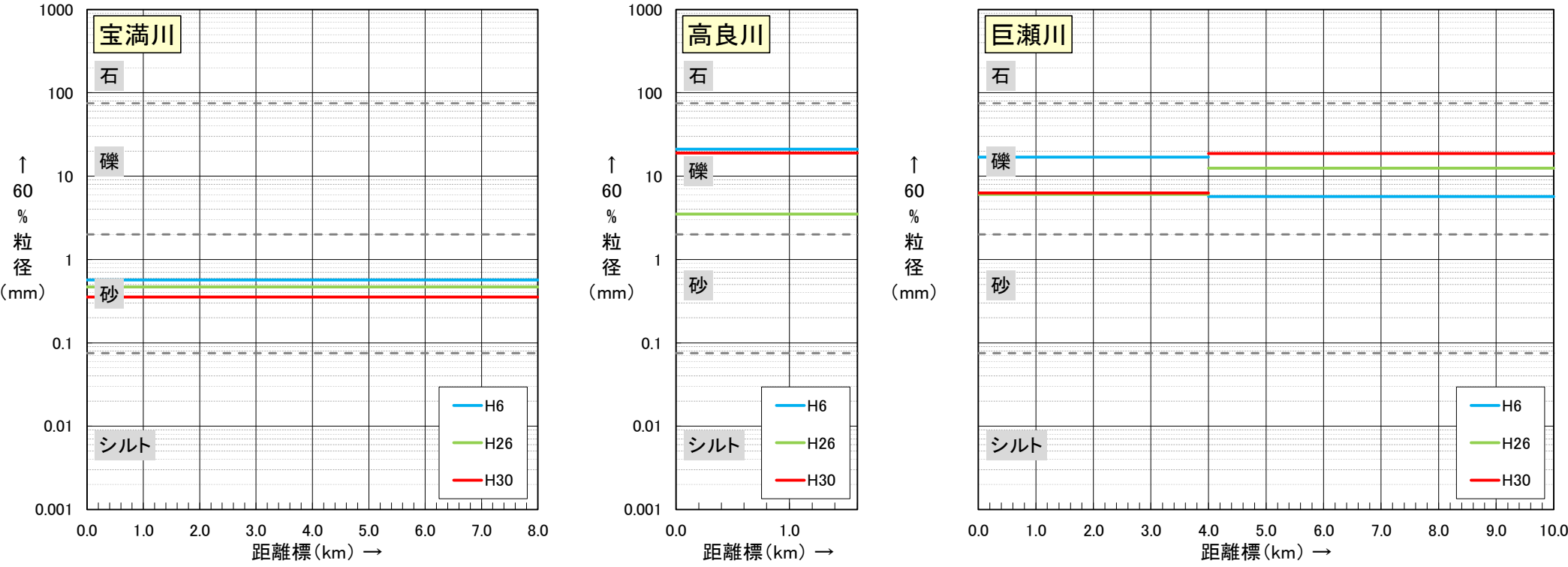


セグメント区間ごとの平均粒度分布、経年変化

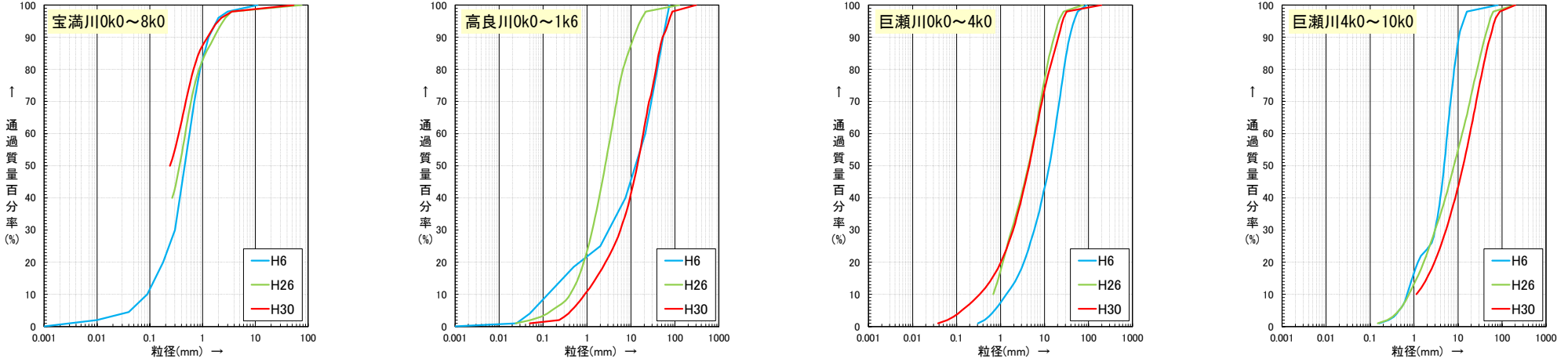


●河床材料の大きな変化はみられない。

D60の縦断図（セグメント区間平均値、経年変化）

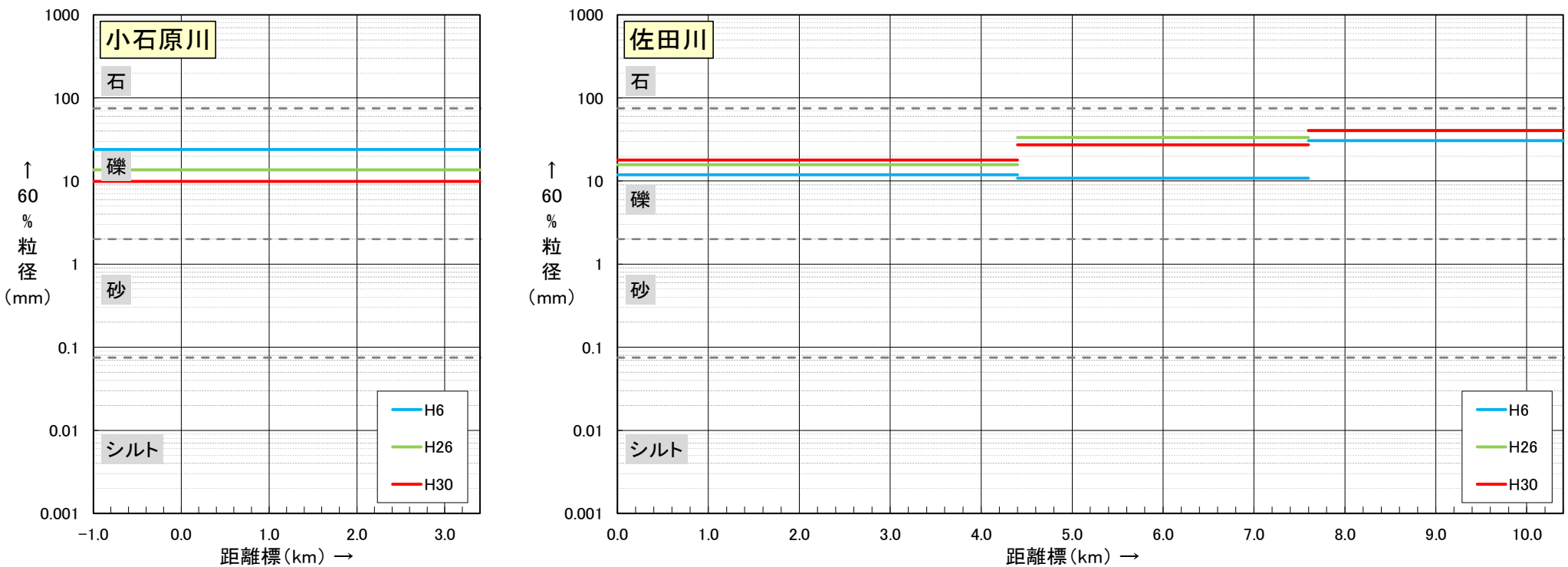


セグメント区間ごとの平均粒度分布、経年変化

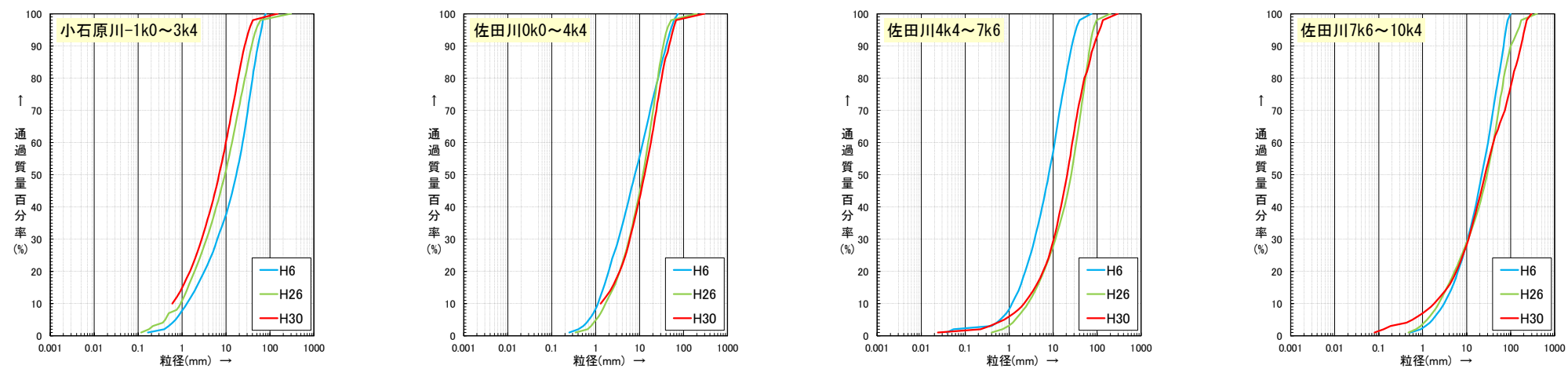


●河床材料の大きな変化はみられない。

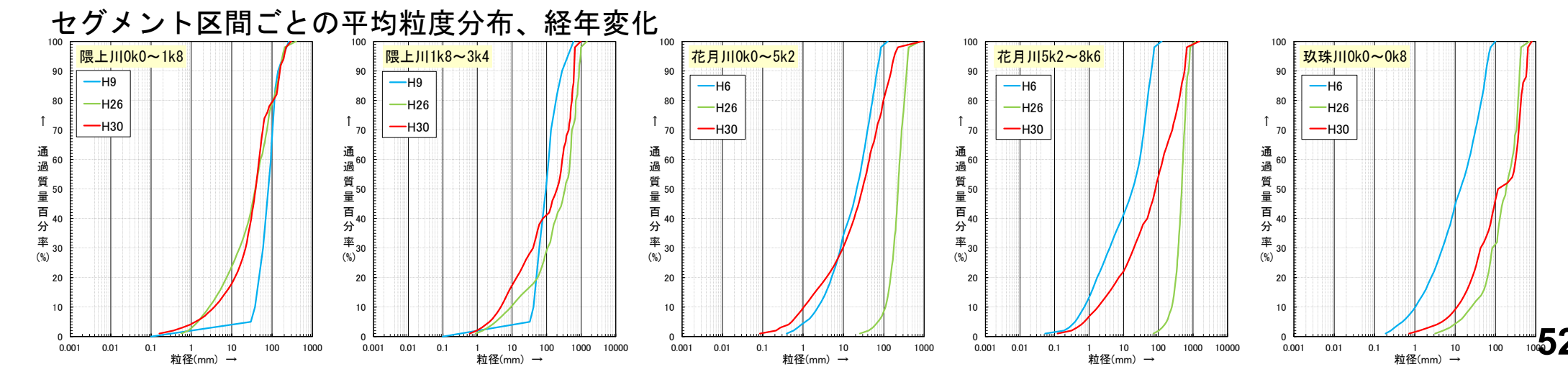
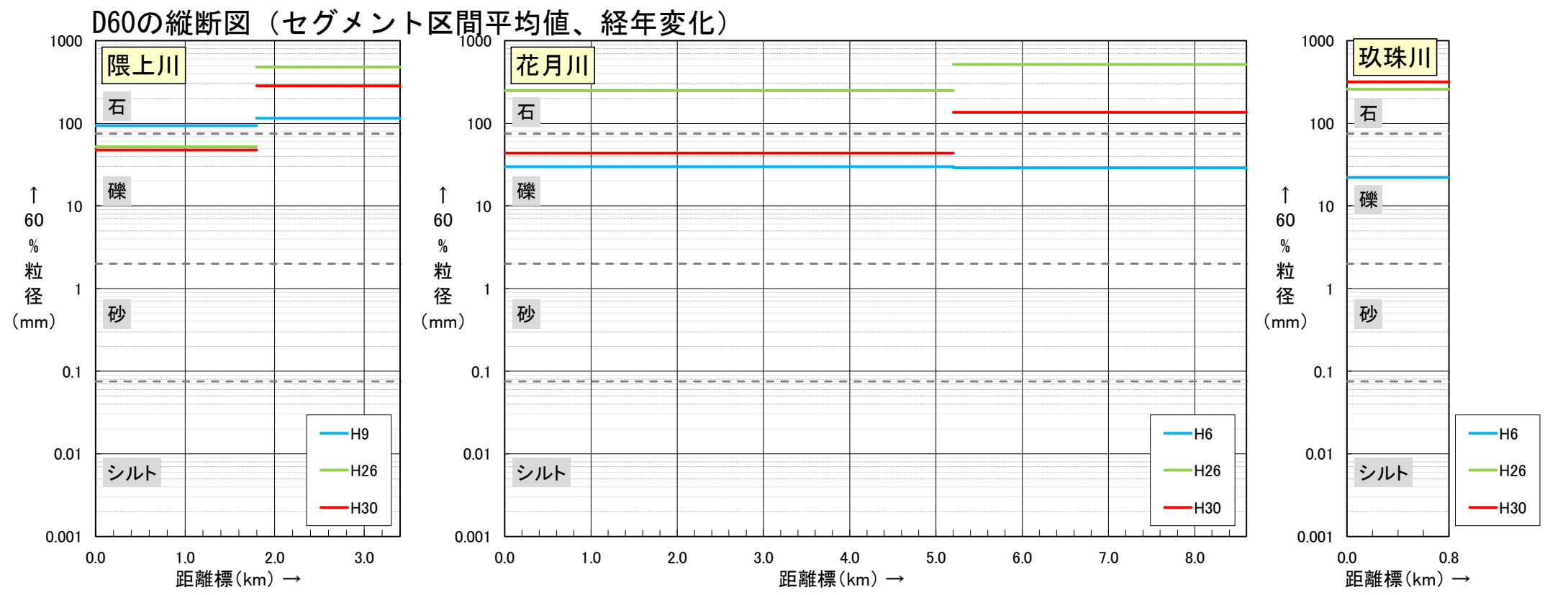
D60の縦断図（セグメント区間平均値、経年変化）



セグメント区間ごとの平均粒度分布、経年変化

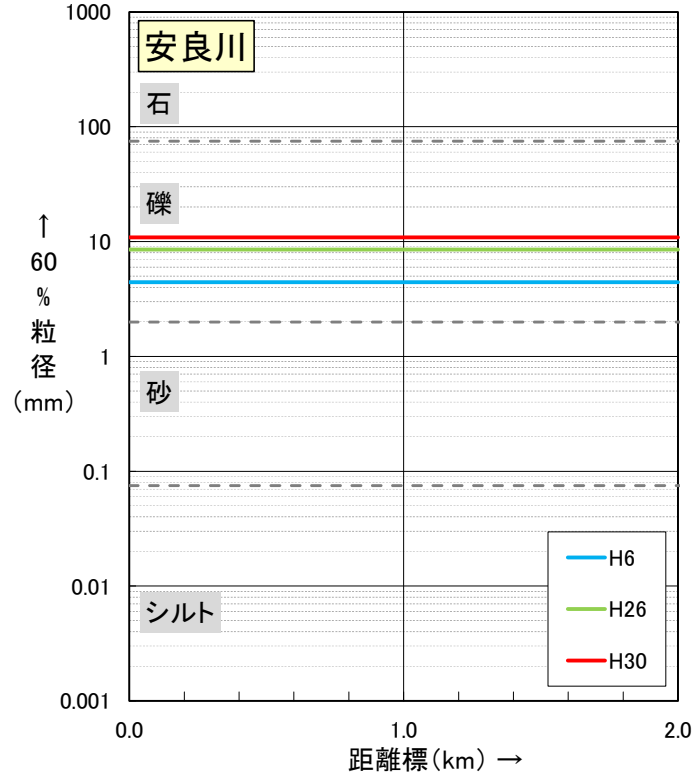
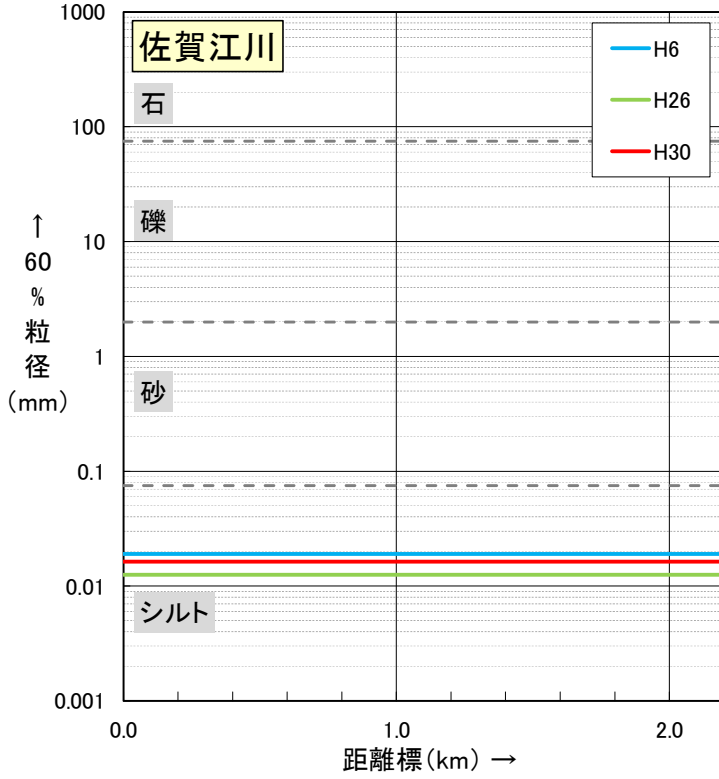
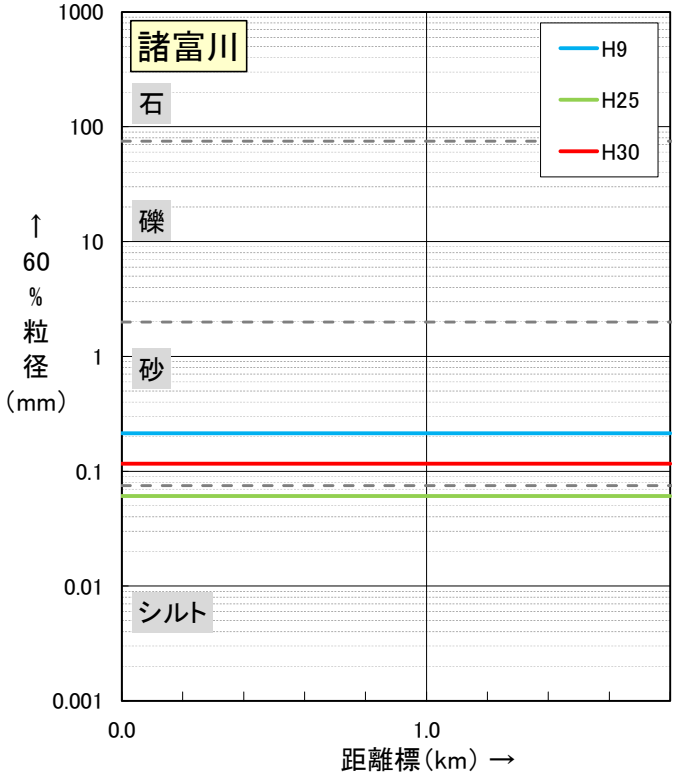


●花月川はH24九州北部豪雨後に粒径が大きくなっているが、近年(H30)は豪雨前の粒径に戻りつつある。

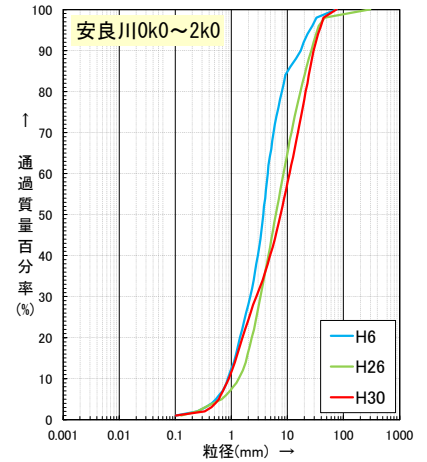
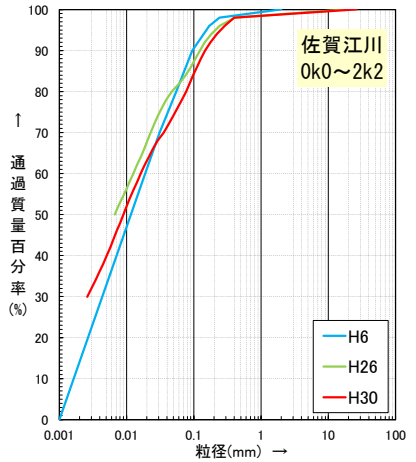
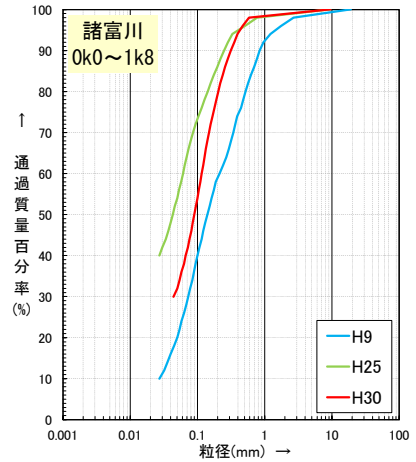


●河床材料の大きな変化はみられない。

D60の縦断図 (セグメント区間平均値、経年変化)



セグメント区間ごとの平均粒度分布、経年変化



- 河口部は、過去に河口閉塞は生じておらず、安定して河口が維持されている。
- 今後も定期的に横断測量等のモニタリングを行い、河道の状況把握に努める。

平成11年10月



令和2年3月



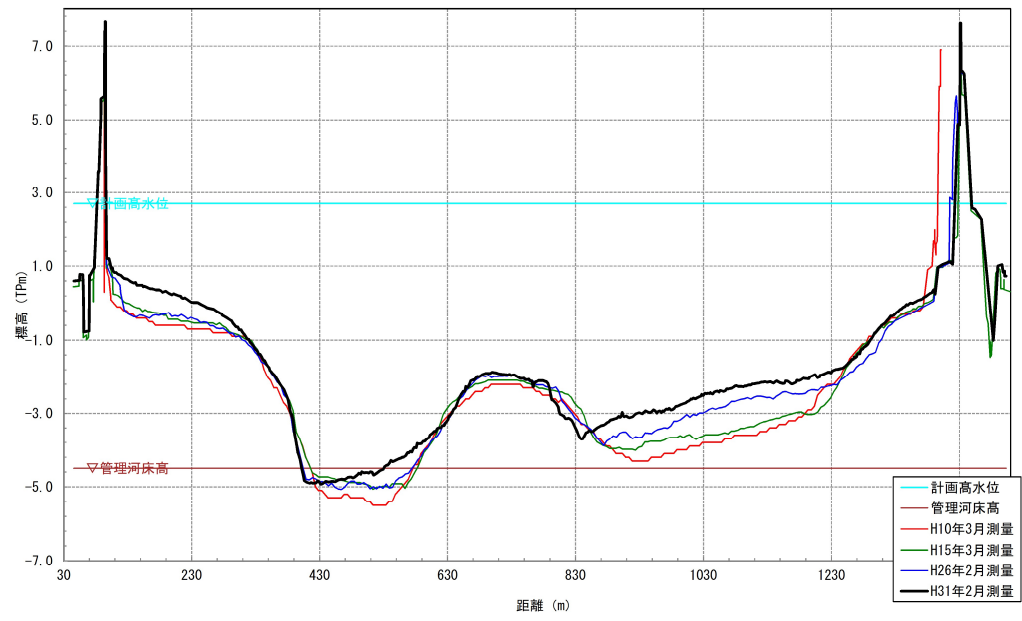
平成20年3月



平成26年3月



筑後川-1.000km



- 河口部は、過去に河口閉塞は生じておらず、安定して河口が維持されている。
- 今後も定期的に横断測量等のモニタリングを行い、河道の状況把握に努める。

平成11年10月



令和2年3月



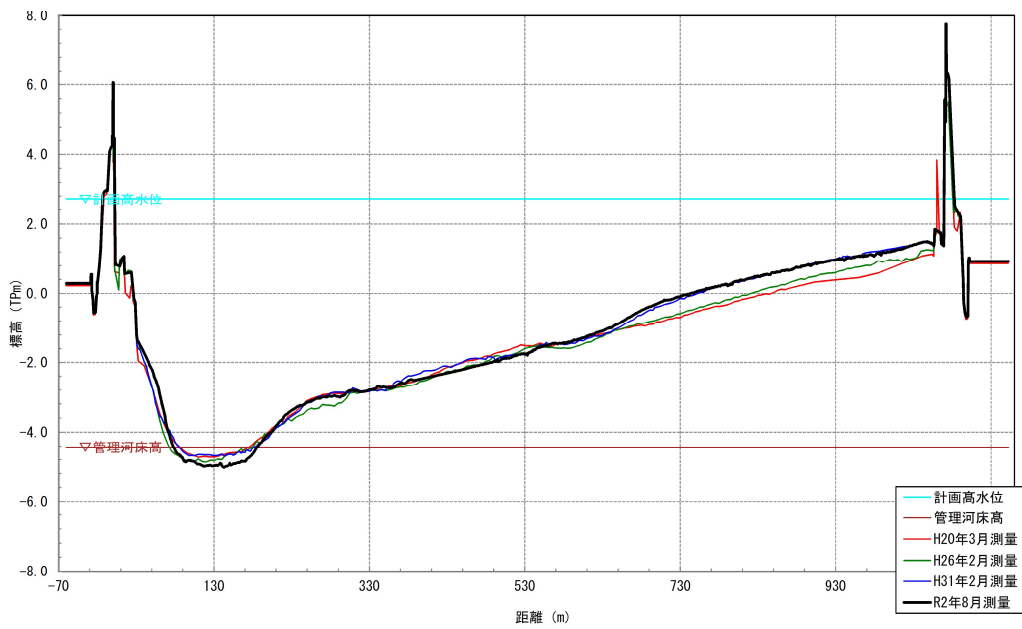
平成20年3月



平成26年3月



早津江川：-1.000km



- 1961～1969（S36～S44）頃以降、干拓による海岸線の変化が一部確認できる。
- 1974～1978（S49～S53）頃以降の海岸線に変化はなく、砂浜の侵食や汀線の移動等もない。

